

安芸地方における瓦器の研究

永田千織・藤野次史・八幡浩二

1. はじめに

瓦器は西日本における中世前期を代表する遺物であり、近年では、編年研究の進展や各地での出土例の増加により中世土器の地域編年検討や中世の交易・流通動向などの考察を行う上で重要な役割を果たしている。安芸地方（広島県西部）における瓦器の集成は何度か行われており、最新成果である橋本久和（2009）によると15遺跡を数える。出土遺跡は広島湾岸と西条盆地に集中的に分布しており、安芸地方南部に分布の中心がある状況は広島県において瓦器が注目され始めた1980年代と大きな変化はないと言える。しかし、両地域における出土例・公表資料の増加や内陸部における新資料の追加など、新たな視点での検討が可能な状況となっている。一方、基礎となるべき安芸地方の土師質土器の研究は、これまで吉野健志などによって編年研究が行われている（吉野1998）が、かならずしも十分進展している状況ではない。層位的出土例や遺構出土一括資料が乏しい安芸地方においては、土師質土器の型式学的検討とともに、瓦器が東播系須恵器、陶磁器など中世前期の編年研究に定点を与える資料であることから、集成を行って各遺跡の状況を整理しておくことは重要な基礎作業であろう。

本稿では、最初に広島大学東広島キャンパス内出土の瓦器について紹介する。出土資料の大半を占める鏡西谷遺跡についてはすでに報告済みである（藤野編2001）が、整理期間等の関係から関連資料について十分掲載することができなかった。本遺跡では約200点の瓦器が出土しており、実測可能な資料をできるだけ収録し、出土状況を含めて説明を行うことで、責を果たしたいと思う。次に、鏡西谷遺跡を中心とする東広島キャンパス内出土の瓦器を検討し、型式学的特徴や地区ごとの様相を明らかにしたい。最後に、安芸地方の瓦器の様相を検討するなかで、鏡西谷遺跡を中心とする東広島キャンパス出土の瓦器の位置づけを行ってみたい。

2. 広島大学東広島キャンパスの瓦器と出土状況

広島大学東広島キャンパスでは、鏡西谷遺跡（藤野・増田2003）と山中池南遺跡



第1図 広島大学東広島キャンパスおよび周辺の中世遺跡分布図

(●は瓦器出土遺跡、○はその他の中世遺跡である。国土地理院1:50,000地形図「海田」(1984年発行)、「竹原」(1985年発行)の一部を利用した。)

1. 鏡西谷遺跡 2. 鏡東谷遺跡 3. 鏡千人塚遺跡 4. 鏡山城跡 5. 山中池南遺跡第1・2地点 6. 清水奥山遺跡 7. 陣ヶ平山城跡
8. 二神山城跡 9. 西中郷遺跡 10. 黄幡1号遺跡 11. 大楨1号遺跡 12. 八幡山城跡 13. 狐ヶ城遺跡 14. 道照遺跡 15. 寺家城跡
16. 山崎1号遺跡 17. 山崎2号遺跡 18. 諏訪面遺跡 19. 大地面遺跡 20. 安芸国分寺跡 21. 安芸国分寺伝承地遺跡
22. 石佛遺跡 23. 鷺田遺跡 24. 向城跡 25. 古慈喜城跡 26. 淨福寺3号遺跡 27. 溝口4号遺跡 28. 荒谷土居屋敷跡
29. 上弘遺跡 30. 下上戸遺跡 31. 五反田遺跡 32. 城平山城跡 33. 第1若山城跡 34. 第2若山城跡 35. 福成寺旧境内遺跡

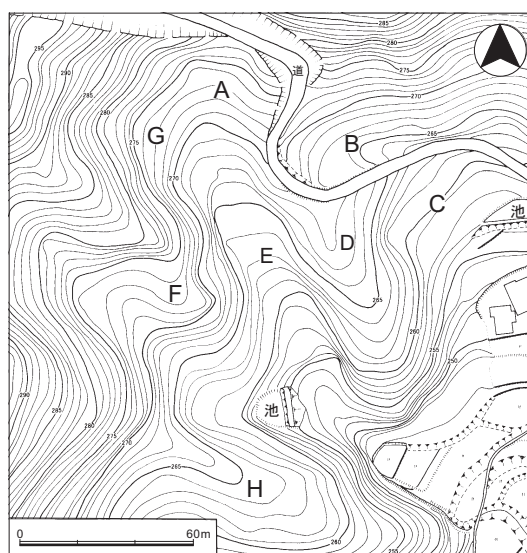
第2地点（藤野編 2005）の2遺跡で瓦器が出土しているが、資料の大半は鏡西谷遺跡C地区1号掘立柱建物S B 01出土品であり、同遺跡B地区、E地区で一定量が出土した。以下、両遺跡出土における瓦器の出土状況と個別資料について説明する。なお、出土資料についてはできるだけ図化し収録するように努めたが、口縁部、底部を除く小破片については掲載していない。なお、個別資料の調整、法量等の詳細については、図面未掲載資料を含め、観察表（付録CD収録の付表1・2）に記載した。

A. 鏡西谷遺跡

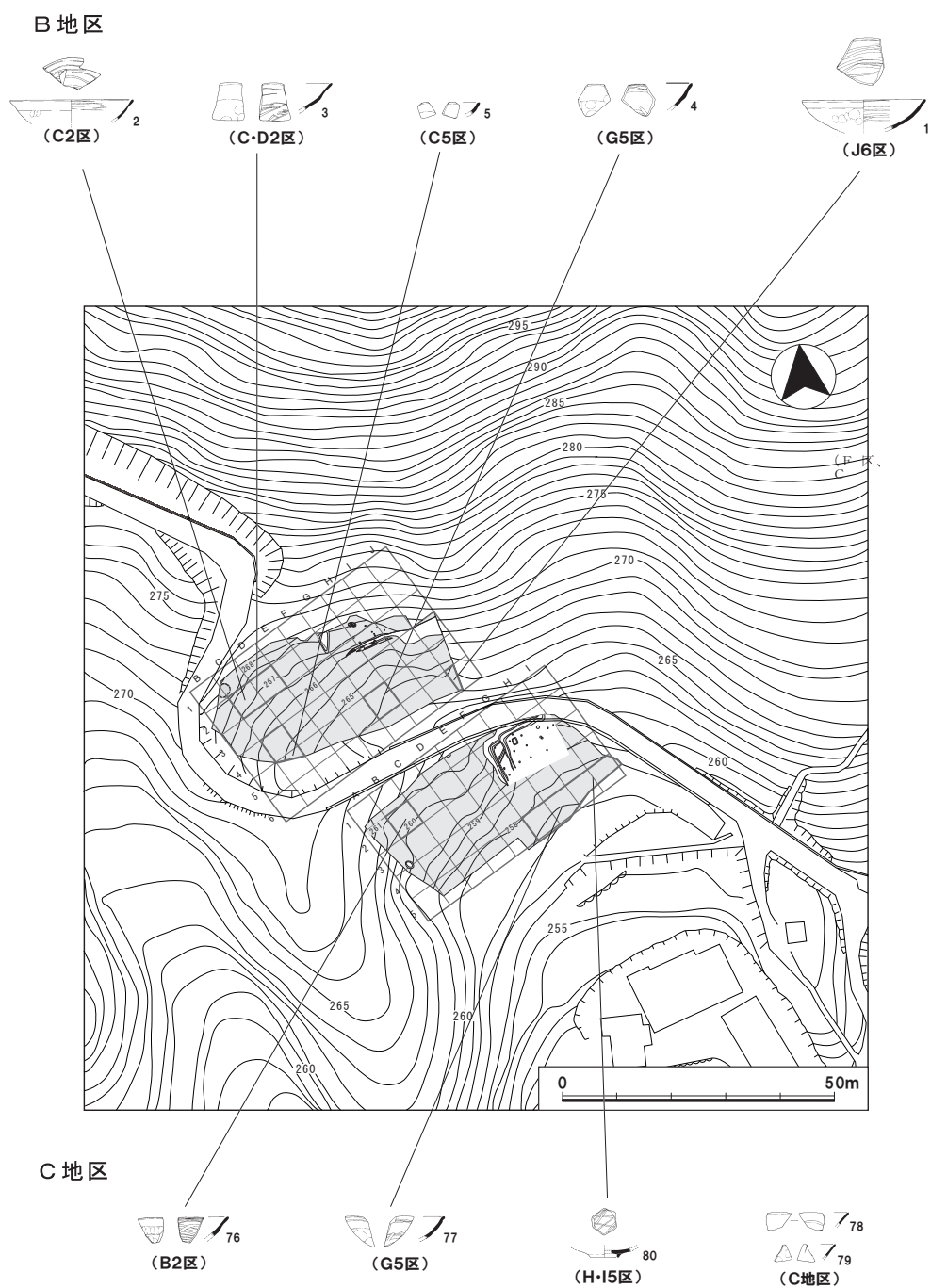
鏡西谷遺跡は広島大学東広島キャンパス東部に位置する農場地区に所在する。農場地区は、国史跡鏡山城跡南麓に広がる盆地状の地形で、鏡山城が築造された鏡山と鏡山から南側へ連なる東西の山塊（ががら山）・丘陵によって周囲を囲まれている。鏡西谷遺跡は盆地状地形の北西端に位置し、低丘陵部に囲まれた低地部、谷部などに立地している。地形などを単位にA～H地区の8地区の調査区に区分して発掘調査が実施され、縄文時代～江戸時代の遺構・遺物が多数検出された。B地区、C地区、D地区、F地区南部では、鎌倉時代、南北朝時代の遺構が検出され、明確な遺構を指摘できないが、E地区でも遺物の出土状況から同時代の人々の活動を窺い知ることができる状況である。鏡西谷遺跡では205点⁽¹⁾の瓦器が出土しており、C地区を中心に上述の各地区に分布していた⁽²⁾。

1) B地区

B地区は鏡西谷遺跡の東北部に位置しており、鏡山南麓裾の緩斜面に立地している。北側は鏡山南麓の急斜面が迫っており、東西を低丘陵に囲まれて、南側に開けた地形で、C地区と同一地形面である。調査区北端部に検出遺構は集中しており、調査区北東部で、溝1条（S D 01）、土墳墓1基（S K 01）、土坑1基（S K 02）、柱穴状ピット群（S X 01）と平坦面、調査区北西端部で平坦面と土師質土器集中部（S X 02）が位置している。溝をはじめとする調査区



第2図 鏡西谷遺跡調査区配置図

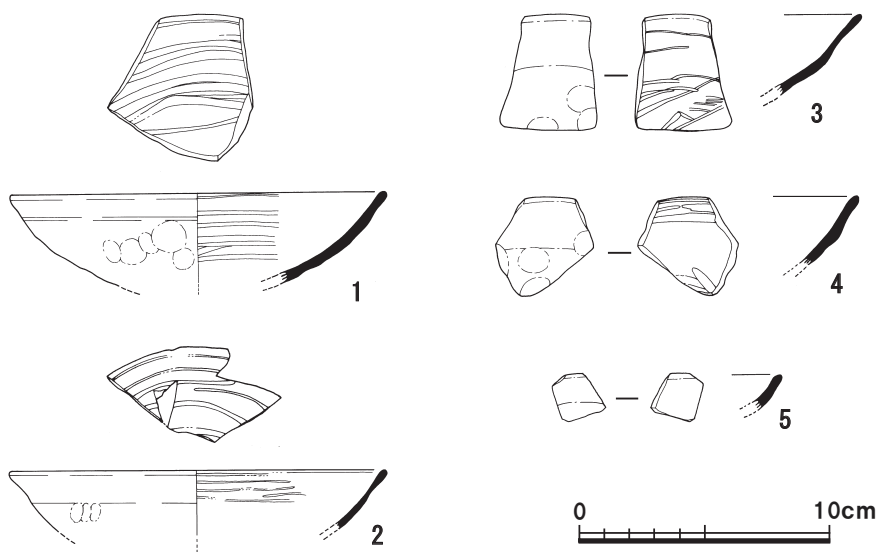


第3図 鏡西谷遺跡 B地区・C地区瓦器出土状況 (C地区 S B 01 を除く)

北東部の遺構群は14世紀後半～15世紀初頭（南北朝時代）を中心とする時期に、調査区北西端部の遺構群は13世紀前葉（鎌倉時代前期）を中心とする時期に位置づけられている（永田・藤野 2009）。

B地区出土の瓦器は7点で、調査区西半部を中心に分布している（第3図）。7点のうち2点（第4図2・3）は調査区北西端部平坦面南斜面部に、2点（第4図2）は調査区南西端部（C5区）に出土しており、出土区を特定できない1点を含めて、出土瓦器の大半が調査区西半（西端部）に分布する。残り2点はG5区、J6区から各1点ずつが出土しており、いずれも調査区南東端部に分布する。

出土瓦器は碗（第4図1～4）が大半で、皿（第4図5）が認められる。碗は外面に指頭押圧調整（以下、指頭調整と略す）が顕著で、口縁部付近にヨコナデ調整（以下、ヨコナデと省略）を施し、内面は同心円状のヘラミガキ調整（以下、ミガキと省略）を施している。外面にミガキは認められず、指頭調整が顕著である。底部が残存している資料がなく、内面に暗文^③が確認できる資料はない。大半が小破片であり、口径を復元できるものはわずかであるが、復元口径14～15cm程度である。内面のミガキは間隔がまばらで、幅が1～2mmの狭いものが多いが、3～4mmとやや幅広のものもある（1）。器形について見ると、口縁部のヨコナデの幅が狭く、体部と境界が連続的で体部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描きながら移行するもの（1）、



第4図 鏡西谷遺跡B地区出土瓦器実測図

ヨコナデの幅は第1の形態と比較するとやや広く、わずかに外反するもの(4)、口縁部のヨコナデの幅が広く、口縁部上半を中心に強くナデられ、口縁部は外反して体部との境が段状となるもの(3)、口縁部が外反し、他のものとは比べて器壁が薄いもの(2)が認められ、バリエーションがある。皿は摩滅しており小破片のため器形などの詳細は不明である。

2) C地区

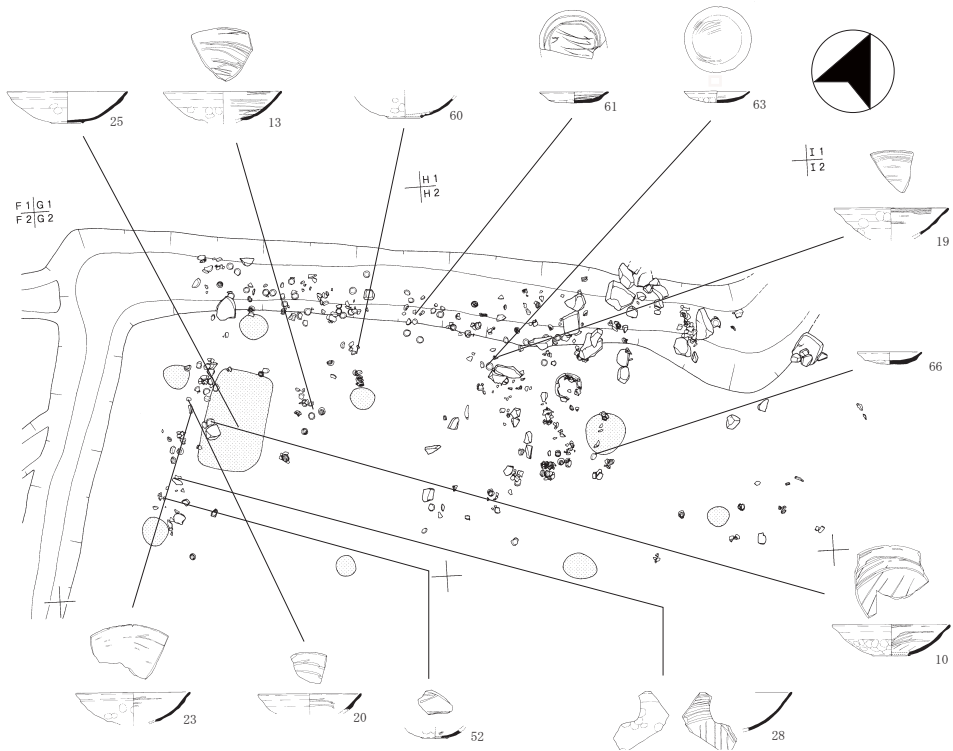
C地区は鏡西谷遺跡の東部に位置しており、B地区の南側隣接地である。B地区同様に南側へ向かって緩やかに傾斜する地形であるが、その傾斜は一層緩やかで、調査区の南端部で段が形成され、一段下がってさらに平坦な地形が南側に広がっていた(一段低い平坦地形には民家が位置していた)。調査区の西側はD地区が立地する低丘陵で、南側へ向かって平坦面が延び、東側も同様な低丘陵が南側に延びていた。調査区北西部は西側のD地区の丘陵から派生するようにやや高まった地形で、その東端部を掘り込んで1号掘立柱建物(SB01)が構築されていた。SB01は東西3間、南北2間の総柱建物で、北側及び東側を溝(SD01・02)がめぐっている。SB01の北部には1号土坑(SK01)が構築されていた。SB01からは青磁、東播系須恵器、土師質土器、石鍋、鉄製鎌などの遺物が良好な形で出土した。また、調査区東半部では中世の遺構は検出されていないが、青磁、備前焼、土師質土器など、13世紀～15世紀代の遺物が一定量分布している(永田・藤野2009)。

C地区出土の瓦器は141点で、大半はSB01(117点)から出土している。SB01出土の瓦器は、青磁(同安窯系、龍泉窯系)、東播系須恵器、土師質土器などと共に出土した一括遺物である。出土遺物はSB01北半部中央のG2区およびH2区西半

第1表 鏡西谷遺跡C地区瓦器出土状況一覧

東西列 南北列	B	D	E~G	F	F・G	G	G・H	H	H・I	I	不明	合計
1・2		2										
2	4	3	1	6		64	15	18	2			109
3	1							10		2		13
3・4								1	2			3
4								1		2		3
5					1	1		1	2			5
不明											4	4
合計	5	5	1	6	1	65	15	31	6	4	4	141

※灰色部分はSB01の位置する調査区である



第5図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 瓦器および遺物出土状況

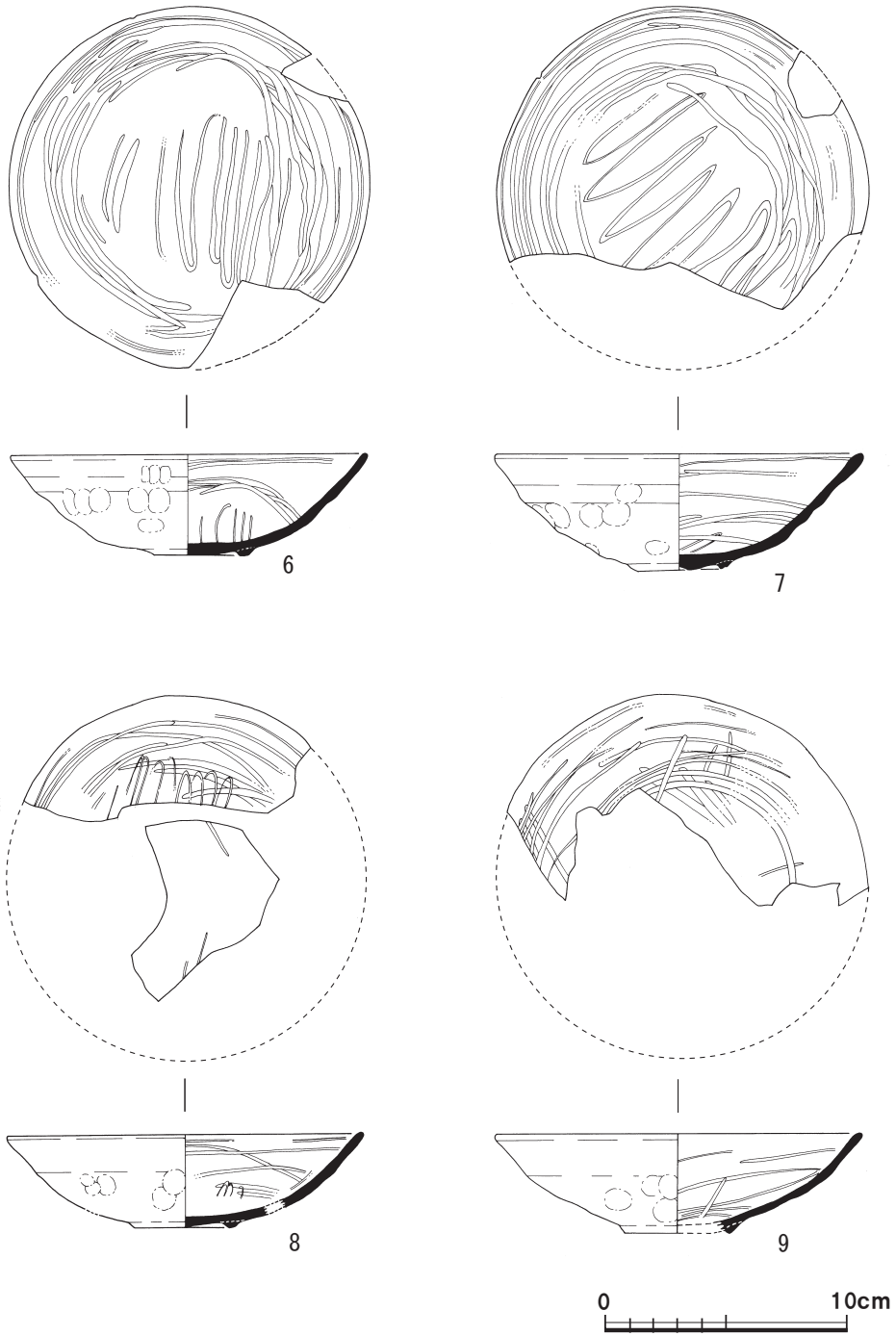
を中心に分布しており、特にG2区中央部のS K 01周辺、S K 01北側の1号溝S D 01付近、H2区北西部に集中している（第5図）。瓦器の分布も基本的に遺物全体の分布状況に一致しているが、特にG2区に集中する様相を見せ、64点が出土している。さらに、原位置を記録せずに取り上げた出土遺物のうち、G・H2区と記録されている遺物が15点あり、これらのうち一定量がG2区に帰属すると仮定すれば、全体の6～7割がG2区（中央部）から出土していると想定できる（S K 01出土資料を含める）。この他にS B 01南半部のH3区で10点、I3区で2点が出土しており、S B 01南西部にも一定量の分布が認められ、H・I-3・4区出土2点を含めて、S B 01北半部H2区西部の集中部に連続する分布である。また、S B 01南側に隣接したH4区で1点、I4区で2点の出土があり、S B 01からの流出遺物と見られる。さらに、その南側のF5区、G5区、H5区、H・I-5区で少量（5点）の出土が認められ（第3図）、基本的にはS B 01から流出したものと想定されるが、付近ではS B 01とは異なる時期の陶磁器が出土していることから、出土瓦器についても異なる時期の資料が含まれている可能性はある。また、B2区で4点、B3区で1点瓦器が出土しており、わずかながら

調査区西北部にも分布している（第3図）。

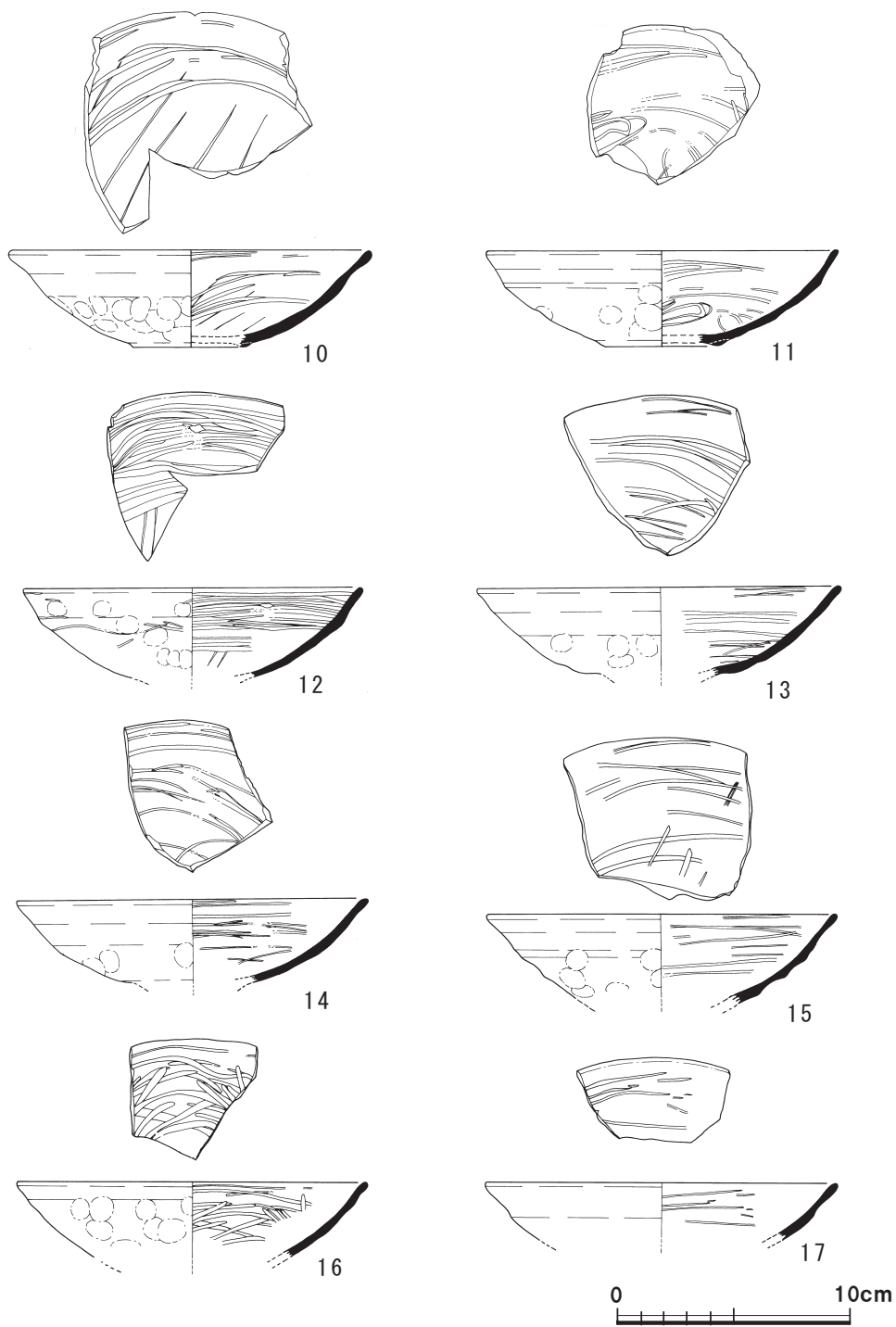
C地区出土の瓦器は埴（第6図～第9図、第10図51～60、第11図76～80）を主体とし、皿（第10図61～74）が一定量認められる。出土の主体となるSB01出土資料の特徴から見てみよう。埴（6～60）が98点あり、組成の主体であり、皿は18点で一定量を占めている（付表1）。口径8～9cm程度の小皿である。この他に、坏1点（75）、坏または皿1点（図版5-135）を組成している。

埴は外面に指頭調整が顕著で、口縁部付近にヨコナデを施し、内面は同心円状のミガキを施している。外面にわずかにミガキ様の調整が認められるものもあるが、基本的に外面にミガキは行っていない。法量がわかるものを見てみると、口径は15cm前後、底径は4～5cmの間におさまるものが多い。器形はB地区同様にバリエーションが見られ、口縁部のヨコナデ幅が広く、直線的なもの（6～8など）、口縁部がヨコナデによって外反し、体部との境が段状となるもの（10・15・31など）、口縁部のヨコナデ幅が狭いもの（13・23・25）などが見られる。また、体部の形状が内湾するもの（6・8）と比較的直線的なもの（9・11）が見られる。高台は粘土紐を貼付けたものが主体と思われ、高台及び周辺はヨコナデである。高台には断面方形状・三角形状・半円状のものがあるが、部分によって方形状であったり半円状であったりと、形状が安定しない個体も見られる。内面には口縁部から体部にかけておおむね圏線状のミガキが施されており、見込みに暗文を施しているものが多い。全体が確認できるものは少ないが、ジグザグ状を呈するもの（7）、連結輪状を呈するもの（56）、平行線を形成するもの（10・12・28・54・55）が確認できる。これらの類型に含まれない暗文も若干観察される。6は片側の先が閉じておらず、ジグザグ状に近いがやや異なっている。また、13は高台が残っていないが、見込み付近まで体部と同様の圏線状が見られる。ジグザグ状など、先にあげたような見込みの暗文はおおむね体部下半まで延びているが、22にはそのような暗文は見られず、13は見込みにも体部と同様の圏線状の暗文が施されていた可能性があると思われる。なお、暗文と圏線状ミガキの切合いを観察すると、ミガキを先に施し、後から暗文を施すもの（6・8）と、先に暗文を施し、その後体部にミガキを施すもの（7・10・12）がある。

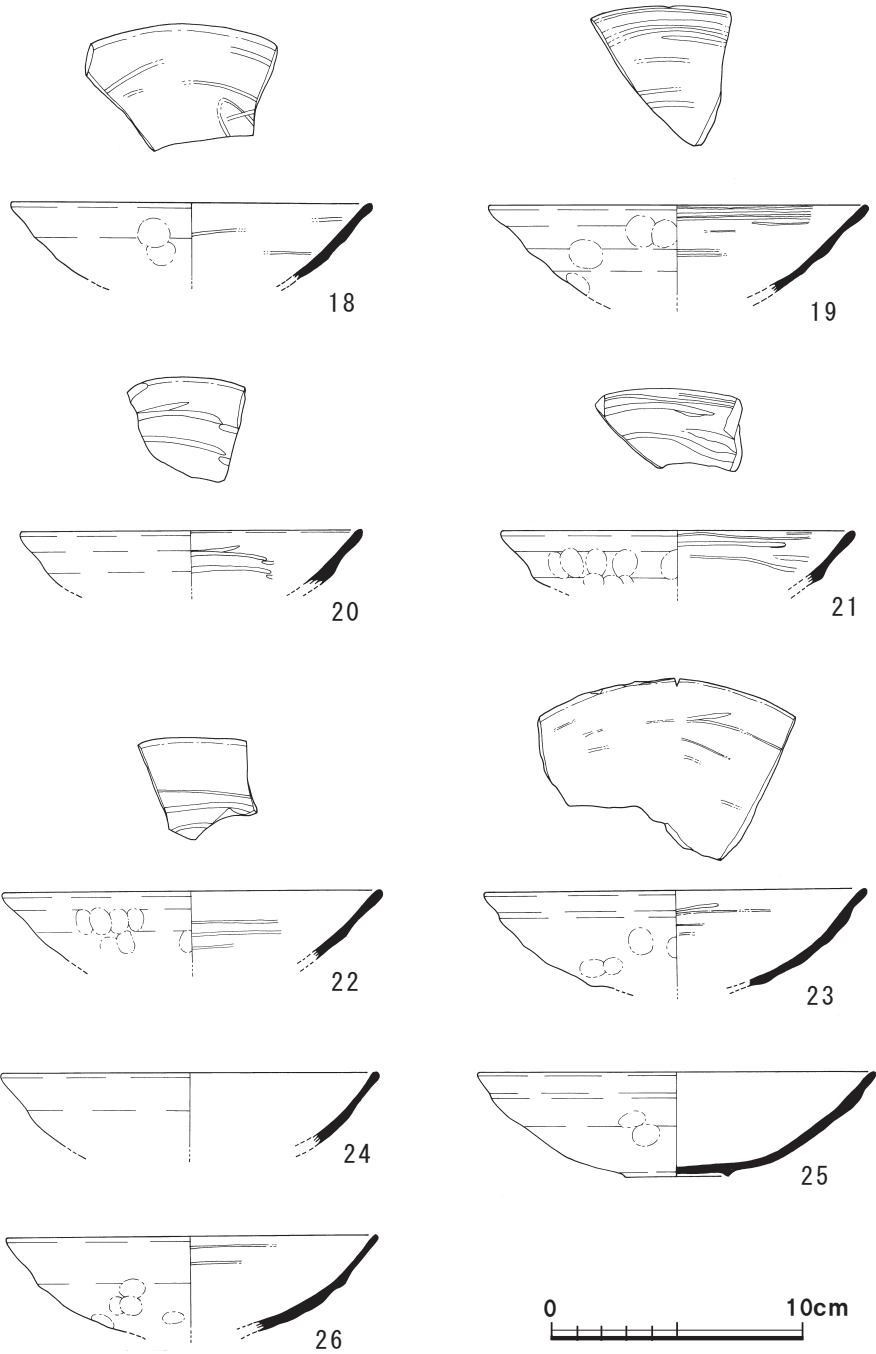
皿も器形にバリエーションが見られる。口縁部では外反するもの（61・67など）と外方に伸びるもの（62・73）、底部では底面が比較的平らなもの（61・65など）と丸みをもつもの（62・63など）がある。また、内面にミガキが見られるものが数点あり、口縁部内面から見込みにかけて圏線状ミガキが施されている（61～64）。見込



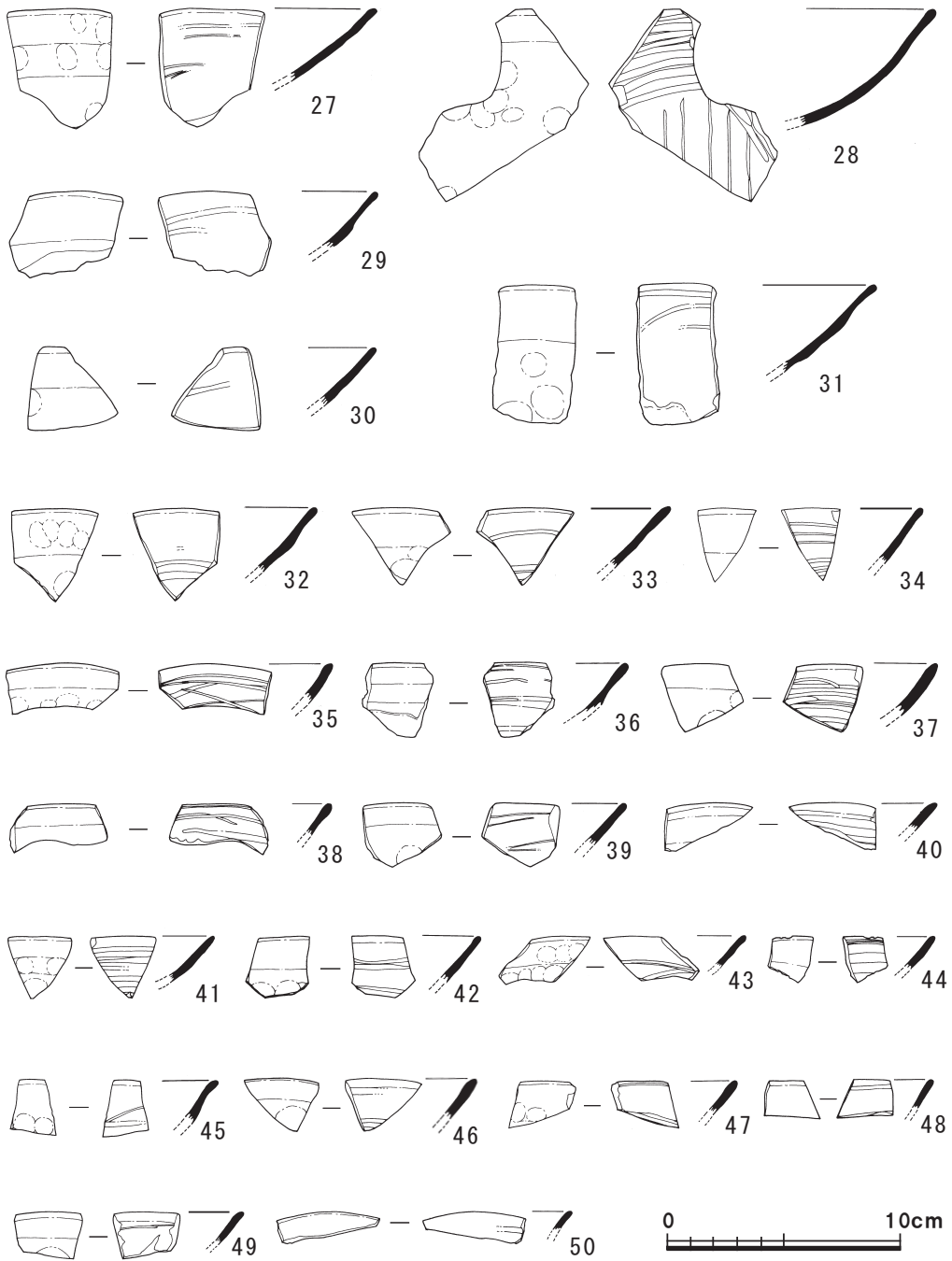
第6図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 出土瓦器実測図(1)



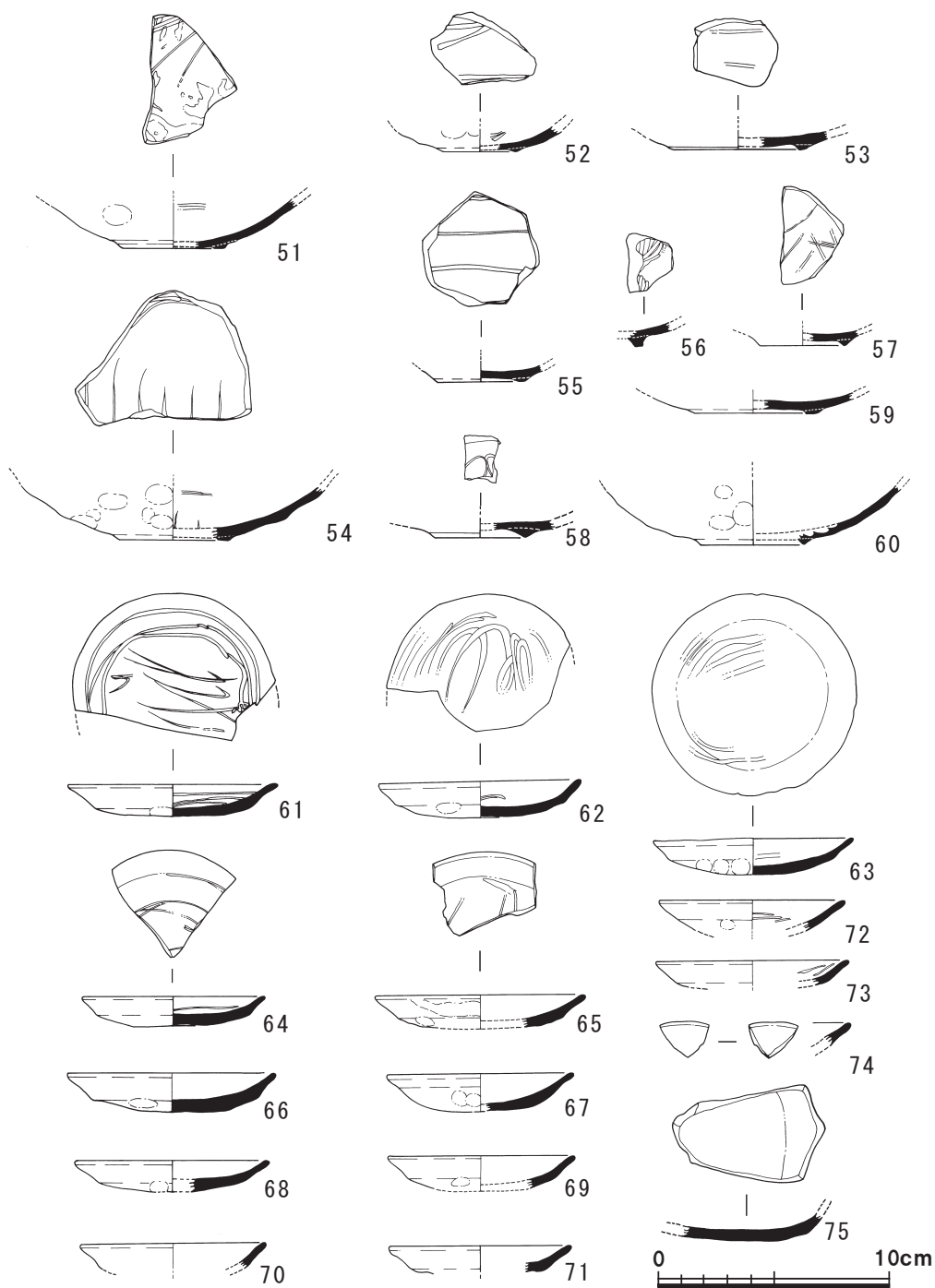
第7図 鏡西谷遺跡C地区S B 01出土瓦器実測図(2)



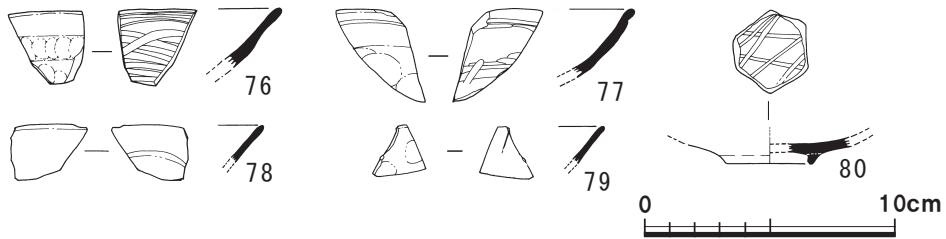
第8図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 出土瓦器実測図(3)



第9図 鏡西谷遺跡C地区SB01出土瓦器実測図(4)



第 10 图 鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 出土瓦器実測図 (5)



第 11 図 鏡西谷遺跡 C 地区出土瓦器実測図

み部の調整・文様がはっきりとわかるものは 61・62 のみで、61 には線状の暗文が、63 には螺旋状(不定形)と思われる暗文が施されている。64 は全体像が不明であるが、螺旋状もしくは連結輪状の暗文と思われる。

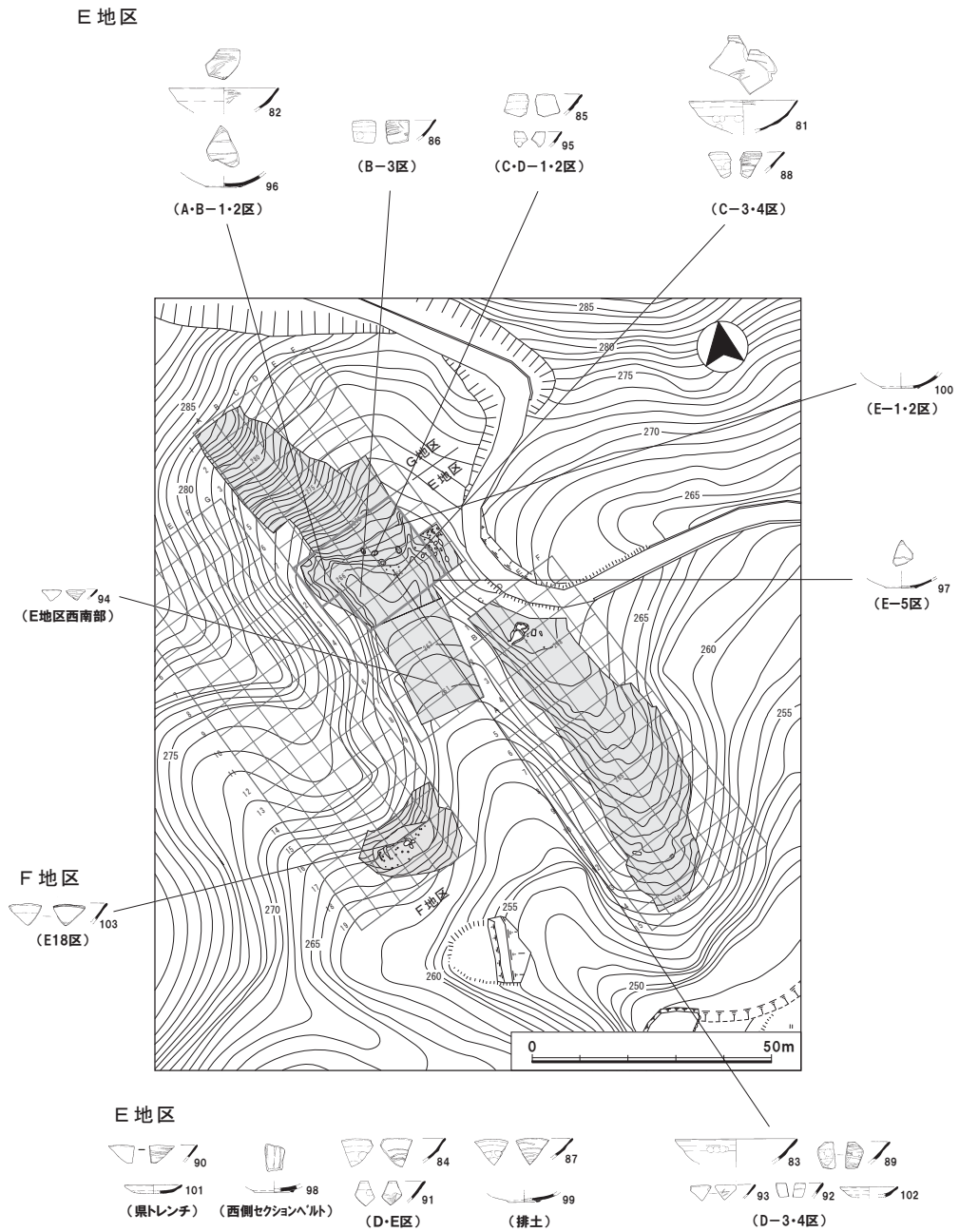
S B 01 以外から出土した瓦器については、80 の底径が 3.6cm である以外に法量がわかるものはない。76 はわずかに外反する口縁部であるが、77 は強いヨコナデなどによって外反し、口縁部外面直下に沈線状の直線が残されている。78・79 は出土地点が不明のものであるが、器壁が薄い。このような薄手のものは S B 01 出土のなかにも見られる(43・48 など)。76・77 は内面に圈線状のミガキが、80 は見込み部に格子状暗文が施されている。調査区西北部から出土しているものについては、図化していないが S B 01 の瓦器と同様に外面に指頭調整が見られ、内面には圈線状ミガキが施されている。

3) D 地区

D 地区は鏡西谷遺跡のほぼ中央に位置し、C 地区の西側に隣接する。南に延びる低丘陵で、丘陵頂上部は幅 15 m 前後の細長い平坦面が広がっている。D 地区では C 地区に先行すると思われる鎌倉時代前期の遺構が調査区北端部と調査区南端部に集中して構築され、北端部は土壙墓 1 (S K 05)、土坑 1 (S K 06)、竪穴遺構 1 (S B 04) が、南端部には 2 号・3 号土壙墓 (S K 07・08) が近接して位置している。瓦器小片が B - 2・3 区から 1 点出土している(図版 6 - 149)。壙と思われる体部である。

4) E 地区

G・E 地区は鏡西谷遺跡北西部に位置する。東側の A・D 地区と西側の F 地区に挟まれた丘陵斜面および谷部であり、連続した地形面である。調査の都合で便宜的に北半の南東向きの急斜面・裾などを G 地区、南半の谷部を E 地区とした。G 地区では弥生時代後期の遺構が多数検出され、E 地区では弥生土器集中部が複数検出された。この他に、G・E 地区境界付近の丘陵裾部で時期不明の土坑数基、A 地区丘陵部の西



第 12 図 鏡西谷遺跡D地区・E地区・F地区瓦器出土状況

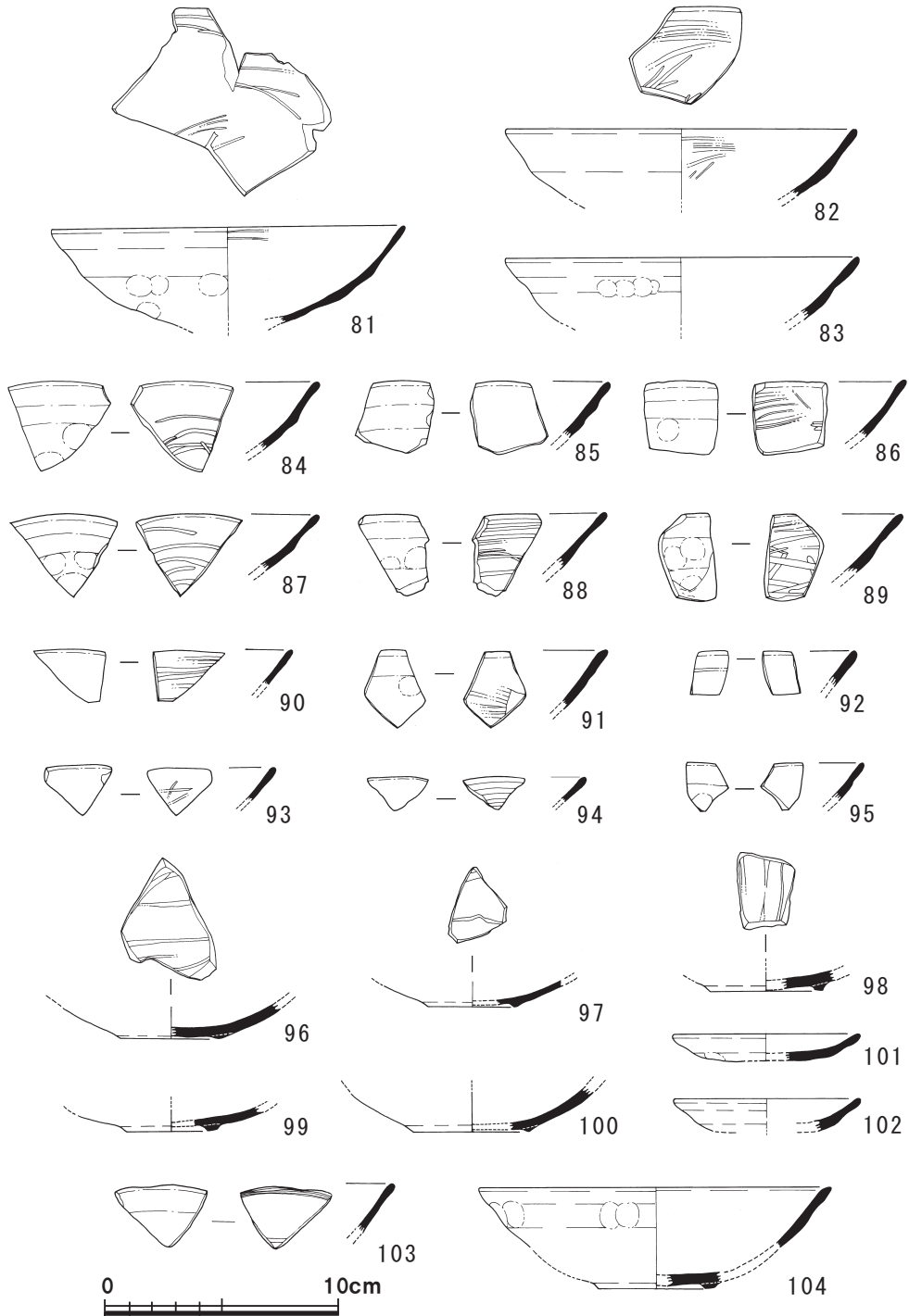
裾にあたる E 地区東北部で柱穴群、土坑など遺構が検出されており、E 区北半部を中心に中世（前期）の遺物が広く分布することから、これらの遺構は中世に属する可能性がある（ただし、E 地区北東部で検出された柱穴群などについては遺跡保存区に含まれることから遺構検出を行ったのみで、遺構の調査は実施していない）。

E 地区は D 地区丘陵西裾および F 地区丘陵東裾に東西を囲まれ、幅約 20 m の南北に細長い谷地形である。調査区北東部を中心に鎌倉時代を中心とする陶磁器が出土しており、調査区北西端部にも散漫な陶磁器の分布が認められた。瓦器は調査区北半部にほぼ限られ（第 12 図）、D3・4 区に 15 点、隣接部を含むと 20 点ともっとも集中して出土している（第 2 表）。これに次ぐのが A・B - 1・2 区で 10 点出土しており、隣接部を含むと 12 点である。この他は、C・D - 1・2 区、E1・5 区、F5 区などにわずかに分布する。全体として見ると、鎌倉時代を中心とする中世の陶磁器の分布とほぼ一致している。

出土瓦器は碗（81～100）46 点、皿（101・102）4 点で、碗を主体としている。法量がわかるものは少ないが、口径は 15cm 前後に復元される（81～83）。底径はいずれも 4cm 前後である（96～100）。E 地区全体を通して外面にミガキが見られるものはなく、内面には圈線状のミガキを確認できるものが多い。暗文については小破片が多いため全体像が不明だが、平行線状と思われるもの（96・98）が確認できる。器形については、出土地区ごとに多少の相違があり、北東部の碗は、口縁部がやや外反する形態で、全体にヨコナデを施し、体部との境が段状となるもの（84・95）、口縁部が直線的なもの（91）、内湾気味で器壁が薄いもの（93）などがある。高台は断面方形状のもの（98・99）、断面三角形のもの（97・100）がある。皿

第 2 表 鏡西谷遺跡 E 地区瓦器出土状況一覧

東西列 南北列	A・B	B	C	C・D	D	D・E	E	F	A～E	不明	合計
1	1						2				3
1・2	4	1		2							8
2	2		1	1							4
3		2			5				2		9
3・4			3	2	4						9
4					7						7
不明						2				3	5
合計	7	3	4	5	16	2	3	1	2	3	47



第13図 鏡西谷遺跡E地区・F地区、山中池南遺跡第2地点出土の瓦器実測図
 (81～102. 鏡西谷遺跡E地区、103. 鏡西谷遺跡F地区、104 山中池南遺跡第2地点)

(102) は口縁部が外反する。北西部の碗は、口縁部のヨコナデ幅が広く、それほど外反しないもので、体部との境が段状となるもの (81・82)、ヨコナデが狭い幅で二段にわたっているもの (85)、口縁部が内湾するもの (86)、口縁部がわずかに外反し、直線的に体部へとつづくもの (88) などがある。底部には高台が断面方形のもの (98) と低い半円状のものがある (96)。また、南半部から出土している皿 (101) は口縁部がわずかに外反し、底面は比較的平坦である。

5) F 地区

F 地区は鏡西谷遺跡の西部に位置し、G・E 地区の南西に隣接する調査区である。北西から南東に延びる幅の狭い丘陵で、調査区北西端部および南東端部を除くと、丘陵頂上部は比較的傾斜が急である。調査区南東端部の丘陵裾部では、鎌倉時代前期の 1 号掘立柱建物 S B 01、2 号積石塚 S S 02、1 号土壙墓 S K 01、2 号土壙墓 S K 02 が構築されており、調査区北西部を中心に室町時代の郭、溝、柵状遺構などが検出された。

F 地区では調査区南東端の遺構群で瓦器 2 点が出土している。積石塚 S S 02 の構成礫中から出土したもので、いずれも埴 (第 13 図 103) である。103 は摩滅しているが内面には暗文が見られる。もう 1 点は体部の破片で、非常に摩滅している。

B. 山中池南遺跡第 2 地点

山中池南遺跡第 2 地点は標高 331.1 m のががら山北裾に位置し、ががら山から北側に延びる低丘陵上および丘陵斜面、丘陵裾の低地部など広範囲に遺構・遺物が分布している。低丘陵は北端部で西側に主軸を変化させており、平坦な丘陵頂上部を形成している。本遺跡では、旧石器～古墳時代、中世、近世の遺構・遺物が確認されており、丘陵南斜面およびそれに隣接する低地部の発掘調査を実施した (藤野編 2005)。中世の遺構は調査区西端部の B10 区、調査区南部の D11 区および周辺に集中しており、いずれも低地部に構築されている。遺構は、土坑、溝などである。中世の遺物は遺構の集中する B10 区～D11 区と遺構から少し離れた E9・10 区、F9・10 区、G10 区に集中して分布しており、谷間の低地部を中心としているが、丘陵北斜面の D13 区、F12 区などにも分布が認められる。出土遺物は土師質土器が主体であるが、C10 区から近接して 6 点の瓦器破片 (第 13 図 104) が出土した。周辺を含め近接部には土師質土器などの分布はなく、同一個体である可能性が高い。

出土瓦器は埴で、非常に摩滅している。内面はミガキを施している可能性があるが、現状では観察できない。見込み部には平行線状かと思われる暗文が見られる。

3. 東広島キャンパス出土瓦器の特徴

前節で鏡西谷遺跡 C 地区を中心として、広島大学東広島キャンパスに所在する鏡西谷遺跡各地区および山中池南遺跡第 2 地点の出土瓦器について出土状況を含めて紹介してきたが、ここでは、これらの出土瓦器の型式学的特徴について分析を進める。それらをもとに、各地区出土の瓦器の型式や時期について考察し、伴出遺物や周辺出土の遺物との関連などについてまとめておきたい。

1) 出土瓦器の型式学的特徴

まず、口縁部、高台など各部の形状および全体のプロポーション、調整法、暗文などの各要素を、埴、皿、それぞれについて概観してみよう。

まず埴であるが、全体のプロポーションおよび調整は、口縁部は開き気味であり、大半の資料が器高 4～5cm で、口径に比較してやや深さが浅く、粘土紐を貼りつけて低い高台を成形していること、外面の調整は口縁部がヨコナデ、体部外面には指頭調整が顕著で、ナデ仕上げであること、内面は丁寧にナデ（口縁部・体部はヨコナデ）を施して平滑にした後、口縁部から体部に圏線状のミガキを施していること、見込み部分に暗文を施していることなどの点で共通している。しかし、詳細に見ると、いくつかの形態に区別することができる。口縁部は直線的に延びるもの（形態 A：6～9・13・14 など）、外反するもの（形態 B：4・10・11・15・20・21・23・25 など）、わずかに内湾するもの（形態 C：37 など）の 3 種類が認められる（第 14 図）。形態 A は外面がヨコナデのみで調整されているものと上半はヨコナデ、下半は指頭調整の後ナデで仕上げるものが認められるが、口縁部全体がほぼ同じ厚さである。形態 B はやや強いヨコナデや指頭調整によって口縁部外面中央部が少し窪み、その結果口縁部が外反気味となるもので、口縁部中央部がその上下に比べて厚さが薄くなっている。この形態に属するものの中には口縁端部が外反するもの（45 など）がある。形態 C は口縁部上半部を中心にやや内湾しているが、この形態に属する資料は少なく、また体部から口縁部まで残存している個体が認められないことから、基本的には形態 A に含めるべきかもしれない。

口縁端部は丸くおさめているが、ほぼ厚さが一定のもの（形態 a：2・4・6・13・26・42 など）を主体に、膨らみ気味のもの（形態 b：1・10・12・17・87 など）や外反するもの（形態 c：15・45・77 など）、面取り状に口縁端部内面が平坦気味となっているもの（形態 d：37・46・91 など）がある（第 15 図）。口縁端部が膨らみ気味の形態は、おおむね口縁部形態 B に対応しており、口縁部の調整法と関連している。



第 14 図 東広島キャンパス出土瓦器塚の口縁部形態分類模式図



第 15 図 東広島キャンパス出土瓦器塚の口縁端部形態分類模式図



第 16 図 東広島キャンパス出土瓦器塚の高台形態分類模式図

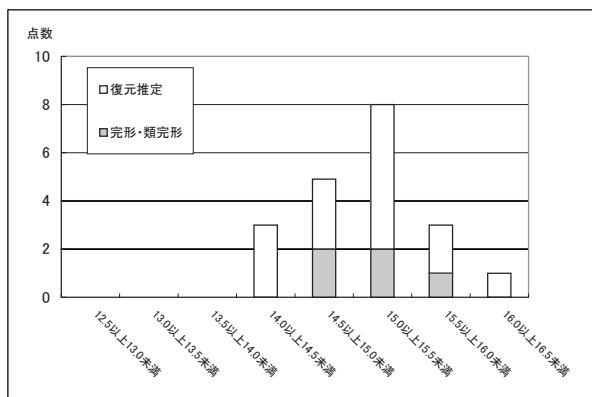
底部は全体の形状を窺うことができる資料が少ないことから全体の傾向を指摘するのは困難であるが、内面見込み部分が平坦気味のもの（8・53・55・104 など）と緩やかなカーブを描くもの（7・54 など）が認められる。高台について見ると、断面が台形状あるいは方形状を呈するもの（形態 1：6～8・56・99・104 など）、三角形状を呈するもの（形態 2：53・58・60・100 など）、半円形状など不定形を呈するもの（形態 3：11・53 など）の 3 形態を認めることができる（第 16 図）。形態 1 の中には一部変形して形態 3 状を呈するものがあるが、調整などの状態から形態 1 に含めて良いと思われる。形態 1 が最も多いが、形態 3 もほぼ同数あり、形態 2 が最も少ない。形

態1は高さが3～5mm程度のもが多く他の形態より相対的に高く、平坦な高台接地面を明瞭に作出している。高台内外側面をそれぞれ独立してヨコナデで仕上げ、基本的に最後に接地面を平滑にナデており、強いナデでわずかに窪んでいるものもある(6)。高台内面あるいは外面は強いヨコナデで直立気味となっているものがあり、それらは高台接地面付近の粘土が外側にはみ出している(56・80)。形態2は高台となる粘土紐を貼り付けた後、高台の内外から指頭調整とヨコナデによって断面三角形に仕上げており、接地面は線状である。高さは2mm程度と低い。表面が摩滅しているものが多いため高台内外の調整の前後関係は必ずしも明らかにできないが、形態1は高台側面の仕上げ調整が基本的に周辺の底部調整から独立しているのに対して、形態2では高台内面は高台内側の底部調整と、高台外面は体部側の底部調整と連続的に行われている。形態3は接地面がわずかに平坦面を残しており、その点では形態1と形態2の中間型である。断面形状は潰れた台形、方形や半円形など不定形である。高さは2～3mm程度で、形態2と同様に低い。接地面部分の仕上げ調整は独立して行わず、高台内面か外面のいずれかと一連の調整として行われている。形態2同様、高台の仕上げ調整は周辺の底部調整と連続的に行われる場合が多いが、独立的に調整されるものも認められる。また、形態3には粘土紐を貼り付けただけのようなものを含んでいる。

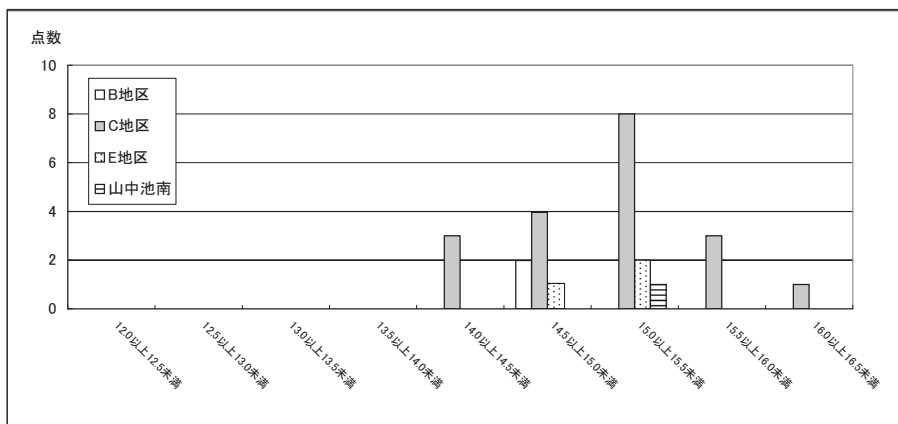
調整は、先に述べたように、外面は口縁部がヨコナデ、体部～底部が指頭調整の後ナデ、高台付近はヨコナデやナデで仕上げており、内面はヨコナデ、ナデの後、圏線状のミガキを施すことを基本としている。しかし、詳細に見ると、各調整は必ずしも一様ではない。口縁部外面のヨコナデは口縁部上半の1～1.5cm程度の狭い範囲にしか施されないものと3cm程度の幅広い範囲に施されるものがある。体部～底部外面(高台内面を除く)の指頭調整はほぼ全体にわたっており、凹凸の顕著なものともあまり目立たないものがあり、一般的に後者は仕上げのナデが丁寧である。口縁部外面の体部との境界には、強いヨコナデあるいは先行する指頭調整によって段が形成されているものもある。また、口縁部～体部外面にはミガキがわずかに認められるものがあるが、一定の範囲に広がりを見せるものはまったくなく、外面にミガキを施さないと見てよい。内面の圏線状のミガキは、調整の密度が高くミガキが重複気味のものと同様に調整の間隔が広いものが認められるが、前者の割合は低い。また、ミガキの1本々々の太さは、同一個体でも場所によって異なっている場合が多いが、幅は3～4mm程度の幅広のもの(4・6・21)と1～2mm程度の細いものが見られ、後者の割合が高い。

暗文は、ジグザグ状のもの(7)、螺旋状のもの(8)、平行線状のもの(10・28・54・55・96・98)、連結輪状になるとと思われるもの(58)、格子状になるもの(80)が認められる。ただし、見込み全体が残されていない資料は、平行線状の中には実際はジグザグ状や平行線の一部が連結しているもの(6)を含んでいる可能性がある。図面として提示しなかった資料の中で暗文が残されているものは7点あり(いずれもC地区出土)、残存部で見ると、平行線状のもの6点、平行線状の一部が連結しているもの1点で、平行線状のものが多い。また、体部のミガキと暗文の調整順序がわかるものは12点あり、体部→見込み順(6・8)が6点、見込み→体部の順(7・10・12・28)が6点である(図面未提示資料の内訳は、見込み→体部3点、体部→見込み3点)。両者は同数であり、順序は一定ではないと言えるが、全体の状況が観察できるものがわずかで、部分的な切り合いの観察が主体であるので、必ずしも圏線状のミガキと暗文の施文順序を示しているものではない。全体の様子を観察できる個体で見ると、必ずしも圏線状のミガキは見込み部から口縁部まで連続的に調整しているわけではないことから、あくまでも見込み付近での両者の調整順序と見ておきたい。なお、見込み部に暗文を施さず、圏線状のミガキが体部から見込み部にまで及ぶものもあると思われるが、確実に指摘できる個体はない。

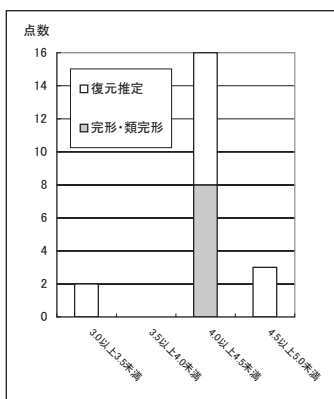
最後に、壙の法量について見ておく。口径、底径、器高のすべてを直接計測することができる個体はきわめて少ないことから、まず個別の法量について概要を述べる。最初に、資料の大半を占めるC地区について見てみよう。分析の対象はいずれも1号掘立柱建物跡(SB01)出土資料である。口径であるが、口縁部が1/2以上残存しているものはわずか3点で、口縁部が1/3以上残存し、底部まで揃っていて口径がほぼ復元できる個体(以下、完形・類完形品と略す)を含めても5点である。これら5点についてみると、14.3～16cm未満の間におさまっており、15cmを前後する⁽⁴⁾(第17図)。口縁部が1/4～1/5程度残存している個体(15点)で口径を復元してみると、14.5～16.5cm未満の間に分布し、両者は一致している。次に鏡西谷遺跡の他地区および山中池南遺跡第2地点の資料を比較してみる。鏡西谷遺跡では、C地区の他には、B地区、E地区出土資料で口径を検討することができる資料があるが、直接口径を計測可能な資料は1点のみで、口縁部が1/4～1/5程度残存するものが、B地区で2点、E地区で2点、山中池南遺跡第2地点で1点ある(第18図)。これらを含めて口径を検討してみると、基本的にはC地区の分布の中心に含まれるE地区の個体(84)は、口縁部残存部はわずかだが、体部が半分程度残存し、底部中央付近までの形態を確認



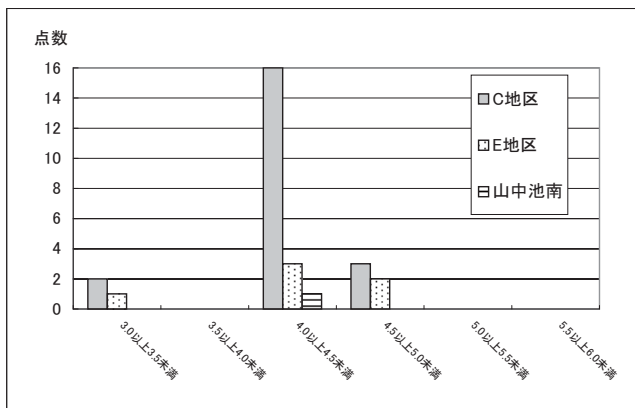
第17図 鏡西谷遺跡C地区出土瓦器口径分布図
(計測値の単位は cm である)



第18図 鏡西谷遺跡B地区・C地区・E地区、山中池南遺跡第2地点出土瓦器口径分布図
(計測値の単位は cm である)



第19図 鏡西谷遺跡C地区出土瓦器碗底径分布図
(計測値の単位は cm である)



第20図 鏡西谷遺跡C地区・E地区、山中池南遺跡第2地点出土瓦器碗底径分布図 (計測値の単位は cm である)

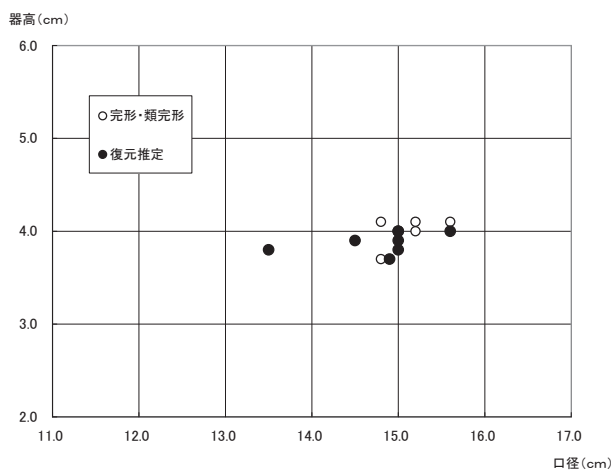
することができることから、復元口径は実際の口径と見ても大過ないと思われる。

底径については復元可能な底部がきわめて少ないことから、本来の状況をどれほど示しているのかは問題が残るものの、一定の傾向性を示している。まず、C地点から検討する。高台が1/2程度以上残存するか、口縁部～底部が良好に残っているものは8点あり、底径は全て4.0～4.5cmである（第19図）。高台が1/3～1/4程度残存しているものでは、3.0～5.0cm未満に分布し、少し分布範囲が広がるが、やはり4.0～4.5cm未満に全体の約半分が位置し、それに近接して前後に若干の資料が分布する。3.0cm前半代に1点あるが、高台部が1/4程度残された小破片であり、楕円形状の高台が認められることから、本例も実際にはもう少し径が大きいものかもしれない。残り1点は高台貼付け直前の底部付近まで残存している個体で、全体の形態から底径を復元している。復元口径が小さいことからそれに応じて底径も小規模となっている。次に鏡西谷遺跡の他地区および山中池南遺跡第2地点の資料を比較してみる。鏡西谷遺跡ではC地区以外に底部が検討できるのはE地区のみで、山中池南遺跡第2地点の1点も検討可能である（第20図）。E地区では検討資料は6点あるが、高台が1/2以上残存しているものはなく、いずれも1/3～1/5程度である。山中池南遺跡第2地点は1/2程度高台が残存している。E地区の資料は径3cmの1点を除くと、4.0～5.0cm未満に集中しており、基本的にC地区の分布範囲に重複している。径3cmの資料は無高台で口径も12cmと小型であり、前述のごとく、他の資料とは形態や調整が異なっている。全体としてみれば、基本的に4.0～5.0cm未満の1cmの間に集中していると言えよう。器高については詳細を省くが、鏡西谷遺跡B地区で2点、C地区で13点、E地区で1点、山中池南遺跡第2地点で1点の分析対象資料がある。直接器高を計測できる資料はそのうちの1割程度であり、残りの資料は推定復元であるが、3.2～4.1cmの間に分布しており、大半は3.5～4.1cmの間に分布し、特に4.0cm前後に集中する。3.5cm以下の資料は2点あり、B地区の3.2cmとE地区の3.2cmである。これら2点は口径が12cm前半と小型であり、すでに述べているように形態や調整が他の資料と異なっている。

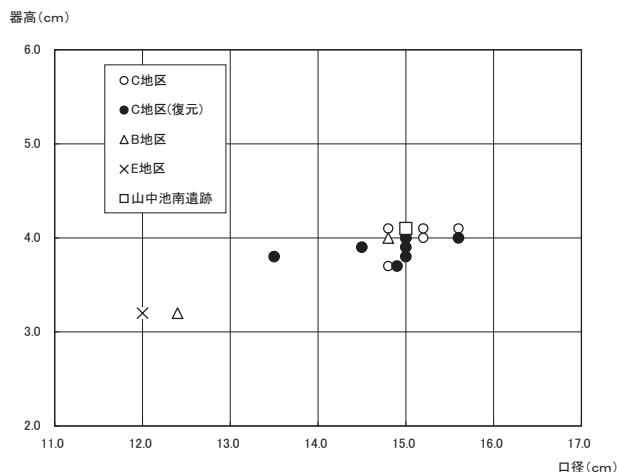
口径、底径、器高の3者は相互に密接な関連を有するが、口縁部～底部まで残存している資料がわずかで、底部を残存する個体のうち口径、器高が計測できるものがきわめて少ないため、口径と器高の関係で提示資料の特徴をまとめておきたい。まず、C地区であるが、1点を除くと、口径14.8～15.6cm、器高4.0～4.6cmの間にあり、良好なまとまりを示している（第21図）。完形・類完形品はこの分布域の全体に分布

しており、推定復元品もほぼこのまとまりの中にあり、両者の分布状況に差異はない。口径 13.5cm の個体は器高 3.8cm で口径 14.5cm 以上の個体と同様であり、形態や調整の点でも他の個体のバリエーションの中におさまっている。口径がやや小さい個体である可能性は十分にあるが、実際には口径は 14.5cm 前後なのかもしれない。点数は少ないが、鏡西谷遺跡 B 地区（2 点）、E 地区（1 点）、山中池南遺跡第 2 地点（1 点）の資料を加えてみると、口径の項で述べたように、二つのまとまりを認めることができる（第 22 図）。一つは鏡西谷遺跡 C 地区の資料群の中心分布域で、鏡西谷遺跡 B 地区のうちの 1 点、山中池南遺跡第 2 地点が分布域のほぼ中心部に位置する。もう一つは口径 12.0～12.4cm、器高 3.2cm に分布するもので、鏡西谷遺跡 B 地区、E 地区の各 1 点である。両者は法量のみではなく、形態的特徴や調整の状態も異なっている。口縁部、器高の両者を計測できる個体がないことから B 地区、E 地区の様相を具体的に示すことはできないが、口径、器高の個別的な様相からすると、両遺跡出土の瓦器は C 地区資料群の分布域に属するものが主体と推定される。

次に皿について概観する。法量は口径 8～9cm、器高 1.5cm 程度で、小型で浅いこと、形態は口縁部は大きく開き、高台は有さないこと、調整は口縁部外面がヨコナデ、体部外面には指頭調整が顕著で、ナデ仕上げ、内面は丁寧にナデ（口



第 21 図 鏡西谷遺跡 C 地区出土瓦器碗法量分布図



第 22 図 鏡西谷遺跡 B 地区・C 地区・E 地区、山中池南遺跡第 2 地点出土瓦器碗法量分布図

縁部と底部の一部はヨコナデ)を施して平滑にしていること、ミガキが確認できるものでは、口縁部から体部に圏線状のミガキを施していることなど多くの点で共通している。しかし、詳細に見ると、皿についても各部の形態や調整には違いを認めることができる。口縁部はおおむね外反気味で短い、やや長いもの(61・67など)が認められる。すでに述べたように、口縁部はおおむね外反気味であるが、直線的なもの(形態A)、外反が明瞭なもの(形態B)、口縁端部が直立気味で口縁部外面が上下に引き伸ばされたS字状を呈するもの(形態C)が認められる(第23図)。形態A・Cが主体で、形態Bはほとんど認められない。口縁端部はいずれも丸くおさめているが、口縁部全体と基本的に厚さの変化しないもの(形態a)、先細りになるもの(形態b)、口縁部の他の部位に比べて厚くなるもの(形態c)が認められる(第24図)。形態aが大半であり、形態bはほとんどない。形態cは塊では一定量認められるが、皿はわずかである。口縁部と底部の境界に注目すると、明瞭な稜を形成するもの(形態1)と比較的緩やかなカーブを描きながら口縁部から底部に移行するもの(形態2)が認められる(第25図)。形態1は底部との境界付近の口縁部下端に強いヨコナデを施して弱い段を形成するもの(形態1a)と口縁部のヨコナデに特段の変化のないもの(形態1b)がある。形態1が主体であり、形態2は4点である。形態1は形態1bが主体で、全体の約2/3を占める。形態1aは直線的な口縁部(形態A)が多い。口縁部～底部まで残存している個体は多くはないが、確認できるもので見ると、底部が厚く、底部から口縁部へ移行する付近で急速に薄くなるもの(形態i)が大半であるが、底部の厚さが薄く口縁部から底部にかけてあまり厚さの変化しないもの(形態ii:69・101)が認められる(第26図)。底部の形態は基本的に丸みを帯びていて、地面との接地面は広くないが、底部外面中央部がやや平坦気味のもの(61・62など)も認められる。

外面調整は、口縁部がヨコナデ、底部は指頭調整の後、ナデで仕上げている。各部位の形態と平行の関係にあり、塊と同様に、指頭調整の顕著なものあまり目立たないものがあり、後者はナデが丁寧である。内面のミガキを観察できる資料はわずかであるが、口縁部もしくは口縁部と底部の境付近に圏線状の調整を施すのは塊と同様である。ミガキの密度は全般的に疎らである。暗文を観察できる資料はきわめて少ない。撥ねたように先端が屈曲する平行線状のもの(61)、螺旋状のもの(62)などがある。全体の形状は不明だが、輪状の暗文(64)や線状の暗文(65)が観察できるものがある。ミガキと暗文の調整順が分かるものは1点(61)のみで、見込み→体部である。



第 23 図 東広島キャンパス出土瓦器皿の口縁部形態分類模式図



第 24 図 東広島キャンパス出土瓦器皿の口縁端部形態分類模式図



第 25 図 東広島キャンパス出土瓦器皿の口縁部・底部境界部形態分類模式図

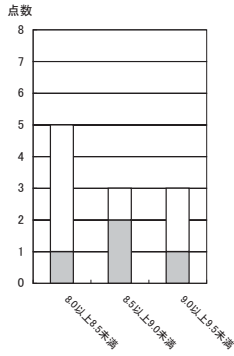


第 26 図 東広島キャンパス出土瓦器皿の口縁部・底部形態分類模式図

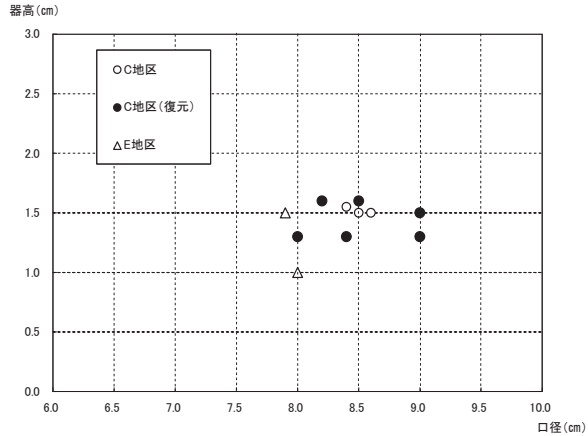
最後に法量について見ておく。皿は出土点数が少ない上に、計測可能な個体はさらに少ないが、基本的な傾向を窺うことができる。壙と同様に、口径、底径、器高のすべてを直接計測することができる個体はきわめて少ないことから、まず個別の法量について概要を述べる。資料の大半を占めるC地区について見てみよう（壙と同様、計測可能個体はS B 01出土品のみである）。口径は完形・類完形品は4点のみで、8.0～9.5cm未満の間に分布している（第27図）。わずかな点数なので、分布の偏りは議論できないが、中間の8.5～9.0cm未満を頂点に正規分布を示す。1mmの計測値で見ると、4点のうち3点は8.4～8.6cm、残り1点は9cmなので、5mm単位のあり方と符合していると言える。復元推定可能な資料も同様の分布範囲を示すが、8.0～8.5cm未満の点数がやや多く、両者を合わせると8.0～8.5cm未満を頂点とする分布となる。ただ、復元口径については不確定要素が大きいこと、全体の点数が少ないことから、口径は8.0～9.5cmの範囲に分布すると見ておく方がよかろう。鏡西谷遺跡C地区以外では、B地区、E地区で皿が少量出土しているが、計測可能な資料があるのはE地区のみである。E地区では2点が復元推定可能な資料である。口径はいずれも約8cmで、C地区の分布範囲内に位置している。

底径⁶⁾では、完形・類完形品は5.0～7.5cm未満の間に分布し、やや広い分布域を示す（第28図）が、5.5～6.5cm未満の部分で分布が途切れている。6.5～7.5cm未満のやや底径の広いものに主体があり、5.0～5.5cm未満の底径の狭いものも少量ながら存在していると見ることができる。復元推定可能な資料も5.0～7.0cm未満の間に分布し、同様な分布範囲を示すが、完形・類完形資料の空白分布域を埋めるように連続的に分布している。完形・類完形資料の様相を重視すれば、復元推定資料についても底径のやや広いものと狭いものが存在する可能性が高い。したがって、資料全体としては、底径6.5～7.0cm程度の幅の広い形態を主体としながら、底径5.0～5.5cm程度の狭い形態が一定量存在すると言える。口縁部形態の項では、皿の口縁部は短いものとやや長いものがあることを指摘したが、底径の狭い形態がほぼ後者に対応しており、底径と口縁部の形態の相関性を窺うことができる。E地区の資料の底径は4.8cm、5.4cmで、いずれもC地区の底径のやや狭いものの分布範囲にほぼ重なっている。

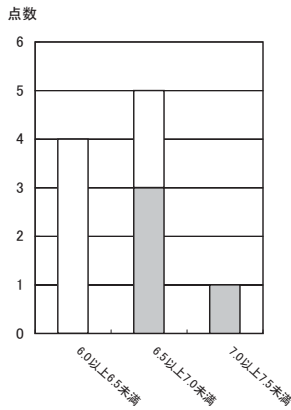
器高は、完形・類完形資料で見ると1.3～1.55cmの範囲に分布し、1点以外は1.5cm程度である。復元推定可能な資料では1.2～1.6cmの範囲に分布し、両者は基本的に分布範囲が重複している（器高1.2cmの個体は1点のみで、1/5以下の小破片である）。全体として見ると、1.3～1.6cmの約3mmの間に分布すると見てよかろう。いずれ



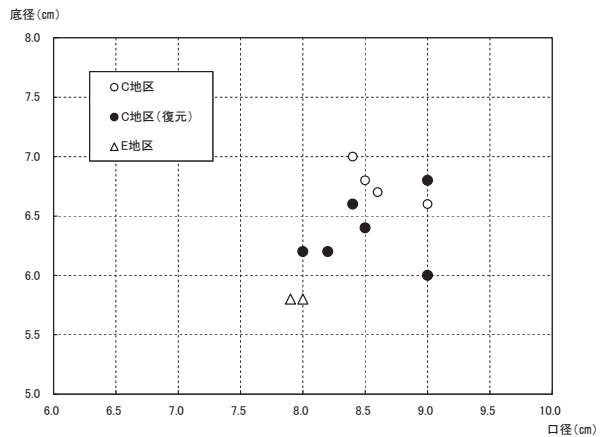
第 27 図 鏡西谷遺跡 C 地区
出土瓦器皿口径分布図
(計測値の単位は cm である。灰色
部分は完形・類関係資料、白抜き
部分は復元推定資料である。)



第 29 図 鏡西谷遺跡 C 地区出土瓦器皿法量分布図



第 28 図 鏡西谷遺跡 C 地区
出土瓦器皿底径分布図
(計測値の単位は cm である。灰色
部分は完形・類関係資料、白抜き
部分は復元推定資料である。)



第 30 図 鏡西谷遺跡 C 地区出土瓦器皿法量分布図

にせよ、器高は低く、かなり狭い範囲に計測値は集中していると言える。E 地区の器高は 1.3cm、1.5cm で、C 地区の分布範囲内におさまっている。

最後に、各部位を計測できる個体は少ないが、口径、器高、底径の関係を示して、全体の概要をまとめておく。鏡西谷遺跡 C 地区出土皿を口径／器高から見ると、口径 8.0～9.0cm、器高 1.3～1.6cm の範囲に分布し、かなり良いまとまりを示している。完形・類完形資料は口径 8.4～9.0cm、器高 1.3～1.55cm の範囲に分布し、限定された範囲である（第 29 図）。それに比べると、推定復元資料は口径 8.0～9.0cm、器高 1.3～1.6cm の範囲で、やや広い分布域を形成している。復元推定資料は不確定要素が

あるため実際にはもう少し狭い範囲となる可能性はあるが、現状でも口径1cm程度、器高3mmの範囲の中に分布しており、良好なまとまりと捉えることができよう。鏡西谷遺跡E地区の2点はC地区の分布範囲の最小部分に位置する。E地区の2点はいずれも復元推定資料であるため、C地区の資料群と比較して総体的に小型であるかどうかは形態や伴出遺物などを含めてさらに検討したい。次に、口径／底径について見ると、鏡西谷遺跡C地区では、口径8.0～9.0cm、底径6.0～7.0cmの範囲に分布し、やや散漫なまとまりを示す(第30図)。分布としては連続的であるが、口径9cmと口径8.6cm以下の間がやや不連続の分布である。完形・類完形資料では、口径8.4～9.0cm、底径6.6～7.0cmで良好なまとまりを示しているが、口径が8.5cm前後と9cmであるため、口径9cmの個体は相対的に口縁部がやや長い形態となっている。復元推定資料は、口径8.2～9.0cm、底径6.0～6.8cmの範囲に分布し、分布全体としてはかなり狭い範囲であるが、分布状況はかなり散漫で、口径8.0～8.5cm付近にある程度のまとまりを認めることができる。復元推定資料は小片が多く、底部中央付近まで残存していないものが多いことから、完形・類完形資料の分布からやや離れた場所に位置している個体は本来の法量を示していないのかもしれない。鏡西谷遺跡E地区の2点はC地区の分布域から少し離れた位置に分布する。口径が小さいことから、底径についても相対的に狭くなっているものと解釈されるが、口径／底径の項で述べたように、さらに検討が必要である。

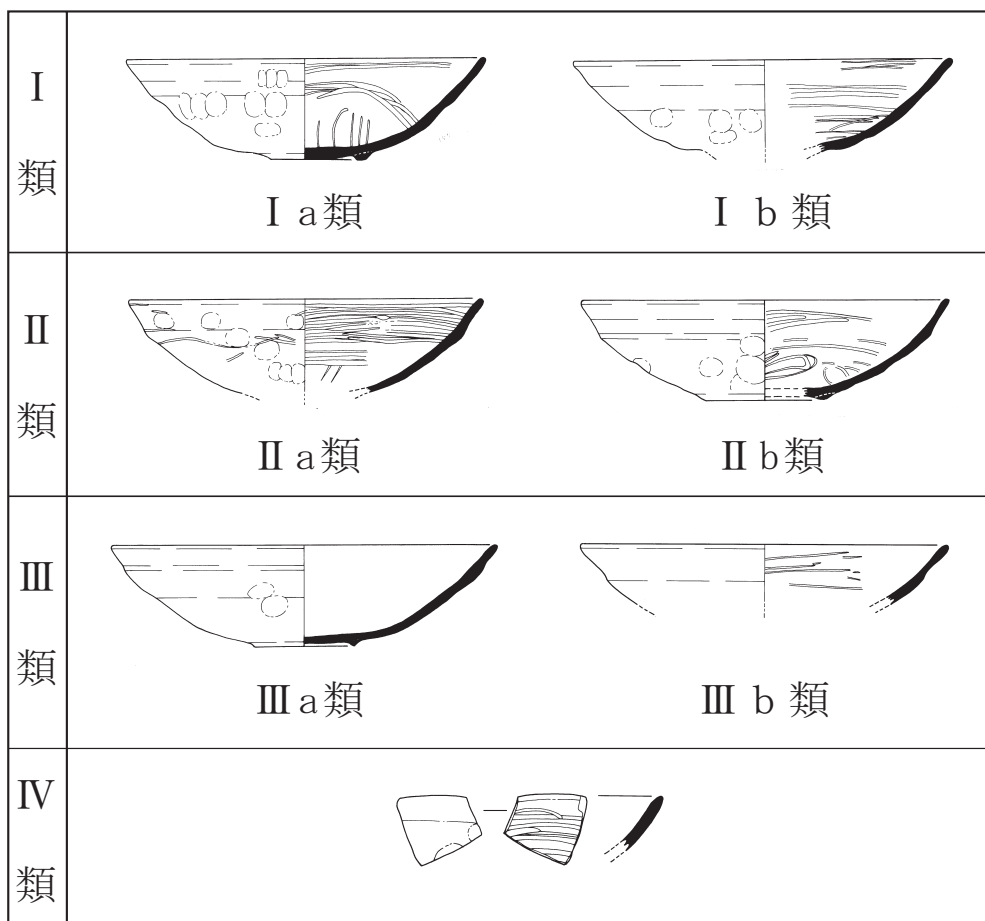
以上のことから、鏡西谷遺跡C地区、E地区の皿の法量についてまとめると、計測可能な個体に限れば、C地区の皿は口径8.0～9.0cm、器高1.3～1.6cm、底径6.0～7.0cmの法量を有し、比較的ばらつきの少ない規格であった可能性がある。E地区は、口径7.9～8.0cm、器高1.3～1.5cm、底径5.8cmの法量を有し、C地区に比べて一回り小型品であった可能性があるが、これについてはさらに検討が必要である。

2) 出土瓦器の分類

前節で東広島キャンパス出土の瓦器碗、皿について各部位の特徴や調整法、法量などについて分析を進めてきた。ここではこれらをもとに形態分類を行い、出土遺跡ごとに出土瓦器の特徴や時期などについてまとめておきたい。

まず碗であるが、底部から口縁部にかけてのプロポーシオン、口縁部と体部の境界付近の形態、口縁部の形態から3形態に区分される。(第31図)。I類は、底部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描き、口縁部外面はわずかに外反するものが多いが、直線的に口縁端部に至るものである。外面における口縁部と体部の境界はヨコナデヤ

入念なナデによって区画されるが、明確な稜線や段を形成していない。口縁部の厚さは基本的に一定である。Ⅱ類は口縁部が内側に屈曲し、外面において口縁部と体部の境界が稜線を形成するものである。口縁部外面は基本的に全体をヨコナデしている。口縁部は外反する形態が多いが、直線的な形態もある。口縁端部は特に厚さの変化しないものが多いが、膨らみ気味のものや外側に屈曲気味のものがある。Ⅲ類は底部から口縁部に至るプロポーションの点では基本的に形態Ⅰと同様であるが、外面において口縁部と体部の境界に段を有するものや口縁部に強いヨコナデを施して口縁部の外反度が比較的明瞭なものを一括した。Ⅰ類の垂形態とも言え、Ⅰ類の細分形態として分類すべきかもしれないが、ここでは積極的に上位形式として分離した。この他に、口縁部が内湾気味の形態がある。仮にⅣ類として注意しておくが、いずれも口縁部付



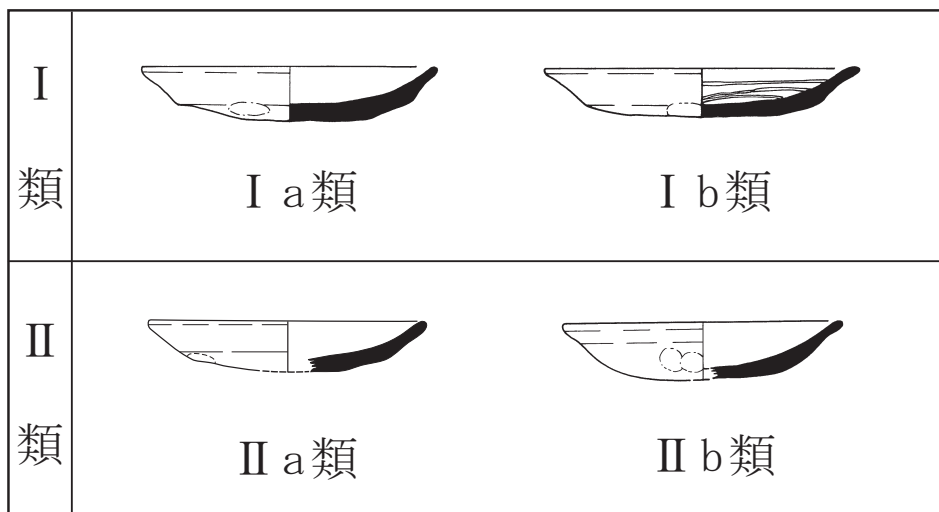
第 31 図 東広島キャンパス出土瓦器碗形態分類図

近の小片であることからⅠ類に属する可能性は残されている。

Ⅰ～Ⅲ類は調整などについて見るとさらに細分が可能である。Ⅰ類は口縁部外面のヨコナデの状態を基準にするとさらに2種類に区分できる。Ⅰa類はヨコナデが口縁部全体に及ぶものである。口縁部全体が同じ調整であるものや口唇端に接する口縁部上半に強いヨコナデを施し、下半部は弱いヨコナデで仕上げているものがある。Ⅰb類はヨコナデが口唇部に接する口縁部上端に限られるもので、口縁部の下半部は指頭調整の後丁寧なナデを施すものやヨコナデのみで口縁部が極端に狭いものがある。Ⅱ類は口縁部の形態や口縁部外面のヨコナデの状態から2種類に区分できる。Ⅱa類は口縁部が外反するもので、強いヨコナデが施されており、体部との境界が段状を呈するものもある。Ⅱb類は口縁部外面全体にヨコナデを施しているが、口縁部は直線的であるものである。Ⅲ類も口縁部と体部の境界の形態や口縁部の形態から2種類に区分できる。Ⅲa類は口縁部と体部の境界に段を有するもので、明瞭な稜線を形成している。口縁部下端に強いヨコナデを施す、あるいは指頭調整を施した後にヨコナデで仕上げるなどして段を形成している。Ⅲb類は中央部を窪ませるように口縁部外面に強いヨコナデを施しているもので、口縁部中央付近の器壁が非常に薄くなっている。その結果、口縁端部は一般的に膨らみ気味の形態となっているが、さらに積極的に口縁端部を厚く膨らませているものも認められる。

なお、高台の形態とⅠ類の細分形態の関係については、形式判別可能な高台残存個体がきわめて少ないため十分明らかにできないが、Ⅰa類はいずれも高台形態1であり(4点)、Ⅰb類はいずれも高台形態3(2点)、Ⅰc類は高台形態2、形態3が各1点であり、限定的な資料からすると一定の傾向は認められる。

次に、皿であるが、口縁部と底部の境界に明瞭な稜や段を有するもの(Ⅰ類)と口縁部と底部が連続的に緩やかなカーブを描きながら移行するもの(Ⅱ類)の大きく2形態に区分される(第32図)。Ⅰ類は口縁部に強いヨコナデを施しており、口縁部が外反するものが多く、底部との境には稜を形成している。また、口縁部下端の底部との境界付近に強いナデを施すものは段を形成しており、口縁部は直線気味(形態A)や引き伸ばしたS字状(形態C)となっている。Ⅱ類は口縁部にヨコナデを施し、底部は指頭調整の後ナデを施しているもので、調整の面から両者の境界は比較的明瞭である。口縁部は直線的なものが多く、口縁端部は厚さの点で変化しないもの(形態a)が基本である。底部の厚さがやや薄手で、口縁部と底部の厚さが極端に変化しないものが多い。



第 32 図 東広島キャンパス出土瓦器皿形態分類図

I 類は底径がやや大きく口縁部が相対的に短いもの（I a 類）と底径が小さく相対的に口縁部が長いもの（I b 類）がある。大半は I a 類である。II 類は口縁部と底部の境界付近は不鮮明な稜を形成するもの（II a 類）と緩やかなカーブを形成するもの（II b 類）がある。II b 類は底部上部から口縁部かけてのカーブが直線的で、口径に対する器高がやや高く、深めの印象を受ける。

さて、次にこれらの瓦器碗および皿の型式と時期について検討を進める。碗については、先に示したように、大別 2 類、中細別 4 類、小細別 8 類に分類した。I 類と II 類は法量や形態、外面の調整などかなり異なっているが、口縁部外面はヨコナデを主体とし、体部～底部外面はナデ仕上げであること、外面にミガキは認められないこと、内面はヨコナデ、ナデで平滑に仕上げた後、口縁部～体部を中心に圏線状のミガキを施すこと、口縁端部に沈線や段は認められないことなどの基本的な点では共通している。特に、I 類相互は、調整の面から見ると、細かな部分では相違が認められるものの、先にあげた共通点の他にも、体部～底部外面にナデによる仕上げの後も指頭調整による凹凸が顕著に認められ、法量の点でも類似するものと思われる。

次に、遺跡ごとの各形式組成の様相についてまとめておきたい。B 地区では碗 6 点、皿 1 点が出土した。いずれも破片であり、口縁部から底部まで揃っているものはなく、口縁部～体部の状態がわかる資料である。調整や色調、口縁部の形態などからいずれも別個体と思われる。碗は I 類、II 類、III 類を確認でき、I 類の割合がやや多

いかかもしれない。皿は小破片で、形式分類できない。瓦器の分布は調査区の西部と南東部の2ヶ所に大きく分かれ、調査区南東部出土の瓦器埴はいずれもⅠ類である。調査区南東部はC地区東北部の1号掘立柱建物（SB01）のすぐ北側に位置しており、SB01との関連で考えることが可能な場所である。C地区では、埴が121点、皿16点、坏1点、埴または皿3点が出土した。これらのうち大半がC地区SB01出土資料で、埴105点、皿16点、坏1点、坏または皿3点で構成されている。埴のうち約半数は小破片であり、形式を特定できないが、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類の各形態を確認することができる。Ⅰ類が最も多く、Ⅱ類がそれに次ぎ、Ⅲ類も一定量ある。Ⅳ類はわずかである。Ⅰ類は、Ⅰa類、Ⅰb類がほぼ同量ある。Ⅱ類はⅡb類が主体で、Ⅱa類はあまり多くない。Ⅱa類は口縁部成形・調整の点でⅢb類と類縁関係にあり、点数的にはⅢb類に主体がある。Ⅲ類はⅢa類は少なく、Ⅲb類が主体である。皿はほぼSB01出土の資料に限られ、Ⅰ類を主体に、Ⅱ類が一定量組成している。Ⅰ類、Ⅱ類とも各細分形式が認められるが、Ⅰa類、Ⅱa類の割合は量的に少ない。C地区のSB01以外の資料はB2区、D1・2区など調査区の西北部に主に分布する。いずれも小破片であり、形式を明確にできない。E地区は、埴48点、皿4点が出土した。調査区北西部を中心に分布しており、埴はⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の各形式が認められるが、小破片が主体であるため、各類型の割合は不明である。皿はわずかであるが、Ⅰ類、Ⅱ類とも出土している。Ⅰ類はⅠb類、Ⅱ類はⅡb類である。F地区では埴2点が出土したが、いずれも小破片で形式は不明である。山中池南遺跡第2地点では埴1点が出土した。Ⅰ類である。

以上、各遺跡の形式組成について概観したが、十分な検討をすることができたのは鏡西谷遺跡C地区SB01出土資料のみである。各形式の極端な量比のアンバランスを指摘することは困難であり、多様な形式が混在している状況と言える。詳細な検討は困難であるが、一定量の資料が出土している鏡西谷遺跡E地区でもほぼ同様の可能性が高い。他の遺跡については、出土量が少なく、様相を把握できる状況ではない。

ところで、瓦器埴の生産については、畿内産を主体としながら、九州産が知られており、近年では四国地方でも在地産の瓦器生産が指摘されている（尾上・森島・近江1995など）。安芸地方における瓦器の研究は必ずしも進展している状況ではないが、在地産を想定できる状況にはない。将来的に島嶼部などを含めた瀬戸内沿岸部の流通拠点の様相が明らかになれば、多様な地域からの瓦器の流入が知られるようになる可能性はあるが、現状では、九州産瓦器の流通範囲外にあると想定され、四国地方瀬戸

内側と関連付けられる中世土器も明らかではない。畿内産瓦器はいくつかの産地があることが指摘されており、畿内産瓦器碗は橋本久和によって楠葉型、和泉型、大和型、紀伊型、丹波型の5つの地域型に分類された(橋本1980)。その後、さらに近江型、伊賀型が認識されている(尾上・森島・近江1995)。これらのうち、楠葉型、和泉型は西日本に広く流通しており、安芸地方においては沿岸部を中心に和泉型の分布が指摘されてきた。東広島キャンパス出土の瓦器碗の特徴についてはこれまでまとめてきたところであるが、口径15cm、器高4cm前後の法量を有するⅠ類～Ⅲ類では口縁端部内面に沈線を有さず、体部～底部外面に指頭痕が顕著に残されていること、暗文は平行線あるいはジグザグ状を主体とし、斜格子、連結輪状、不規則形が少量認められることなどからいずれも和泉型の範疇で捉えることができるものと思われる。

最初に和泉型瓦器碗全般の編年について詳細に検討したのは尾上実である。尾上は挟山遺跡・軽里遺跡の概要報告の中では挟山遺跡出土資料を中心に瓦器碗をⅠ～Ⅹの10期に区分し、共伴遺物などの様相を明らかにした(尾上1978)。その後、尾上は新たな資料を加えて、南河内地域出土瓦器碗(和泉型)の変化をⅠ～Ⅳ期に整理し、Ⅰ期～Ⅲ期をそれぞれ3小期に、Ⅳ期を5小期に細分した(尾上1983)。さらに、尾上および近江俊秀、森島康雄は大和型、和泉型、楠葉型の併行関係を検討、整理しているが、和泉型の編年に関しては尾上1983の編年を基本的に踏襲している。また、橋本久和は瓦器碗の形態や調整、流通の様相などをもとに大和型、和泉型、楠葉型瓦器碗の編年を統一的に再構築している(橋本2009)。全体をⅣ期に区分する点では従来の編年と同様であるが、Ⅲ期、Ⅳ期を中心に再編を行っている。和泉型については尾上の編年を基本としながら、尾上編年Ⅲ-1期、Ⅲ-2期をⅢ-1期に統合し、尾上編年Ⅳ-1期、Ⅳ-2期をそれぞれⅢ-3期、Ⅲ-4期としてⅢ期に組み込み、尾上編年Ⅳ-4期、Ⅳ-5期を統合してⅣ-2期としている。しかし、尾上編年Ⅲ-1期とⅢ-2期の瓦器碗は形態や内外面の調整、暗文、法量などに一定の相違が認められ、50年以上の時期幅を有する可能性があることから、ここでは尾上編年をもとに紹介資料の型式比定を行いたい。

瓦器碗の口径は時期によって変化しており、口径、器高とも次第に減少する傾向が指摘されている。和泉型では、Ⅰ期は口径15～17cm、器高6cm前後、Ⅱ期は口径15cm～16.5cm前後、器高5～6cm、Ⅲ期は口径13.5～15.5cm前後、器高3.5～5cm前後、Ⅳ期前半は口径12～14cm前後、器高3～4cm、Ⅳ期後半は口径10～12cm前後、器高2～3cm前後の法量の変化が認められる⁶⁾(尾上1983、藤田2006、

橋本 2009 など)。Ⅳ期では法量の変化が激しく、急速に口径、器高とも減少している。特に東広島キャンパス出土瓦器は口径 14.5 ～ 15.5cm 前後、器高 4cm 前後の法量であり、Ⅲ期の範疇の中で捉えることができる。Ⅲ期の小期単位で見ると、Ⅲ - 1 期とⅢ - 2 期は口径に大きな差異はなく、14.5 ～ 15.5cm 前後で、器高がⅢ - 1 期からⅢ - 2 期に向けて若干縮小している（Ⅲ - 1 期は 5cm 前後、Ⅲ - 2 期は 4 ～ 5cm）。Ⅲ - 3 期になると、口径、器高とも縮小傾向が明確となり、口径 14cm 前後、器高 4cm 前後に変化している。法量から見ると、キャンパス出土の瓦器塚はⅢ - 2 期～Ⅲ - 3 期の様相を示していると考えられるが、口径ではⅢ - 2 期、器高ではⅢ - 3 期に近い様相を示しており、両者の中間的様相と言えるかもしれない。

キャンパス出土瓦器塚の高台について見ると、底部を確認できるものではいずれも低い高台を有している。先に高台の形態は 3 形態に分類できることを指摘した。高台形態 1（断面方形・台形）はしっかりした成形を行っているが、形態 3（断面不定形）の中には粘土紐の貼付状態を良く残しているものが認められる。Ⅲ期の中でもより新しい様相と見ることができよう。内面の圏線状のミガキは密接してはいないものの、10 条前後の単位を認めることができ、ミガキの間隔は未だ狭いと言える状態にあることから、Ⅲ - 2 期の様相と言えそうである。

以上のことから、キャンパス出土の瓦器塚は和泉型に比定され、おおむねⅢ - 2 期に位置づけても大過ないものと思われる。器高が 4cm を下るやや低いものを含んでいることや内面のミガキがやや粗いものが認められること、口径 14cm 程度のやや径の小さい個体（復元口径）を含んでいる可能性があることなどからⅢ - 2 期でもより新しい様相と見ることができるとも言えるかもしれない。

近年、和泉型については暗文の組成比を手がかりとして地域性が指摘されはじめている（佐藤 2006・2010、藤田 2006 など）。佐藤亜聖は和泉型瓦器塚に認められる暗文を、a 類：斜格子、b 類：平行線、c 類：同心円、d 類：連結輪状、e 類：不規則の 5 種類に分類して、各遺跡の様相を分析し、大きく 4 つの地域を識別できるとした（佐藤 2006）。すなわち、領域 1：摂津地域、領域 2：羽曳野・藤井寺・八尾・柏原・松原（中河内・南河内北部）、領域 3：和泉北部、領域 4：和泉南部である。地域 1 は b 類、e 類が卓越する地域で、Ⅲ期以降も b 類が主体となる、地域 2 は a 類が卓越するが、b 類も一定量存在する地域で、Ⅲ - 2 期以降 a 類が減少し b 類が増加する、地域 3 ではⅡ期は a 類・b 類で構成されるが、Ⅲ期以降は c 類・d 類が増加する、領域 4 はⅡ期では遺跡が少なく、Ⅲ期以降は a 類が主体となると共に d 類が増加するとした。さらに、

佐藤は高台形状、法量、ミガキの太さ、焼成などの個別の属性についても設定された4地域で相違があることを指摘している（佐藤 2010）。高台については、Ⅲ期以前は断面四角形（台形）、断面三角形が主流であり、領域1では断面四角が主体であるが、領域2、領域3、領域4と南へ行くにしたがって断面三角形の割合が高くなるとしている。法量については、Ⅱ-3期～Ⅲ-1期において領域1では器高4cm後半代が多いが、その他の領域では器高5cm前半に集中すること、Ⅲ-3期に瀬戸内地方で認められる口径に対して器高の低い形態が畿内産瓦器との関連で従来問題視されてきたが、同形態の和泉型が領域3南半～領域4に認められることを述べている。ミガキの単位幅は北から南の領域に向かって細くなる傾向があること、焼成については、領域1が出現期から消滅期まで一貫して良好な焼成とイブシを保つものに対して、他の地域では、Ⅲ期以降、焼成やイブシが不良となる傾向が認められ、特に南の領域に向かうにしたがってその傾向が顕著となること、領域4ではⅢ期段階に灰褐色～褐色の胎土を持つものが多く認められるようになることを指摘している。

東広島キャンパス出土の瓦器塊の暗文は平行線（ジグザク状を含む）を主体とし、斜格子、連結輪状、不規則形が少量認められ、高台の組成は断面四角形（台形）、断面不定形（断面四角形の変形）が主体で、断面三角形の割合は少ないなど、佐藤の設定した領域1の様相に近い。焼成については、焼成が良好でイブシがしっかりしているものと焼成、イブシともあまり良好ではないものが認められ、褐色系の胎土を有するものを一定量含んでいる。内面のミガキはやや幅広のものと幅の狭いものの双方を確認できる。高台断面が四角の形態では焼成、イブシとも良好であるものが基本であり、先に分類したⅠ類が大半である。高台断面が不定形、三角形のものは焼成、イブシともやや不良、あるいは不良のものをかなり含んでおり、褐色系の胎土を有するものも後者に限られる。暗文や高台の様相からすれば、領域1の様相に近いが、他の領域の様相も指摘できる。暗文の様相からすると、領域2に特徴的な斜格子状がきわめて少ないことから密接な関係を窺うことはできず、焼成や胎土などの様相から見て領域3や領域4との関わりが指摘できそうである。これらのことからすると、和泉型の生産地域の中でも領域1および領域3～領域4の製品が搬入されている可能性が想定できよう。

3) 瓦器の年代と共伴遺物

最後に、東広島キャンパス出土の瓦器の所属年代と伴出の遺物の状況についてまとめておきたい。

和泉型瓦器埴編年の研究を中心的に推進した尾上実は、最初に提示した大阪府挟山遺跡井戸出土瓦器に基づく編年ではほとんど年代観を示しておらず、わずかにⅨ期（Ⅳ－4期）について出土古銭から15世紀前半代に位置づけられるとの年代を示しているに過ぎない（尾上1978）。尾上が具体的な年代観をある程度示したのは、挟山遺跡の編年を機軸としながら南河内の瓦器の編年を検討し、Ⅰ期～Ⅳ期に時期区分を再編した編年においてである（尾上1983）。大阪府国府遺跡、奈良県当麻寺曼荼羅堂など紀年銘遺物の伴出例や伴出遺物の年代を参考としながら、Ⅰ期初頭を11世紀中葉、Ⅱ期とⅢ期の境界を12世紀末～13世紀初頭、Ⅳ期末を15世紀中葉以前と想定した。さらに、尾上はその後の紀年銘伴出例を加えて和泉型各時期の暦年代を推定し、Ⅰ期を11世紀中葉～12世紀前葉、Ⅱ期を12世紀中葉（第2四半期）～13世紀初頭、Ⅲ期を13世紀初頭～13世紀後葉、Ⅳ期を13世紀末～15世紀中葉（第2四半期）の年代を与えた（尾上1985）。その後、森島康雄は楠葉型埴、和泉型埴、大和型埴の共伴関係を整理して各型式の併行関係を整理し、既往資料の型式認定や紀年銘遺物と瓦器埴の出土例を詳細に検討して、従来の年代観について修正を加えた。和泉型埴については主として暦年代を確実におさえることができた大和型埴との併行関係に基づいて、1161年をⅡ－2・3期の存続期間の1点として、1180年をⅢ－1期の存続期間の1点として、1243年をⅣ－1期の存続期間の1点をして与えることができた。また、従来和泉型埴と共伴紀年銘遺物の年代に開きがあるとされてきた例についても、大阪府津堂遺跡（1102年）はⅡ－1期の上限年代、岡山県助三畑遺跡（1181年）はⅢ－1・2期の上限年代と考えれば矛盾がなく、大阪府国府遺跡（1172年もしくは1174年）のⅡ－2・3期、京都府鳥羽離宮跡（1203年）のⅢ－2・3期は存続期間の1点と考えることができるのに対して、大阪府萱振遺跡（1158年）のⅢ－2期については年代的な開きがあるとしている。瓦器埴の終末期の年代については決定的な資料を欠くためさらに慎重な検討が必要であるが、和泉型Ⅳ－2期の年代観や共伴遺物の年代観から14世紀半ばを下らないと判断している。これらのことから、和泉型埴の年代として、Ⅰ期が11世紀半ば～12世紀初頭、Ⅱ期が12世紀前葉（第1四半期）～12世紀中葉（第3四半期）、Ⅲ期が12世紀後葉～13世紀前葉、Ⅳ期が13世紀中葉（第2四半期）～14世紀半ばと想定した。橋本久も楠葉型埴、和泉型埴、大和型埴の共伴例、紀年銘遺物の共伴例、共伴遺物、文献史料と遺構との対比などを通じて瓦器埴の年代を検討しており、和泉型埴の年代については、Ⅰ期が11世紀中葉（第3四半期後半）～12世紀初頭、Ⅱ期が12世紀初頭～12世紀中葉（第3四半

期)、Ⅲ期（原文はⅢ期第1小期・第2小期）が12世紀中葉（第3四半期後半）～13世紀中葉（第2四半期）、Ⅳ期（原文はⅢ期第3小期～Ⅳ期）が13世紀中葉（第2四半期）～14世紀中葉（第2四半期）としており、森島の年代観とほぼ一致している。近年の論攷を参照しても森島の年代観がほぼ受け入れられている状況であろう（佐藤2006など）。

東広島キャンパス出土の瓦器碗は、先に指摘したように、いずれも和泉型Ⅲ-2期の中におさまる特徴を有している。森島の編年観では、Ⅲ期は12世紀後葉～13世紀前葉に位置づけられ、そのうちⅢ-2期は1200年を前後する時期（12世紀末～13世紀初頭）に位置づけられているが、東広島キャンパス出土瓦器の廃棄あるいは遺棄の年代がこうした年代観の関連でどのように捉えることができるのか、ここで整理しておきたい。

出土資料のうち、もっとも一括性の高いのは鏡西谷遺跡C地区SB01出土瓦器である。出土瓦器はSB01北半部に一括廃棄されたような状態で出土しており、中国産青磁、東播系須恵器、亀山焼、土師質土器、石鍋などが伴出した。中国産青磁は、同安窯系青磁碗I-1b類・Ⅱ類、ⅢI-2b類、龍泉窯系青磁I-4類であり、両者の組成については12世紀後半～13世紀初頭の年代観が示されている（横田・森田1978）。東播系須恵器は、捏鉢、片口鉢、甕が出土している。捏鉢、片口鉢は底部から口縁部にかけてはわずかに外反するもの、わずかに内湾するものがあるが、基本的に直線的に開いている。口縁端部内面はほぼ直線的なものと同様に屈曲して立ち上がるものがあるが、屈曲するものも屈曲度は大きくない。口縁端部外面は断面三角形に肥厚して稜線を形成しているが、器厚は5mm程度と薄手であり、肥厚帯の幅は1～1.5cmと狭い。底部は狭く、底面との境界はやや丸みを帯びている。甕は胴部小破片で、全体の形をうかがえるものはない。外面は平行タタキである。捏鉢の特徴から見て森田編年第Ⅱ期第2段階（森田1995）の中におさまる資料と思われる、12世紀末～13世紀初頭に位置づけられている。亀山焼は捏鉢、甕が出土している。捏鉢は側面観が逆台形を呈し、底部が小さいため、不安定な印象を受けるものである。口縁部は直線的で、全体に薄手である。口縁端部は平らにおさめている。甕は肩部の破片で、方形タタキ目、内面には同心円状のタタキ目が明瞭に残されている。亀山焼第1段階に位置づけられるものと思われる、12世紀末～13世紀前半に比定される（岡田1988）。石鍋は口縁部が直立気味で、やや広めの鑿が口縁部直下につき、底径が大きい。破片のため全体の形状は明確にすることはできないが、逆台形の側面観を有し、鑿直下から底部に

かけては緩やかに膨らみ気味のカーブを描く可能性がある。鐔の形状は断面台形を呈し、水平に作出されている。木戸雅寿の編年ではⅢ-a-2類に比定されるものと思われる、12世紀後半に位置づけられるものであろう（木戸1995）。伴出遺物の年代は相互に調和的であり、12世紀末～13世紀前葉の幅におさまる。中国産青磁、瓦器、東播系須恵器の年代を重視すれば、12世紀末～13世紀初頭となろう。瓦器塚はⅢ-2期の中では口径・器高がやや縮小傾向にあり、ミガキのやや粗いものが認められること、高台の貼付や調整に省略の顕著なものが含まれていることなどから、Ⅲ-2期でも新相を示している可能性があり、13世紀初頭の年代が妥当かもしれない。

鏡西谷遺跡C地区SB01を除くと、一括資料と捉えることができる瓦器はないが、近接の遺構や陶磁器の出土状況などから、ある程度の分布のまとまりを捉えることは可能である（永田・藤野2009）。鏡西谷遺跡B地区の陶磁器は調査区東半部と西半部の大きく二つの分布域を認めることができる。東半部の分布は調査区北東部の遺構群に関連するものと推定され、備前焼を主体として、龍泉窯系青磁、瀬戸・美濃系天目碗が出土しており、多くは14世紀後半～15世紀初頭を中心とする時期に位置づけられる。調査区東半部の南半部で瓦器塚2点が出土している。2点のうち1点は和泉型Ⅲ-2期であり、1点は小破片で詳細な時期は不明であるが、Ⅲ期に属する可能性がある。瓦器と調査区北東部の遺構群や遺物とは時期が大きく異なっており、出土位置などから見ても近接するC地区SB01との関連で考えることが妥当であろう。B地区西半部の陶磁器はさらに北部と南部に分布が分かれており、北部では同安窯系・龍泉窯系青磁が、南部では青磁、朝鮮産青灰釉陶器碗、瀬戸・美濃系灰釉碗、備前焼播鉢が出土した。北部には平坦面や完形土師質土器集中遺構（SX01）が位置しており、陶磁器は遺構に近接して出土している。C地区SB01と接合した青磁もあり、同時期に位置づけられる。南部の陶磁器は15世紀～16世紀に位置づけられ、北部の遺構や出土土器とはかなり時期差がある。西半部の瓦器は南部のC4・5区を中心に北部のC・D2区などで散漫に出土している（合計5点）。いずれも小破片であるが、時期判定の可能な資料はⅢ-2期であり、その他もおおむねⅢ期に属すると見ることができる。調査区西半部北部の陶磁器や土師質土器とは時期的に整合し、組成の一部をなすと見ることができる。また、調査区西部では第Ⅱ期第2段階に位置づけられる東播系須恵器捏鉢が出土しており、組成に加えられるものと思われる。

鏡西谷遺跡C地区では調査区東半部のSB01およびその南側の他にも、調査区西半部の北部（B2区、D1・2区）で瓦器が7点出土している。いずれも小破片であるが、

和泉型Ⅲ期に属するものと思われる。周辺では、青磁、白磁、備前焼が出土しているが、12世紀後半～13世紀初頭に位置づけられる同安窯系青磁碗、13世紀末～14世紀前半の備前焼播鉢、15世紀代前半に位置づけられる龍泉窯系青磁碗、白磁坏の大きく3時期の資料が混在している。B地区や後述するD地区、E地区、F地区でも複数時期の出土遺物が認められ、鏡西谷遺跡の広い範囲で13世紀初頭以降、複数時期にわたって人々の活動が行われたことが窺えるが、出土瓦器は同安窯系青磁碗と時期的な整合関係があり、東側のS B 01と密接な関係にあるものと思われる。また、調査区西半部北部で第Ⅱ期第2段階の東播系須恵器捏鉢、甕、第1段階の亀山焼甕が出土しており、これらも組成の一部と想定される。

鏡西谷遺跡D地区ではC地区S B 01に先行すると考えられる1号土壙墓（S K 05）や竪穴遺構（S B 04）の周辺から青磁碗2点が出土している。瓦器1点がこれらの遺構の西側近接地点から出土している。小破片であり、詳細な時期は不明であるが、青磁に組成するとみても矛盾はない。鏡西谷遺跡E地区では調査区北部を中心に青磁、白磁、東播系須恵器、備前焼が出土した。青磁は12世紀後半～13世紀初頭に位置づけられる同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗、白磁碗・四耳壺、東播系須恵器捏鉢、甕と14世紀中頃～15世紀初頭に位置づけられる龍泉窯系碗、備前焼播鉢が出土しており、前者を主体としている。瓦器は陶磁器類の分布とほぼ重なるが、陶磁器類の分布が調査区北部の西端部と中央部～東部の2ヶ所に分離傾向にあるのに対して、瓦器は調査区北部の西部～中央部にかけて分布しており、東播系須恵器も瓦器の分布とほぼ一致する。瓦器は時期判別ができるものはいずれも和泉型Ⅲ-2期に属するものであり、その他のものも調整や胎土、色調などから同時期のものと思われる。E地区の主体をなす青磁、白磁と時期的に整合し、組成をなすものと思われる。鏡西谷遺跡F地区では丘陵先端部に作出された平坦面上に1号掘立柱建物（S B 01）、2号積石塚（S S 02）、1号土壙墓（S K 01）、2号土壙墓（S K 02）が構築されており、瓦器がS S 02およびその周辺から2点出土した。S S 02に先行すると考えられるS B 01に伴うものと思われ、土師質土器が組成する。瓦器碗は和泉型でⅢ期に属するものと思われる。山中池南遺跡第1地点の瓦器は単独出土であり、同時期の組成土器は明確ではない。

4. 安芸地方における出土瓦器と遺跡の様相

1) 安芸地方の瓦器研究の現状

安芸地方（広島県西部）では中世前期に属する遺跡の発掘調査が低調で、研究の基礎となる土師質土器の編年研究も確立していないのが現状である。しかし、少しずつではあるが、中世前期の発掘調査事例も増加し、開発の進んでいる広島湾沿岸地域、西条盆地地域を中心として、資料の蓄積が確実に行われている。広島湾岸では旧国府域の遺跡や山陽道沿いの公的性格の強い遺跡、寺院関連遺跡などを中心として、太田川放水路遺跡など一部に流通に関わるとされる遺跡を含んでいる。西条盆地でも国分寺跡やその周辺遺跡などを主体としており、溝口4号遺跡など一部に荘園と関連する可能性のある遺跡を含んでいる。これらの資料に基づいて流通の末端的様相については少しずつ解明が進むものと思われるが、流通拠点、中継地の性格をもつ遺跡の調査・解明は手つかずの状態である。

安芸地方の中世前期遺跡の多くでは瓦器の出土が知られており、これまでいくつかの論考が行われている。川越俊一は広島県における瓦器出土の13遺跡（安芸地方9遺跡、備後地方4遺跡）を取り上げて各遺跡出土の瓦器を概観し、形態、調整および暗文（見込みのミガキ）から大半は和泉型に比定されること、福山市草戸千軒町遺跡、鞆遺跡などで少量の楠葉型が認められること、瓦器は畿内からの搬入品と想定されること、出土瓦器はⅡ～Ⅳ期を主体とするが、Ⅰ期に比定されるものが草戸千軒町遺跡では確認できることなどを指摘した（川越1981）。安芸地方については広島湾岸を取り上げ、備後地方が物資の集散地的性格を持った遺跡から出土するのに対し、小貝塚からの出土が多く小規模集落の様相を示していると述べている。橋本久和は中・四国地方の瓦器出土遺跡を検討し、①古代の官道である山陽道や南海道に沿う遺跡、②物資の集散地的性格を持つ遺跡、③瀬戸内の島嶼部の遺跡に分類し、安芸地方の遺跡については①に属するとした（橋本1992）。その後、橋本は広島湾岸における瓦器出土の9遺跡を対象に、河口部の遺跡、安芸国府周辺の遺跡、山陽道周辺の遺跡、厳島の遺跡に4分類して分析を行い、いずれも和泉型であることを再確認するとともに、Ⅲ期を中心にⅣ期のものが搬入されているとした（橋本2001）。遺跡の性格については、太田川放水路遺跡、畝観音免第1号古墳、石原常本貝塚など河口部に位置する遺跡は内陸部荘園と瀬戸内を結ぶ流通拠点と関連した遺跡、下岡田遺跡など国府周辺の遺跡や広島市西部の山陽道沿いの遺跡は山陽道沿いの宿駅、市、関などに成立した流通拠点と関連する遺跡と評価している。また、菩提院遺跡については寺院との関連が濃厚であるが、輸入陶磁器や古瀬戸、瓦器、吉備系土器などの量から見て、厳島が安芸地方と瀬戸内、畿内を結ぶ中継交易拠点の性格を有するようになったと解釈している。

これら広島湾岸の遺跡成立の背景として、内陸との結節点としての湊などの流通拠点や官道沿いの宿駅、市、寺院門前町などの流通拠点の存在が一斉に明らかとなるのは和泉型Ⅲ-1・2期の時期であり、こうした状況は西日本の広い範囲を通じて指摘できること、この時期は平氏政権から源平の争乱期に相当し、畿島の近接する広島湾岸の遺跡は平氏と密接な関連があると想定されることを述べている。さらに、橋本は、岡山県、広島県の畿内産瓦器出土遺跡を概観し、①河川河口部の拠点的な遺跡、②山陽道に沿った遺跡、③製塩関係・小貝塚・物資中継地といった瀬戸内特有の産業に関連する遺跡の3種類に再整理している(橋本2009)。安芸地方では、太田川放水路遺跡、畝観音免第1号古墳、石原常本貝塚を①に、下沖2号遺跡、池田城跡、中垣内遺跡などを②に、菩提院遺跡を③に比定している。

2) 安芸地方出土の瓦器

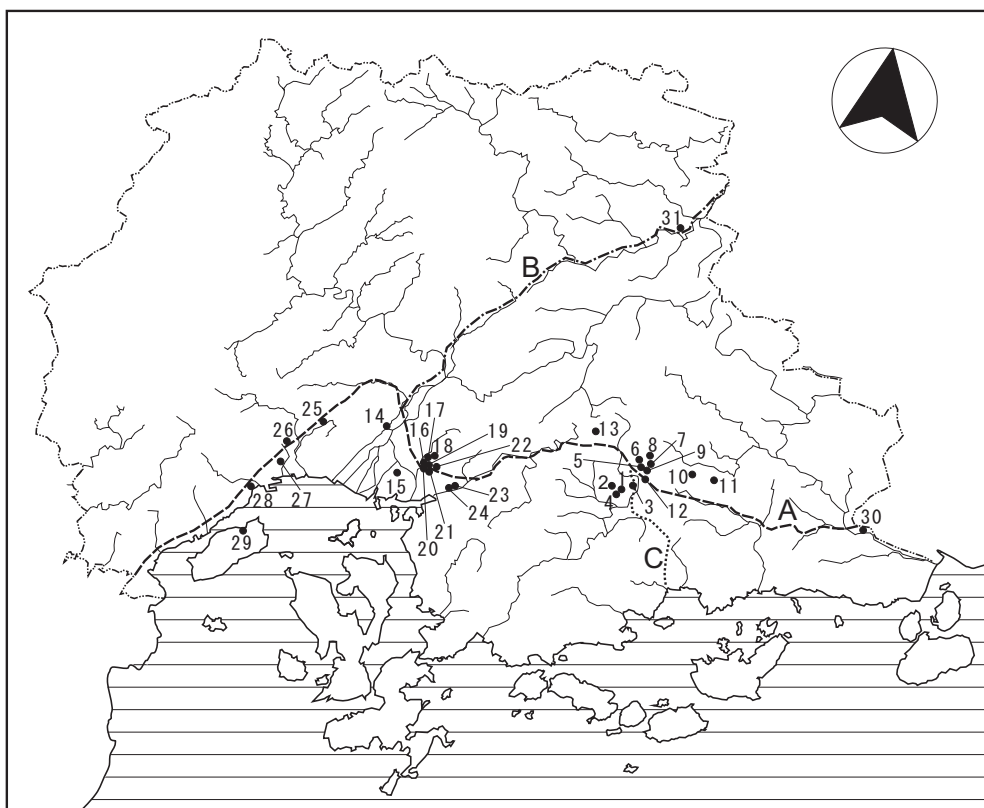
現在、安芸地方では瓦器出土遺跡として31遺跡を確認することができる。出土遺跡は、安芸地方南東部に位置する西条盆地と安芸地方南西部に位置する広島湾沿岸を中心として、安芸地方南東端部に位置する沼田川下流域の三原市域、安芸地域北東部に位置する吉田でわずかに分布している。ここでは、西条盆地、広島湾沿岸、沼田川下流域(竹原市域を含む)、芸北地域の4地域に分けて様相を述べてみたい。

1. 西条盆地

東広島市のほぼ中央部に位置しており、13遺跡を確認することができる(第3表)。安芸国分寺跡などが位置する西条盆地北部を中心に、西条盆地北東部の高屋地区、西条盆地中央部の鏡山周辺に遺跡は分布している。前節で詳細に説明を行った鏡西谷遺跡の他にも、鷺田遺跡(129点)、道照遺跡(400点以上)、大地面遺跡(500点以上)では多量の瓦器破片が出土しているが、その他の遺跡では10点以下の出土が大半である。

①^{どうしょう}道照遺跡(東広島市西条町大字御菌宇) 標高337mの八幡山から東に延びる丘陵先端に立地し、集落跡と西側に接して存在する館跡からなる。道照館跡は東辺約75m、西辺約25m、南辺約105m、北辺約125mの台形状を呈しており、土塁と平坦地が残る。1981年に調査が行われ、出土した常滑焼片などから室町中期以前には成立していたと考えられるものの、詳細は不明である(松村編1981)。集落跡については1982年に広島県教育委員会(鍛冶編1982)が、1993年に東広島市教育委員会が調査を行っている(藤岡1993)。いずれの調査区も中世前期の遺構を主体としているが、出土陶磁器の様相からみると両調査区では主体となる遺構形成時期に時間差が存

在するようである。広島県調査区では、掘立柱建物跡 12 棟、鍛冶場跡 2 棟、井戸 5 基、館東辺部をめぐると思われる堀、多数のピットが検出されている（鍛冶編 1982）。出土瓦器（第 34 図 1～11）は、408 点（破片数）を確認しており、大半は単独柱穴や包含層出土である。埴を主体としており、内訳は、埴 403 点（口縁部 154 点、底部 47 点、体部 202 点）、皿 5 点で、埴とした中には一定量皿が含まれている可能性がある。掘立柱建物跡（S B 10）で瓦器埴、白磁碗、亀山焼甕、土師質土器坏・皿、井戸（S E 4）で瓦器埴、土師質土器坏、井戸（S E 6）で瓦器埴が出土した。S B 10 の瓦器埴（6）は 2 点確認でき、口縁端部を丸くおさめており、内面にミガキを施している⁷⁾。



第 33 図 安芸地方における瓦器出土遺跡分布図

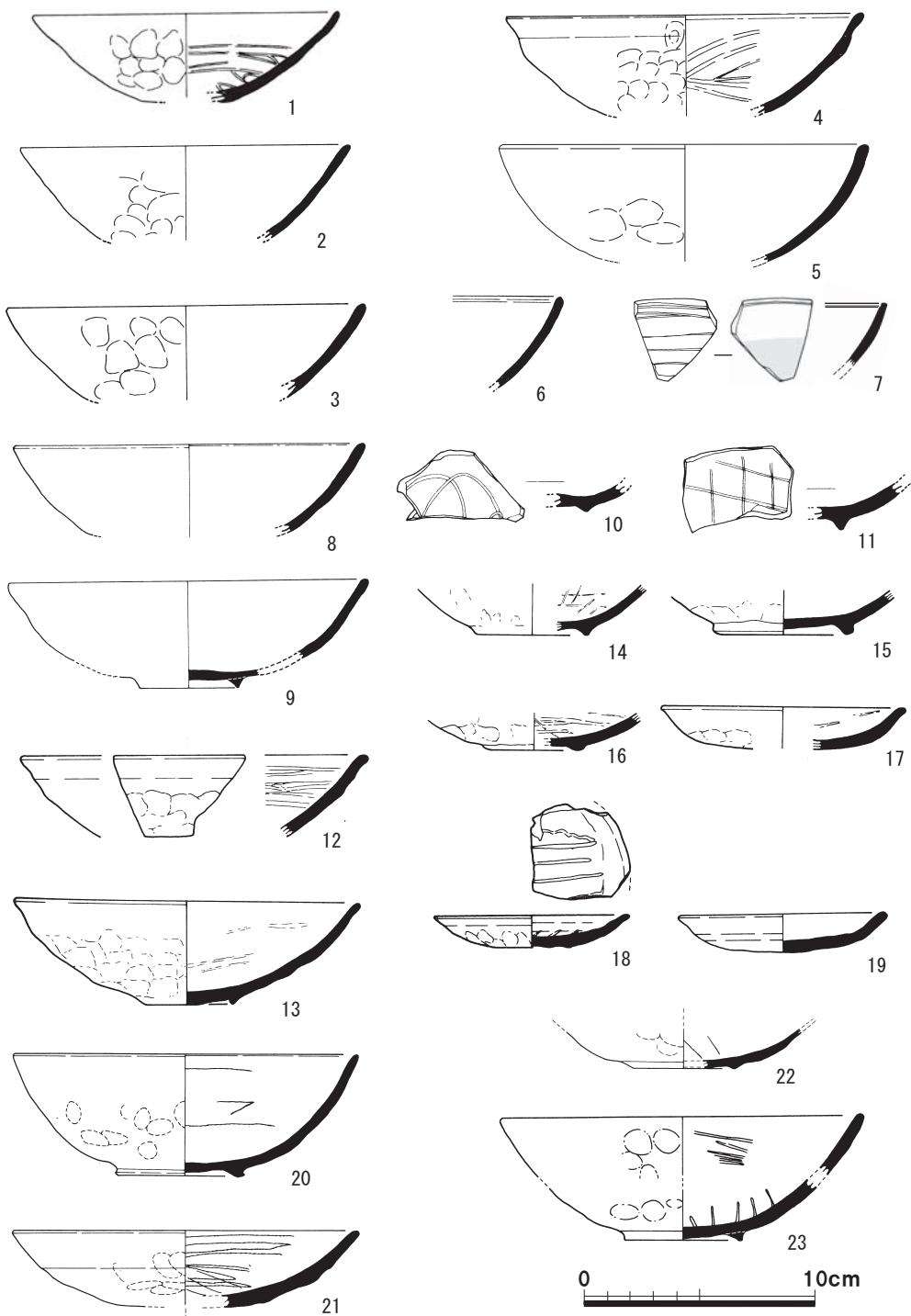
（Aは推定中世山陽道、Bは推定中世出雲街道、Cは推定中世安芸津街道（仮称）である）

1. 鏡西谷遺跡 2. 山中池南遺跡第 2 地点 3. 道照遺跡 4. 西中郷遺跡 5. 安芸国分寺跡 6. 大地面遺跡 7. 鷺田遺跡 8. 石佛遺跡 9. 安芸国分尼寺跡伝承地遺跡 10. 溝口 4 号遺跡 11. 小谷黄幡遺跡 12. 下上戸遺跡 13. 南太刀掛遺跡 14. 太田川放水路遺跡 15. 比治山第 2 貝塚 16. 下岡田遺跡 17. 石井城第 II 号遺跡 18. 石井城貝塚 19. 水分神社遺跡 20. 府中小学校裏（経免）遺跡 21. 長福寺南門貝塚 22. 山田貝塚 23. 畝観音免第 1 号古墳 24. 石原常本貝塚 25. 下沖 2 号遺跡 26. 池田城跡 27. 中垣内遺跡 28. 地御前南町遺跡 29. 菩提院遺跡 30. 三太刀遺跡 31. 郡山大通院谷遺跡

S E 04 の瓦器塚 (10・11) は 2 点確認でき、いずれも底部破片で、断面三角形の高台を貼り付け、内面には格子状や連結輪状の暗文を施している。S E 6 の瓦器塚 (8・9) は 2 点確認でき、口縁端部を丸くおさめ、体部外面は指頭調整痕が明瞭に残されている。内面は入念な圏線状のミガキを行っており、うち 1 点は高台が三角形を呈し、復元口径 16cm 前後、復元器高 5cm 程度である。他の資料は単独の柱穴や包含層出土である。包含層や瓦器が出土していない遺構では、青磁碗・皿・盤、白磁碗、青白磁壺、東幡系須恵器鉢・甕、亀山焼甕などが出土しており、瓦器と同時期に位置づけられる。

広島県調査地区の単独柱穴や包含層出土の瓦器は大半が塚 (1～5・7) で、わずかに皿が見られる。遺構出土の塚・皿とほぼ同様の特徴を窺うことができる。塚は口縁端部を丸くおさめ、体部外面には指頭調整が残る。大半は内面に圏線状ミガキが施され、外面にミガキがあるものもわずかに認められる。法量は口径 15cm 前後、器高 4.5cm 前後のものが多いようで、口径 14cm 代のものも認められる。器壁は大半が灰褐色や灰白色であるが、内外面ともに黒褐色もしくは暗灰色のものも一定数認められる。和泉型に属するものと判断されるが、単独柱穴 P - 324 出土瓦器 (7) は内外面にミガキ (内面の灰色部分は密なミガキを示す) が施され、口縁端部に沈線を施しており、楠葉型Ⅲ - 2 期に比定できるものと思われる。和泉型については、Ⅲ - 2 期を主体とすると思われるが、口径 16cm 程度、器高 5cm 程度の法量をもつ塚があり、Ⅲ - 1 期に遡るものと思われる。また、口径 14.5cm 以下、器高 4.5cm 以下の法量をもつ塚も一定量存在し、内面のミガキが粗く、暗文と一体化した資料があることから、Ⅲ - 3 期に属する資料も一定量含まれているものと思われ、Ⅳ - 1 期に下る資料も若干存在する可能性がある。

東広島市調査区では、溝状遺構 3 条、土坑 6 基が検出されている (藤岡 1993)。溝状遺構および土坑の一部は中世前期に位置づけられるもので、遺構中から瓦器が出土している (第 34 図 12～15)。S D 002 で白磁碗、瓦器塚 (16)・皿 (17)、東幡系須恵器甕、土師質土器皿など、S D 003 で白磁碗、瓦器塚 (13～15)、土師質土器坏・皿、石鍋など、S K 006 で瓦器塚 (12)、土師質土器坏などが出土している。S D 002 で瓦器塚 1 点、皿 1 点、S D 003 で瓦器塚 3 点、S K 006 で瓦器塚 1 点を確認できる⁸⁾。瓦器塚はほぼ共通した特徴を有しており、口縁端部を丸くおさめ、体部外面は指頭調整が顕著で、内面には圏線状のミガキを施している。高台は断面三角形、逆台形などを呈し、内面見込みに平行線状の暗文を配している。調整や形態の特徴から和泉型に



第 34 図 西条盆地出土の瓦器 (1)

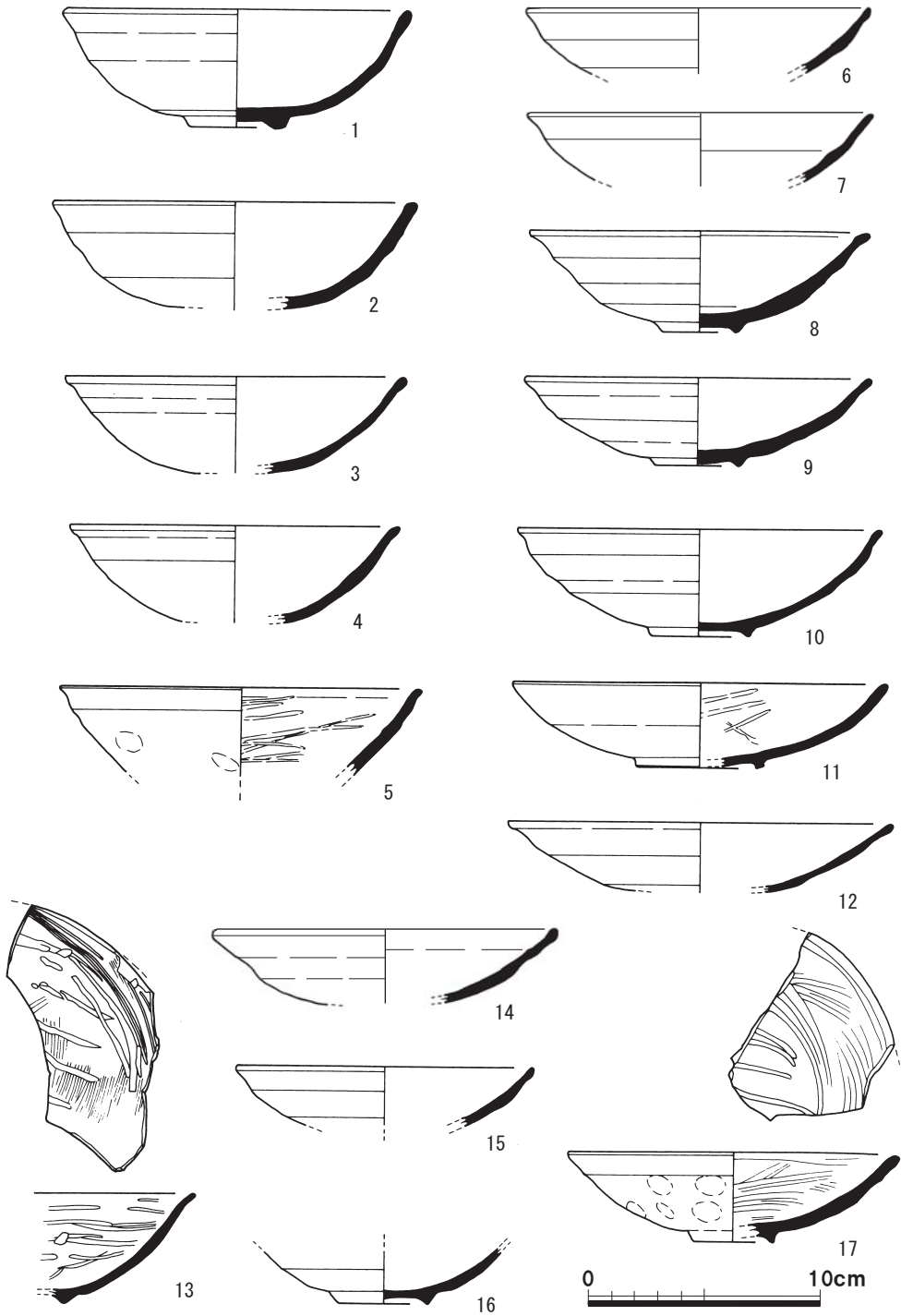
(1 ~ 17. 東広島市道照遺跡 (1 ~ 11 : 広島県調査区、12 ~ 17 東広島市調査区)、18. 東広島市西中郷遺跡
19 ~ 23. 東広島市安芸国分寺跡)

属すると判断され、Ⅲ－2期を主体とするものと思われる。

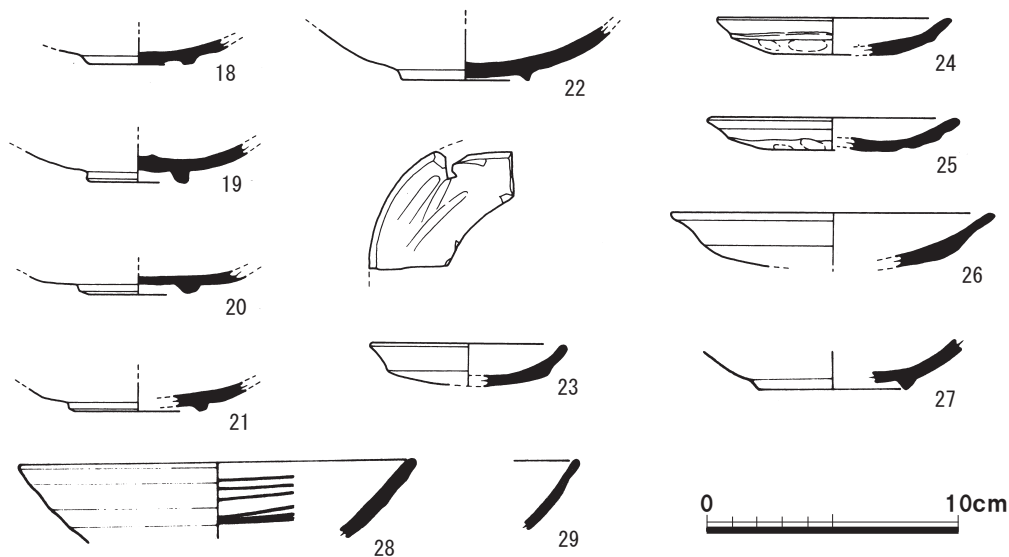
②西中郷遺跡（東広島市西条町田口）西中郷遺跡は川に向かって延びる低丘陵の先端部に立地し、現状は水田である。溝状遺構5条、土坑5基が検出され、中世の集落跡をとりまく溝や河川に接続する排水的な溝と考えられているが、調査範囲が狭く、詳細は不明である（青山ほか2009）。溝状遺構から瓦器皿（第34図18）が出土している。皿は口縁部が外反し、先端は先細り気味で、見込みには平行線状の暗文が見られる。和泉型Ⅲ期のものと思われる。備前焼Ⅳ期初頭頃の播鉢が出土しており、複数時期の遺物が混在している。

③安芸国分寺跡（東広島市西条町大字吉行）安芸国分寺跡は1932年に塔跡を検出したことにはじまり、1936年に「安芸国分寺塔址」として史跡認定された。その後、「安芸国分寺跡」として史跡指定地の拡大と名称変更がなされた。以後、周辺地域も含めて継続した調査が行われ、これまでに金堂や塔、軒廊、僧房などの伽藍配置が確認されている（妹尾編2003ほか）。中世の遺物に関しては、古代の遺物に混在する形で若干の遺物が出土している。第16次調査地区では自然流路から龍泉窯系Ⅰ－2類の青磁碗などとともに瓦器が出土しており、瓦器が3点（第34図20～22）報告されている（妹尾編2003）。この他、25次調査で近代の遺構と考えられる溝内から瓦器碗1点（23）と瓦器皿1点（1）が出土している（石垣2006）。碗は端部を丸くおさめ、体部外面には顕著に指頭調整が認められる。内面は圏線状のミガキを施している。法量は口径15cm前後であり、器高5cm程度の底の深い形態を含んでいる。皿は口縁部がヨコナデによって外反する。和泉型に属し、Ⅲ－1期およびⅢ－2～3期に位置づけられるものであろう。

④大地面遺跡（東広島市西条町西条）大地面遺跡は安芸国分寺跡北西約500mの南に延びる谷地形に位置し、谷頭に立地する。古代の掘立柱建物跡2棟、鑄造・鍛冶関連遺構、中世の井戸状遺構2基、テラス状遺構（SX5）、土坑、通路状遺構などが検出されている（吉野編2008）。中世の建物跡等は未検出のため遺跡の性格は明らかではないが、遺構や遺物分布状況から屋敷地の一部であった可能性が高いと考えられている。瓦器の大半はSX5およびその周辺谷部から出土しており、包含層中から、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、同安窯系青磁碗、東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕、備前焼などが伴出している。瓦器（第35図、第36図17～26）は534点を確認しており、碗を主体とする。碗523点（類完形7点、口縁部150点、底部46点、体部320点）、皿11点を確認した。碗（1～22）は口縁部を少し外反させ、外面を強くヨコナデして



第 35 図 西条盆地出土の瓦器 (2) (東広島市大地面遺跡)



第36図 西条盆地出土の瓦器(3)

(17～26. 東広島市大地面遺跡 27～29. 安芸国分尼寺伝承地遺跡)

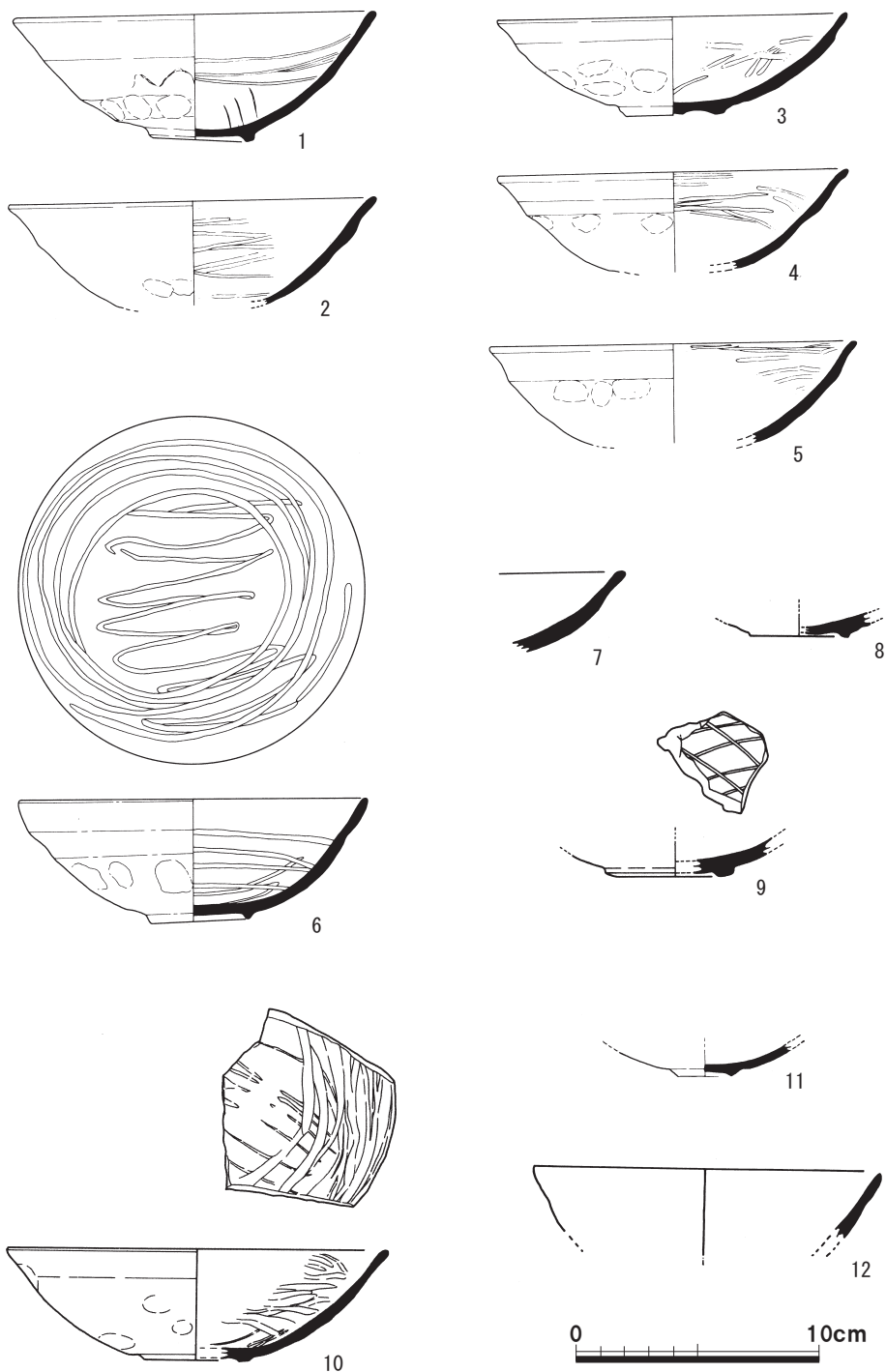
おり、体部外面には顕著に指頭圧痕が残されている。法量は口径15cm前後に主体があるが、14cm程度のもも認められる。器高は4～5cm程度であるが、4cm程度の器高が低いものが目立つ。暗文は、平行線状、格子状、不規則のものがあるが、暗文が認められないものもある。皿(23～26)は口径8～10cm程度のものが主体である。内面に圏線状のミガキを施すものが認められる(26など)。和泉型に属するもので、時期はⅢ-2期を主体として、Ⅲ-3期の資料を一定量含むものと思われる。確実にⅣ期に位置づけられるものは認められないが、Ⅳ-1期に下る資料が含まれている可能性はある⁽⁹⁾。

⑤安芸国分尼寺伝承地遺跡(東広島市西条町吉行) 安芸国分尼寺跡を探る目的で、1977年～1980年に安芸国分尼寺跡の東方約200mに位置する安芸国分尼寺伝承地一帯が調査された(是光編1978、松村編1979、松村編1980)。安芸国分尼寺に関連する遺構などは検出されていない。第2次調査区地区の周辺では中世の遺物が広い範囲で出土しており、古代以降も連続して人々の活動の場として活発に利用されたことが想定される。2次調査において、青磁、東播系須恵器、備前焼などの中世の遺物とともに包含層中から瓦器が出土している(松村編1978)。瓦器(第36図27～29)はいずれも碗で、断面三角形の高台をもつもの、口縁部をヨコナデした薄手のものなどがあり、和泉型Ⅲ-2期に相当するものと思われる。

⑥鷺田遺跡（東広島市西条町大字土与丸） 鷺田遺跡は安芸国分寺の西方約 200 m に位置し、水田・畑地となっていた。周囲の水田よりもやや標高が高く、本来は低い丘陵状の地形であった可能性がある。もともとは 1979 年の安芸国分寺伝承地にかかる第 3 次調査の際に遺構・遺物が検出された地区の一つであり、その後 1986 年に本調査がなされた。古代～中世の遺跡で、中世では、掘立柱建物跡 12 棟、井戸状遺構 2 基以上、土坑など、多数の遺構が検出されている（沢元 1989）。瓦器の出土遺構としては、掘立柱建物跡 S B 10 があり、柱穴内から埴 5 点（第 37 図 1～5）が出土した。この他、包含層出土資料を含め、瓦器 129 点を確認している。器種はすべて埴で、皿は確認できなかった。内訳は、類完形 1 点、口縁部 28 点、底部 14 点、体部 86 点である。S B 10 や周辺の包含層からは、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁碗 I 類、白磁碗 IV 類、東幡系須恵器甕・鉢、亀山焼甕などが出土している。埴は、口縁端部を丸くおさめ、体部外面には指頭調整が顕著に残され、内面には圏線状のミガキを施している。法量は口径 15cm 前後、器高 4.0～4.5cm 前後を主体とすると思われるが、器高 5cm のものがある。和泉型と判断され、大半はⅢ－2 期に比定されるが、一部Ⅲ－1 期に位置づけられるものがある。

⑦石^{いしぼとけ}佛遺跡（東広島市西条町大字吉行字石佛） 西条盆地の北東部、標高 578 m の龍王山の南裾に広がる台地から、南南東に延びる標高 235 m～245 m の低丘陵上および斜面に立地している。山陽自動車道建設に伴って 1986・87 年に調査され、中世古墓 53 基、土師質土器焼成窯跡 1 基などが検出された（佐伯 1990）。土師質土器焼成窯跡内の最終焼成面からは完形の瓦器埴が伏せた状態で出土した。周辺からは完形の土師質土器の坏・皿もやはり伏せた状態で出土しているが、土師質土器は内部に炭・焼土がつまっていたのに対し、瓦器埴は空洞であった。また、胎土分析によって遺跡周辺の粘土でつくられていないことも判明している（三辻 1990）。これらのことから、この瓦器埴は窯の廃絶儀礼に関わるものと考えられる。瓦器埴（第 37 図 6）は口縁端部を丸くおさめ、体部外面には指頭調整が顕著に認められる。内面見込みにジグザグ状の暗文を施したのち、体部に圏線状のミガキを施すなど鏡西谷遺跡出土の瓦器埴と共通した特徴が窺える。和泉型と判断され、Ⅲ－1～2 期に位置づけられる。

⑧溝口 4 号遺跡（東広島市高屋町溝口） 標高 453 m 白鳥山の北側に広がる扇状地の扇中央部に位置する。白鳥山から北流する溝口川が遺跡の西側に近接しており、遺跡は標高 230 m 前後の埋没丘陵に立地している。東広島県道路インターチェンジ建設に伴って 2007～2008 年に発掘調査された（吉野編 2010）。鎌倉～室町時代の遺跡であり、



第37図 西条盆地出土の瓦器(4)

(1～5. 東広島市鷺田遺跡 6. 東広島市石佛遺跡 7～9. 東広島市下上戸遺跡 10. 東広島市溝口4号遺跡
11. 東広島市小谷黄幡遺跡 12. 東広島市南太刀掛遺跡)

中世前期（13世紀後半～14世紀前半）と中世後期（14世紀後半～15世紀半ば）の大きく2時期の遺構群が検出されている。中世前期の遺構群は調査区中央部～南半を中心に営まれ、幅7～10m、深さ2～3mの同時期では国内最大級の堀（大溝）が方形に廻らされ、堀内では掘立柱建物跡2棟、屋敷地区画溝、水路などが南北に貫く道路跡を中心に整然と配置された形で検出されている。堀が土石流で埋没した後、調査区北部の低地部を中心に中世後期の集落が形成されており、屋敷跡、庭園と思われる池跡などが検出されている。瓦器は堀埋土中を中心に出土しており、4点確認できる。いずれも埴である。全体が分かるもの（第37図10）は1点しかないが、口縁部のヨコナデや体部外面の指頭調整、器形などから和泉型のⅢ-2期と考えられ、他の破片についても同様であると思われる。堀埋土や堀内の包含層からは、龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-5類）、白磁碗・皿、青花、東幡系須恵器鉢、備前焼甕、亀山焼甕、土師質土器杯・鍋などが出土しているが、瓦器と同時期の遺物は東播系須恵器、土師質土器の一部のみである。遺跡の形成は遅くとも13世紀前半には開始されたものであろうが、現状では遺構として確認されるものはない。

⑨^{こたにおうぼん}小谷黄幡遺跡（東広島市高屋町小谷）南側に東西に連なる標高450m～520mの山塊があり、そこから北側に延びる丘陵群の斜面に立地している。遺跡の前面は小規模な谷地形となっており、遺跡の地勢は南西から北東にかけて緩やかに傾斜する。山陽自動車道建設に伴って1987年に発掘調査が実施された（鍛冶1992）。古墳時代～近世の遺跡で、調査区西部のA・B地区を中心に中世の遺構・遺物が検出された。平坦面、溝、土坑などで構成されるが、建物跡は検出されていないことや遺構が少ないことから中世の活動については不明な点が多い。溝（SD5）で青磁碗、瓦器が古墳時代の須恵器高坏などとともに出土した。瓦器（第37図11）は1点のみで、底部の破片である。高台は断面三角形を呈し、低く、高台径は3.0～4.0cm程度である。和泉型に属するものと思われ、Ⅲ-2～3期に比定される可能性がある。青磁碗は龍泉窯系Ⅰ類である。この他に、調査区内の包含層中から、青磁碗、亀山焼甕、備前焼甕などが出土している。

⑩^{しもかわど}下上戸遺跡（東広島市西条町御藪宇）標高約250mの円城寺山の山頂から北西にゆるやかに下った標高220m～227mの鞍部付近を中心に、南北の谷部に立地している。1993年度（吉野1996）と1999年度（吉野2000）に調査が行われており、両調査区で室町期を中心とする中世の遺構・遺物が確認されている。1993年度地区では瓦器埴1点（第37図7）が土坑（SK29）から出土している。1999年度調査区で

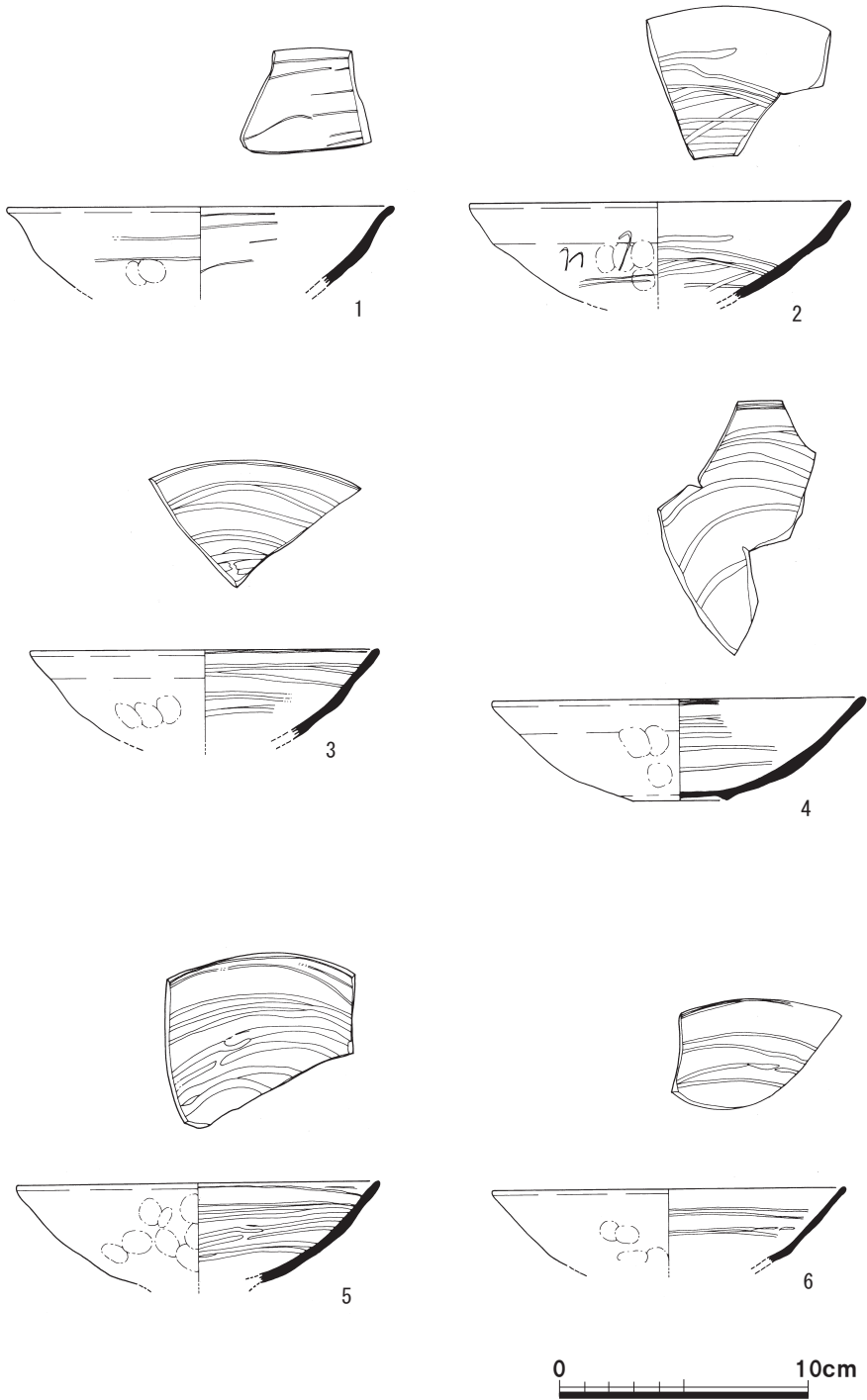
は室町期の建物跡、井戸跡、池状遺構などが検出され、掘立柱建物跡に伴う溝から瓦器が出土した。瓦器塚2点（第37図8・9）が出土しているが、遺構の年代を示すものではなく、調査では中世前期（12世紀～13世紀）の遺構は明らかにされていない。塚は高台部の破片であり、高台の断面形が1点は方形状、もう1点は三角形状に近く、断面方形状のものは見込みに格子状の暗文が施されている。和泉型Ⅲ－2期の瓦器塚であると思われる。この他に周辺からⅣ・Ⅴ類の白磁碗、同安窯系青磁皿、龍泉窯系Ⅰ類の青磁碗、備前焼播鉢などが出土している。なお、1993年度調査区でも白磁碗Ⅳ類や龍泉窯系青磁碗が出土しており、遺構は検出されていないものの、広範囲に中世前期に何らかの活動が行われていたことが想定される。

①南太刀掛遺跡（東広島市志和町大字七条柵坂） 東広島市八本松町・志和町の境界をなす東西山塊の北側山麓裾の北へ延びる丘陵先端部に立地し、標高は約275mである。弥生時代の住居跡が検出されており、遺構上の包含層中から古墳時代～古代の遺物とともに瓦器塚1点（第37図12）が出土している（伊藤1985）。瓦器塚は口縁端部を丸くおさめ、口縁部外面のみが黒く、他は灰褐色である。和泉型の瓦器塚で、時期は和泉型Ⅲ期である。他に同時期の遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

II. 広島湾岸

太田川下流域（河口部）、八幡川下流域（河口部）、瀬野川下流域など、瀬戸内に面した広島湾岸地域で、内陸部への結節点であると同時に、東西に山陽道が貫き、陸路における主要な物流の移動経路でもある。また、太田川と瀬野川の間位置する安芸郡府中町域は安芸国府の存在が推定されている。中世前期においては、現在広島市中心部が広がる三角州はきわめて未発達で、広島湾に直接アクセス可能な地勢であったものと思われる。瓦器出土遺跡として16遺跡を確認しており（第4表）、下岡田遺跡をはじめとして府中町域に密集した遺跡分布が認められる他、下沖2号遺跡、中垣内遺跡など広島湾西部の八幡川下流域、厳島およびその対岸の地御前南遺跡、菩提院遺跡、畝観音免第1号古墳など広島湾東部の瀬野川下流域などに点々と遺跡分布を確認することができる。

①太田川放水路遺跡（広島市安佐南区祇園町） 1952年の太田川放水路掘削工事の際に発見され、小規模な調査が実施されている（松崎・潮見1961）。調査地点は河川の自然堤防あるいは砂州上と推定されており、当遺跡は中世の海岸線を推定する上で重要な遺跡である。小貝塚と木組井戸が検出されている。遺物出土状況の詳細については不明であるが、龍泉窯系青磁碗、白磁四耳壺、東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕、



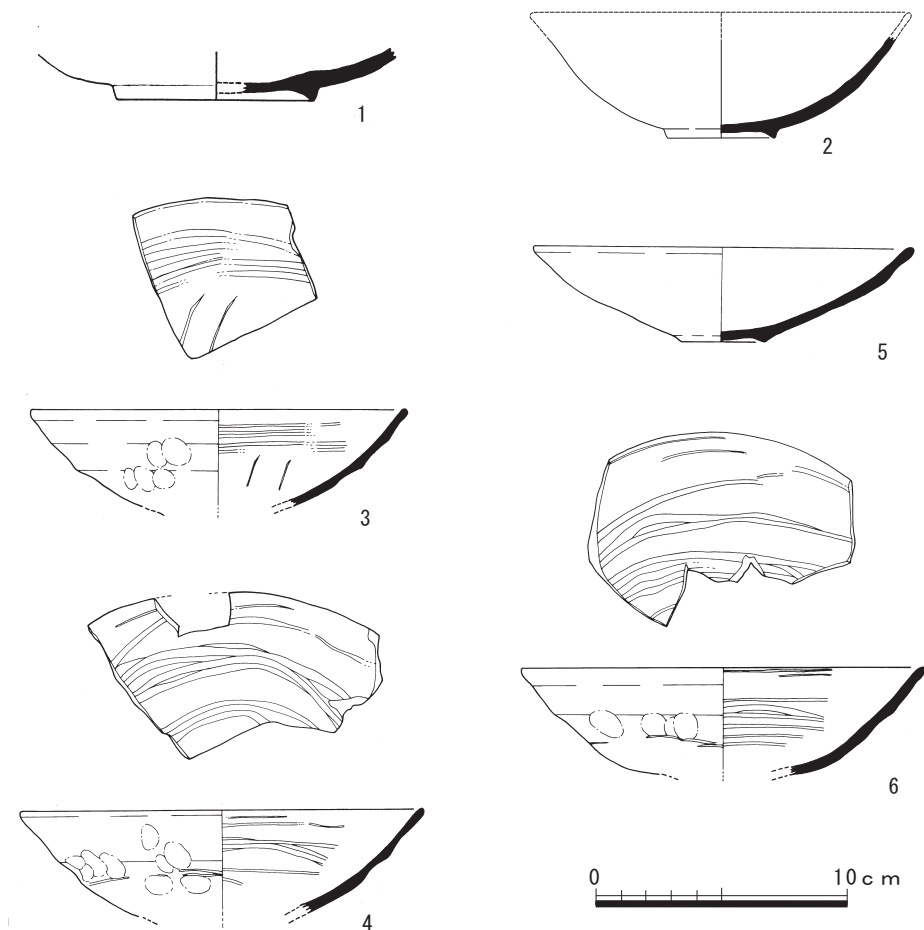
第 38 図 広島湾岸出土の瓦器 (1)

(1 ~ 4. 広島市太田川放水路遺跡 5・6. 広島市比治山第 2 貝塚)

瓦器、土師質土坏などが出土している。瓦器は22点の破片が認められ、いずれも埴（第38図1～4）である。破片の内訳は、口縁部12点、底部4点、体部6点で、10点前後の個体数が存在するものと思われる。口縁端部は丸くおさめており、体部外面は指頭調整による凹凸が顕著である。外面にミガキを施すものを数点認めることができるが、規則性に乏しく、大半の資料はミガキが認められない。内面は圏線状のミガキが認められ、やや密なものとかかなり間隔が開いているものがある。暗文は平行線状のものが認められるが、見込み部分まで間隔の広い圏線状ミガキを施すものもある。高台は断面方形状のもの他にも粘土紐を貼付けただけでほとんど成形を行っていないものも認められる。器壁は、暗青灰色～暗灰色、灰白色などを呈する。法量は口径15cm前後のものとは14cm前後のものが認められ、後者は内面の圏線状ミガキの間隔が広い。いずれも和泉型に比定されるもので、Ⅲ-1～3期に位置づけられる⁽¹⁰⁾。

②比治山第2貝塚（広島市南区比治山公園） 旧広島市街地が位置するデルタ内の比治山丘陵南部に立地する中世の貝塚で、近接して位置する縄文時代後期の貝塚とともに1953年に調査された（松崎1954）。比治山丘陵はデルタ形成以前には広島湾に浮ぶ島であり、本遺跡が形成された当時、広島湾に突き出た半島状の地勢であったものと推定される⁽¹¹⁾。出土状況の詳細は不明であるが、東播系須恵器とともに瓦器2点が出土している。瓦器は埴（第38図5・6）で、口縁端部を丸くおさめており、体部外面は丁寧にナデ仕上げしているが、指頭調整痕による凹凸が顕著である。外面にはミガキは観察できない。内面にはやや粗い圏線状のミガキが施されている。口径は15cm程度と推定され、器壁は灰白色を呈する。和泉型に属すると判断され、Ⅲ-2期に比定される。

③下岡田遺跡（安芸郡府中町城ヶ岡） 1963年～1985年まで8回にわたる発掘調査が実施されている（小倉編著1963・1964、潮見・藤田編1966、潮見・入倉・鈴木ほか1983・1984・1985）。これまでの調査で、標高約424mの高尾山南西裾から西南西に延びる低丘陵南端部平坦面を中心に、礎石建物2棟、掘立柱建物7棟、竪穴住居跡4軒の他、井戸、溝、土坑などの遺構が検出されている（2次調査区と4次調査区はほぼ重複する）。検出遺構は建物の主軸や構造などから4期に区分されており、Ⅰ～Ⅲ期が古代、Ⅳ期が中世に位置づけられている（潮見・入倉・鈴木ほか1985）。Ⅳ期に属する遺構は掘立柱建物4棟（S B 004～007）で、遺跡の南部で検出されており、S B 004とS B 005（第3次調査）、S B 006とS B 007（第4次調査）はそれぞれ近接して構築されている。S B 004検出面で、青磁、瓦器、土師質土器、S B 005に伴っ



第39図 広島湾岸出土の瓦器(2)

(1. 府中町下岡田遺跡 2. 府中町石井城第Ⅱ号貝塚 3～6. 海田町畝観音免第1号古墳)

て青磁、高麗青磁、備前播鉢、土師質土器、古銭などが出土しており、S B 004 内に構築された柱穴状土坑から古銭（宋銭）60 枚が出土している。S B 006・007 では高麗青磁、備前播鉢、土師質土器などが出土している。瓦器は第1次～第4次調査区において18点の破片を確認することができる。破片の内訳は、口縁部5点、底部4点、体部9点で、10点前後の個体数が想定される。S B 004 では瓦器の出土を確認でき、ある程度の出土遺物組成を窺うことができる。その他は古代の遺構埋土やその上層の包含層からの出土で、3次調査区西側の2次調査区や4次調査区F区・G区などの包含層中から出土である。出土瓦器（第39図1）は、小破片で表面が摩滅しているものが多いことから全体像を窺うことは困難であるが、いずれも碗と思われる。口縁部

は丸くおさめており、体部外面は指頭調整痕が顕著である。内面は圏線状のミガキが認められる個体を確認でき、高台は断面三角形を呈するものが多い。器壁は暗灰色、暗青灰色や灰褐色などを呈する。灰褐色を呈するものが多く、それらのうち胎土が褐色を呈するものがかなりある。これらの特徴は和泉型の範疇で理解できる。小破片が主体であるため詳細な時期比定は困難であるが、Ⅲ-2～3期に位置づけられるものと思われる。

④石井城第Ⅱ号遺跡（安芸郡府中町石井城） 下岡田遺跡の南側隣地域で、西南西に延びる低丘陵先端南西裾に標高6.7mの地点に位置する。遺跡は府中大川支流の御衣尾川が形成した扇状地上に立地するものと思われる。1974年の個人住宅浄化槽設置の際に地表下約1.5mの深さから須恵器、土師器、土師質土器とともに瓦器が出土している（田河1977）。瓦器（第39図2）は塀の破片8点を確認した⁽¹²⁾。口縁部は丸くおさめており、体部外面は指頭調整が顕著である。高台は断面三角形を呈するものが確認できる。器壁は暗灰色、灰褐色などを呈する。口径の推定できるものは15cm前後である。和泉型に属すると判断され、Ⅲ-2期に比定される。

⑤石井城貝塚（安芸郡府中町石井城） 下岡田遺跡の南側隣地域で、西南西に延びる低丘陵地先端の標高約9mの南緩斜面に立地する。畑地に露出した貝層などから瓦器、須恵器、土師質土器が採集されている（田河1977）。瓦器は塀4点、皿1点を確認した⁽¹³⁾。内訳は、塀は口縁部1点、体部3点、皿は口縁部1点である。塀は口縁部を丸くおさめており、体部外面は指頭調整による凹凸が顕著である。外面にはミガキは認められず、内面は圏線状のミガキが確認できる。焼成は良好で、器壁は暗青灰色を呈する。いずれも小破片のため法量は不明であるが、和泉型Ⅲ期に比定されるものであろう。この他に石井城貝塚と記載された資料中に瓦器6点を確認した⁽¹⁴⁾。いずれも塀で、口縁部5点、体部1点である。口縁部は丸くおさめており、体部は指頭調整により凹凸がしっかり認められる。内面には圏線状のミガキを施している。外面にはミガキを施さないものが大半であるが、1点だけ顕著なミガキを施している。器壁は、暗青灰色、暗灰色、灰白色を呈し、暗青灰色を呈するものは焼成が良好である。いずれも小破片であり法量を推定することは困難であるが、おおむね和泉型Ⅲ-1期およびⅢ-2～3期に属するものと思われる⁽¹⁵⁾。

⑥水分神社遺跡（安芸郡府中町みくまり3丁目） 御衣尾川最上流に位置し、川に面した標高約100mの山裾に立地する。川からの比高は約5mである。磐座状の大岩の西側に平坦面が作出され、小規模な社殿と拝殿が建立されている。1978年に神社

境内で白磁碗、褐釉四耳壺、東播系須恵器壺・甕、亀山焼甕、瓦器、土師質土器皿・坏などが採集されている（川越 1981）。神社境内において現在も若干の遺物散布を確認することができることから、拝殿や参道などの整備の際に遺跡の一部を削平したものと推定される。瓦器は半分～2/3程度残存する壙2点である。口縁端部を丸くおめており、体部外面は指頭調整が顕著である。内面は圏線状の密なミガキが認められる。見込みにはジクザク状の暗文が観察されるが、ミガキの相互幅が狭く重複や交差している部分や不規則に暗文が絡み合っている部分が認められる。高台は断面方形、三角形を呈する。器壁は暗青灰色、灰白色を呈する。和泉型の範疇で理解できるもので、Ⅲ-1～2期に比定できるものと思われる。

⑦伝石井城周辺古墳（安芸郡府中町）石井城周辺の古墳から出土したと伝えられる瓦器壙1点が報告されている（川越 1981）。報告⁽¹⁶⁾によると、「口縁部上半に強く二段にヨコナデを施し、口縁端部を丸くおさめ、底部には断面台形を呈する台をはりつけている。ミガキは内面のみで、見込みに平行線状、口縁部にレコード圏線状に施している。口径14.5cm、器高4.5cmある。」という形態や調整などの特徴が述べられている。和泉型に比定され、Ⅲ-2期に属するものと推定される。

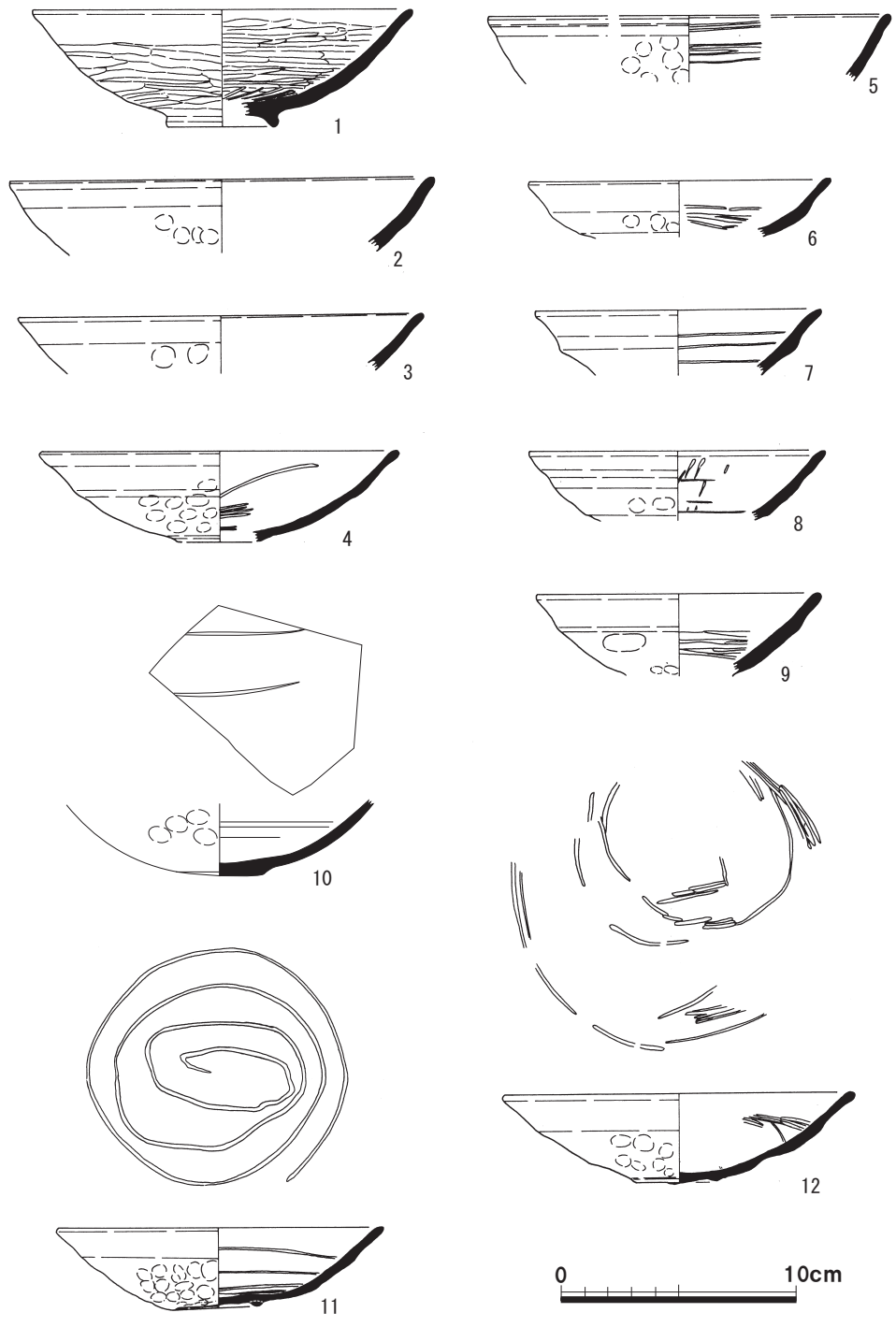
⑧府中町域のその他の遺跡 この他に、府中小学校裏（経免）遺跡、長福寺南門貝塚、山田貝塚で瓦器の出土が報告されている。府中小学校裏（経免）遺跡は下岡田遺跡の700m南に位置し、山田貝塚、長福寺南門貝塚は府中町東南部の位置する貝塚遺跡である。府中小学校裏（経免）遺跡は榎川（御衣尾川）下流域に位置し、標高約3mの沖積地である。須恵器、土師器、瓦器などが採集されているが、榎川の氾濫による再堆積と見られている（田河 1977）。瓦器11点が採集されている。山田貝塚は標高約86mの吹春山から西に延びる低丘陵の西南端部に位置し、標高は約20mである。土師器、土師質土器、瓦器が採集されている（田河 1977）。長福寺南門貝塚は吹春山周辺に広がる低丘陵地帯位置し、西へ伸びる低丘陵に挟まれたの谷頭付近に立地する。瓦器2点が採集されている（田河 1977）。これらの瓦器はいずれも和泉型に属する可能性があるが、詳細は不明である⁽¹⁷⁾。

⑨畝観音免第1号古墳（安芸郡海田町畝）瀬野川下流域に位置し、『海田町史』編纂に伴って1978年に発掘調査された（河瀬編著 1979）。北側の山塊の山裾に立地しており、第1号古墳、第2号古墳が近接して構築されている。中世段階では瀬野川河口からそれほど遠くない場所に位置していたものと想定される。古墳時代後期の横穴式石室玄室中央部の流入堆積土や堆積層に掘り込まれた土坑を中心に、白磁碗、瓦器、

東播系須恵器、土師質土器、鉄鍋など12世紀後半～14世紀を中心とする遺物が出土している。中世に古墳を利用した何らかの祭祀が行われたようである。瓦器(第39図3～6)は321点あり、壙を主体とし、皿が認められる(壙319点、皿2点)。壙の内訳は、完形・類完形15点、口縁部143点、底部32点、体部129点であり、少なくとも30～50点程度の個体数が想定される。畝観音免古墳出土の瓦器壙は破片が大きめで、調整などの観察が可能であるものが多い。器壁は、暗青灰色、灰褐色などを呈し、体部外面は指頭調整が顕著に残る。外面にミガキを施すもの、口縁端部付近にまで指頭調整が残るもの、ヨコナデを二段に亘って行うものなど様々なものが見られた。内面には圏線状のミガキが施され、見込みが分かるものはほとんどが平行線状の暗文である。和泉型と判断され、Ⅲ-1期に比定される口径が16cm近くあり外面にミガキが見られるものから、Ⅲ-3期と思われる口径15cm程度でやや器高が低いものなどがあり、一定の時期幅が認められる。また、口径14cm前後で内面のミガキが粗いものもあり、Ⅳ-1期に下るものも含まれているかもしれない。かなり長期間に亘る祭祀が行われたのであろう。

⑩石原常本貝塚(安芸郡海田町石原) 瀬野川下流域に位置し、畝観音免古墳群の西側山裾に立地する。宅地造成の際に発見され、1981年に小規模な発掘調査が実施されている(河合1986)。貝層などから、白磁碗・四耳壺、龍泉窯系青磁、瓦器、備前焼、瓦質羽釜、土師質土器坏などが出土している。瓦器は7点で、いずれも壙の破片である。内訳は、口縁部2点、底部1点、体部4点である。口縁端部は丸くおさめており、体部外面は指頭調整を行っているが、凹凸の顕著なものと比較的平滑なもの認められる。外面にはミガキは認められない。内面は体部に圏線状のミガキを施しており、ミガキの間隔が比較的密なもの疎らものが認められ、後者が主体である。高台は低く断面方形を呈するものが認められる。いずれも小破片であるため、法量は不明である。和泉型に比定され、Ⅲ-2～3期に属する可能性が高い。

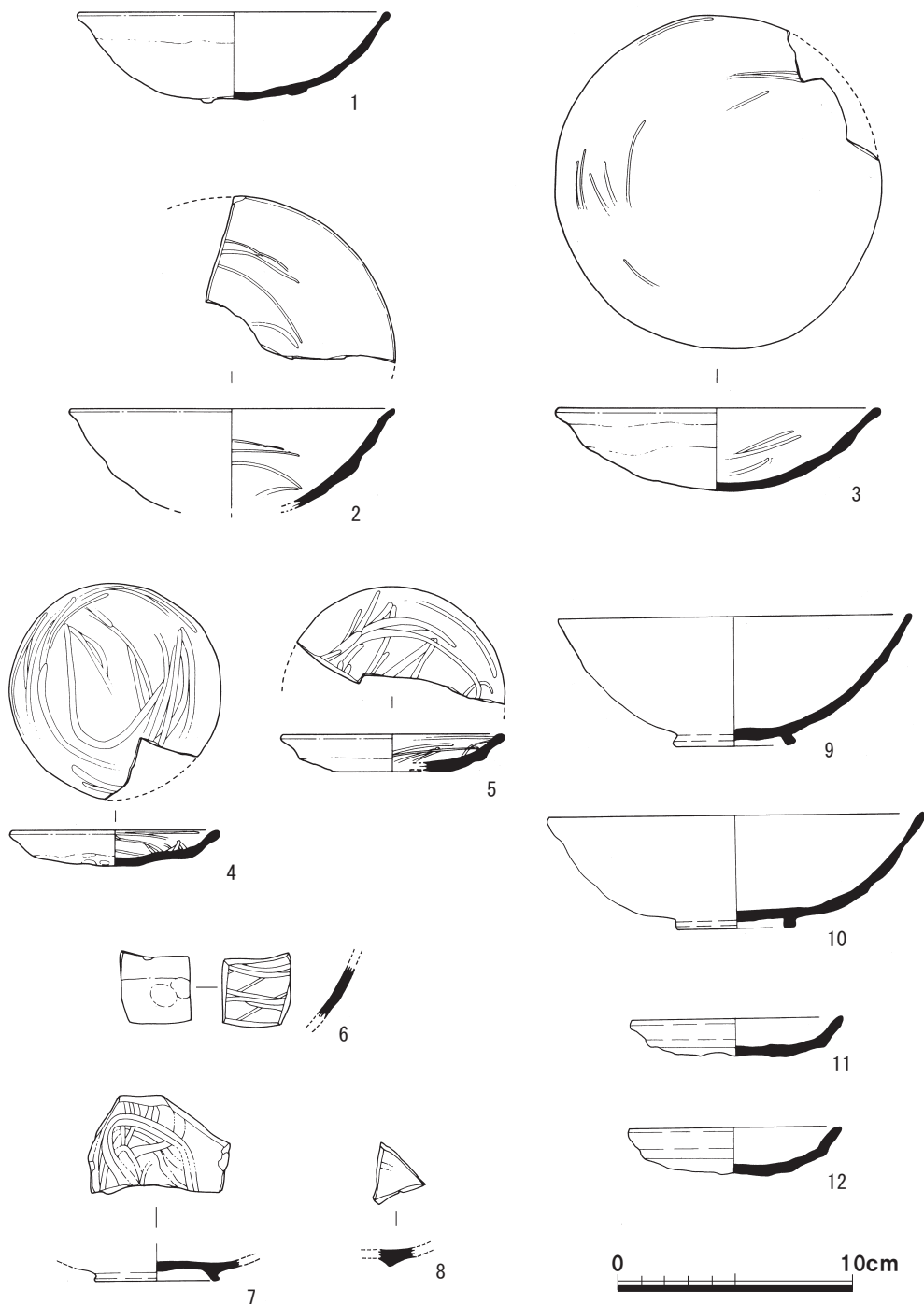
⑪^{したおき}下沖2号遺跡(広島市佐伯区五日市町石内) 太田川下流の中世における拠点的山城である武田山城跡の北側から広島市佐伯区五日市(瀬戸内海岸部)へ抜ける旧山陽道沿いに位置する。南側には標高200m級の山塊が東西に延びており、山塊の北側に形成された標高約30mの扇状地に立地する。道路建設に伴って1992年に発掘調査が行われ、古代、中世の遺構・遺物が多数検出された(高下編1994)。中世の遺構は、掘立柱建物跡4棟(SB09～12)、柱穴群が検出されており、柱穴群周辺および包含層を中心に、輸入陶磁器、東播系須恵器、瓦質土器、瓦器、土師質土器、古銭など



第 40 図 広島湾岸出土の瓦器 (3) (広島市下沖 2 号遺跡)

の中世前期の遺物が出土した。瓦器（第40図）は100点を確認したが、遺構に関わるものとしては、SB10柱穴（P1）出土品（10）のみであり、大半は調査区各所の包含層中から出土したようである。したがって、直接組成を検討できる状況ではないが、白磁碗・皿、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗、瓦器碗・皿、東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕、土師質土器皿などが組成する可能性がある。瓦器は碗を主体とすると思われる。瓦器95点の内訳は、口縁部37点、底部14点、体部44点で、少なくとも20個体程度は存在するものと思われる。いずれも口縁端部を丸くおさめており、体部外面は指頭調整により凹凸が顕著なものが多い。外面にミガキを施すものは基本的に認められない。内面は圏線状のミガキを確認できるものが多いが、ミガキを密に施しているものと間隔が広いものが認められる。暗文は平行線状のものが多く、細い沈線状のミガキで間隔が広い。また、明確な暗文が認められず体部の圏線状ミガキが見込みまで連続するものや暗文が認められないものもあり、これらは体部のミガキの間隔が広い。明らかに無高台のものは認められないが、高台は潰れた断面方形・台形、断面三角形、断面半円形を呈し、高台の仕上げ調整を簡略化したものが多い。法量は、口径15～16cm程度、器高3.5～4cm程度のものと口径14～13cm程度、器高3cm程度のものが認められ、一定の時期幅のものが混在している。和泉型の範疇で捉えられるものであり、法量や暗文などの特徴から、Ⅲ-2期～Ⅳ-1・2期の時期幅が想定される。

⑫池田城跡（広島市佐伯区五日市町五日市） 五日市市街地が広がる八幡川中世平野の北端部に位置する。標高約700mの極楽寺山から南東に延びる標高50mの丘陵先端部に位置し、比高約40mである。北東側には武田山方面から延びる八幡川が形成した谷平野が広がっており、谷平野から五日市市街地に広がる沖積平野の結節部に位置しており、八幡川や旧山陽道を眼下に見下ろす位置にある。区画整理事業に伴い1985年に発掘調査された（奥田・中村編1986）。郭8、堀切3、堅堀1で構成され、第3郭で掘立柱建物3棟、第4郭で掘立柱建物1棟、礎群6基以上、第6郭で掘立柱建物1棟、柱穴群1、溝状遺構1条、配石遺構1基が検出されている。この他に、第2郭で柱穴群、礎群などが検出されている。出土遺物は、第3郭、第6郭を中心に出土しており、備前焼壺・播鉢・甕、瓦器碗・皿、土師質土器杯・皿・鍋などがあるが、多くは中世後半の山城に関連したものと思われる。瓦器は第3郭を中心に4郭で出土しているが、関連遺構は確認されていない。瓦器に伴出する状態で出土している遺物はないが、土師質土器杯、皿の一部が本来組成したものと思われる。瓦器は5点5個



第41図 広島湾岸出土の瓦器(4)

(1～5. 広島市中垣内遺跡 6～8. 廿日市市地御前南町遺跡 9～12. 広島市池田城跡)

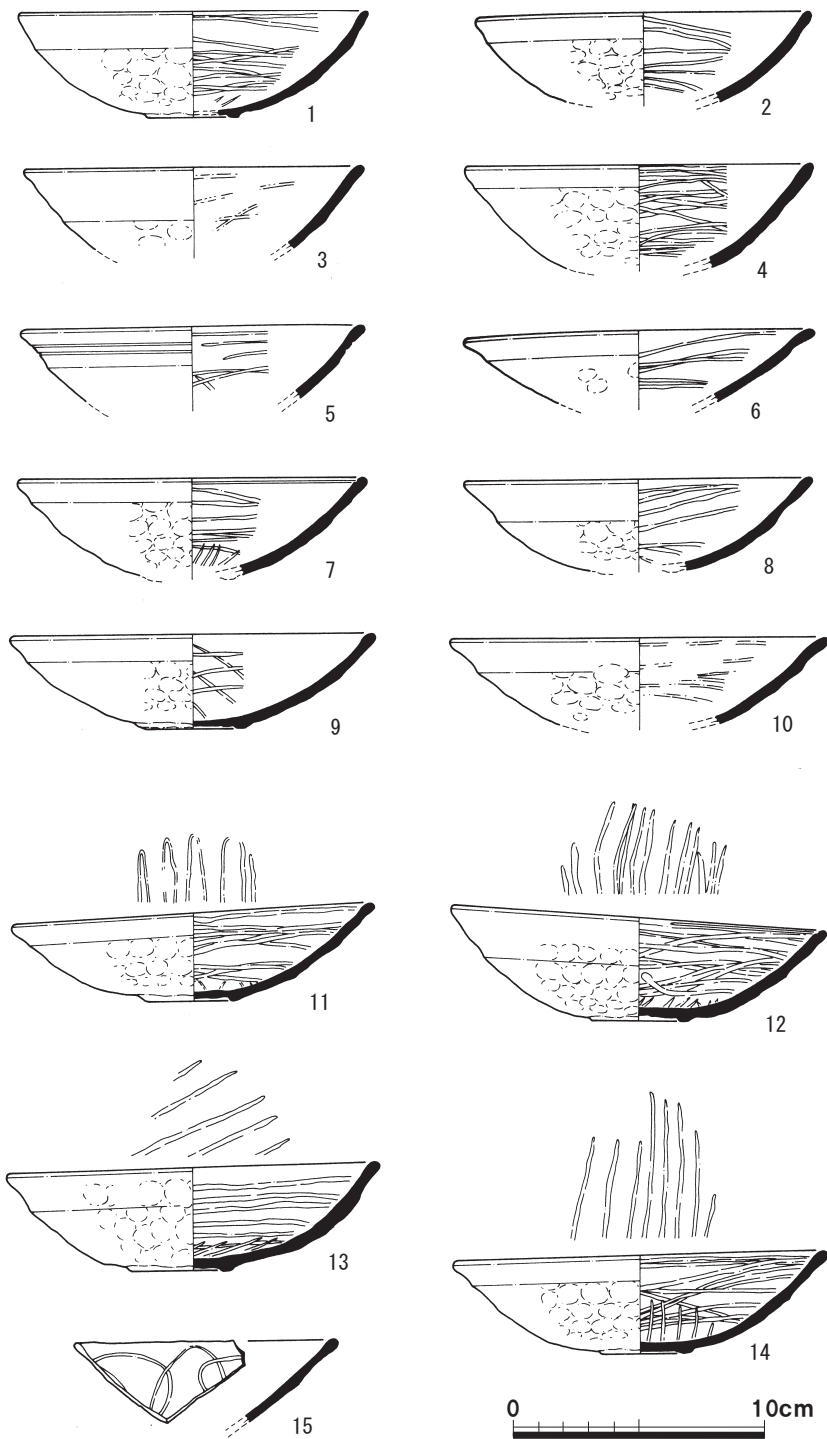
体を確認した。内訳は埴 3 点、皿 2 点である。埴（第 41 図 1～3）は口縁端部を丸くおさめており、体部外面は指頭調整による凹凸が認められるが、顕著なものとは平滑に仕上げているものが認められる。内面には圏線状のミガキが認められるが、細く疎らである。高台が残されているものと無高台のものがあり、前者も痕跡的である。法量 13.0～13.6cm 程度のものがあり、無高台あるいは高台が痕跡的である。皿（第 41 図 4・5）は口縁端部を丸くおさめている。内面はミガキを比較的密に行っているが、規則的な同心円状の調整ではなく、見込み部分の調整と一体化している。器壁は暗青灰色、暗灰色を呈する。和泉型に属するものと思われ、IV-1・2 期に比定される。

⑬^{なかがいち}中垣内遺跡（広島市佐伯区五日市三宅） 標高約 700 m の極楽寺山から南東に延びる標高約 25 m の低丘陵先端部や南東緩斜面に立地しており、五日市市街地の西縁部に位置している。丘陵裾の北～北東側を洗うように坪井川が東～東南流しており、川との比高は約 10 m である。遺跡の保護を前提とした範囲確認調査が 1984 年（五日市町教育委員会 1985）、1985 年（広島市教育委員会 1987）の 2 回行われている。1 次調査では溝状遺構、柱穴など古代の遺構、遺物が出土し、駅館の可能性が高いと推定された。2 次調査では調査区北西部（1 次調査の西端部）で掘立柱建物 3 棟、溝状遺構 2 条、築地溝 1 条など古代の遺構が良好な形で検出された（阿部編 1987）。中世の遺構はまったく検出されなかったが、調査区の南部の T8613、T8614 など青磁、白磁、瓦器、土師質土器坏など中世の遺物が出土している。古代の遺構、遺物は分布せず、谷地形に遺物が流入したものと捉えられている。瓦器（第 41 図 9～12）は、T8611 で埴 1 点（9）、T8614 で埴 1 点（10）、皿 2 点（11・12）が出土しており、この他に 233 点を確認することができる。大半は埴と判断され、皿 3 点を確認している。皿を除く内訳は、口縁部 47 点、底部 25 点、体部 158 点で、最低でも 30 個体以上は存在するものと推定される。埴は口縁端部を丸くおさめ、体部外面は指頭調整による凹凸を顕著に残すものが多い。内面は圏線状のミガキが認められるものが多いが、器面が摩滅しているものも多く、暗文を含めミガキの観察が困難である。現状では無高台の個体は確認できない。高台は断面台形状、三角形などが認められる。法量は口径 15～16cm 程度で、器高は 4～5cm 程度のもので多数を占めるようであるが、口径 13～14cm 程度に復元されるものがある。器壁は暗青灰色、暗灰色などを呈し、胎土が灰褐色を呈するものが一定量認められる。T8611 出土の埴は口径 15.1cm、器高 5.3cm でやや底の深い形態であり、高台も高く断面方形で、やや外開きである。ミガキの状況がやや不鮮明であるが、出土資料中では古い様相を示している。報告の皿はいずれ

も完形で、口縁端部を丸くおさめ、内面は体部に圏線状のミガキを施し、見込みの一部に及んでいる。見込み部は円形のミガキを一筆書き状に連続的に施している。出土瓦器は和泉型の範疇で理解できる。大半の資料はⅢ-2期を主体にⅢ-1~3期に比定されるが、Ⅳ-1・2期の資料を少量含んでいる可能性がある。

⑭地御前南町遺跡（廿日市市廿日市町地御前） 廿日市市街地西縁部に接する小規模な沖積地に立地し、標高は約2.7mで、眼前（約100m東）には瀬戸内海が広がっている。南北及び西側を底丘陵に囲まれた入り江状の地形で、厳島の対岸に位置する。駐車場建設工事に先立って試掘調査が行われ、表土下の埋土層から中世の遺物が近世の遺物などとともに出土し、埋土層の下層から縄文時代中期~晩期の包含層が確認された（河瀬1988）。中世の遺物は、龍泉窯系青磁碗、白磁碗、古瀬戸天目碗、瓦器塚、土師質土器皿などが確認される。瓦器は3点確認され、いずれも塚である（第41図6~8）。底部（7・8）及び底部付近の破片（6）で、7は高台は断面台形状を呈し、高台設置面は狭いながらもしっかりと平坦面を作出している。6は内面に圏線状のミガキを丁寧に行っており、幅1~2mm程度の細いミガキを2~3回重複させながら体部の広い範囲に圏線状に施しているものと思われる。底部の破片は見込み部分に3~4mmの太目のミガキ（暗文）を不規則に施している。焼成は良好で、器壁は暗灰色~暗青灰色を呈する。8は底部は小片で、断面三角形の高台を貼付けている。和泉型と思われ、Ⅲ-1~2期と思われる。

⑮菩提院遺跡（廿日市市宮島町中西町） 標高約530mの弥山に端を発する白糸川が北流して形成した扇状地の南端部（扇央部）付近に位置し、白糸川左岸の標高約15mの河岸段丘上に立地する。旧宮島町立歴史民俗資料館収蔵庫建設に伴って1991年に発掘調査され、中世を中心とする5枚の遺構面が検出された（是光・妹尾編2005）。最下層の第Ⅴ遺構面では4号テラス状遺構（SX4）から土師質土器皿・坏・鍋が出土し、坏の型式から12世紀後半に比定されている。第Ⅳ遺構面では、3号テラス状遺構（SX3）、土坑3基、第Ⅲ遺構面では2号テラス状遺構（SX2）で礎石建物跡1棟、土坑1基、第Ⅱ遺構面では、1号テラス状遺構（SX1）で礎石建物1棟が検出されており、出土遺物から、第Ⅳ遺構面は12世紀末~13世紀前葉、第Ⅲ遺構面が13世紀末~14世紀中葉に、第Ⅱ遺構面が14世紀後半に位置づけている。瓦器は第Ⅳ遺構面で出土しており、原位置を遊離した形で第Ⅰ遺構面からも出土している。第Ⅳ遺構面の出土遺物はSX3から出土したもので、瓦器とともに、東播系須恵器鉢、土師質土器坏・鍋が出土している。瓦器（第42図）は190点を確認した。大半



第 42 図 広島湾岸出土の瓦器 (5) (廿日市市菩提院遺跡)

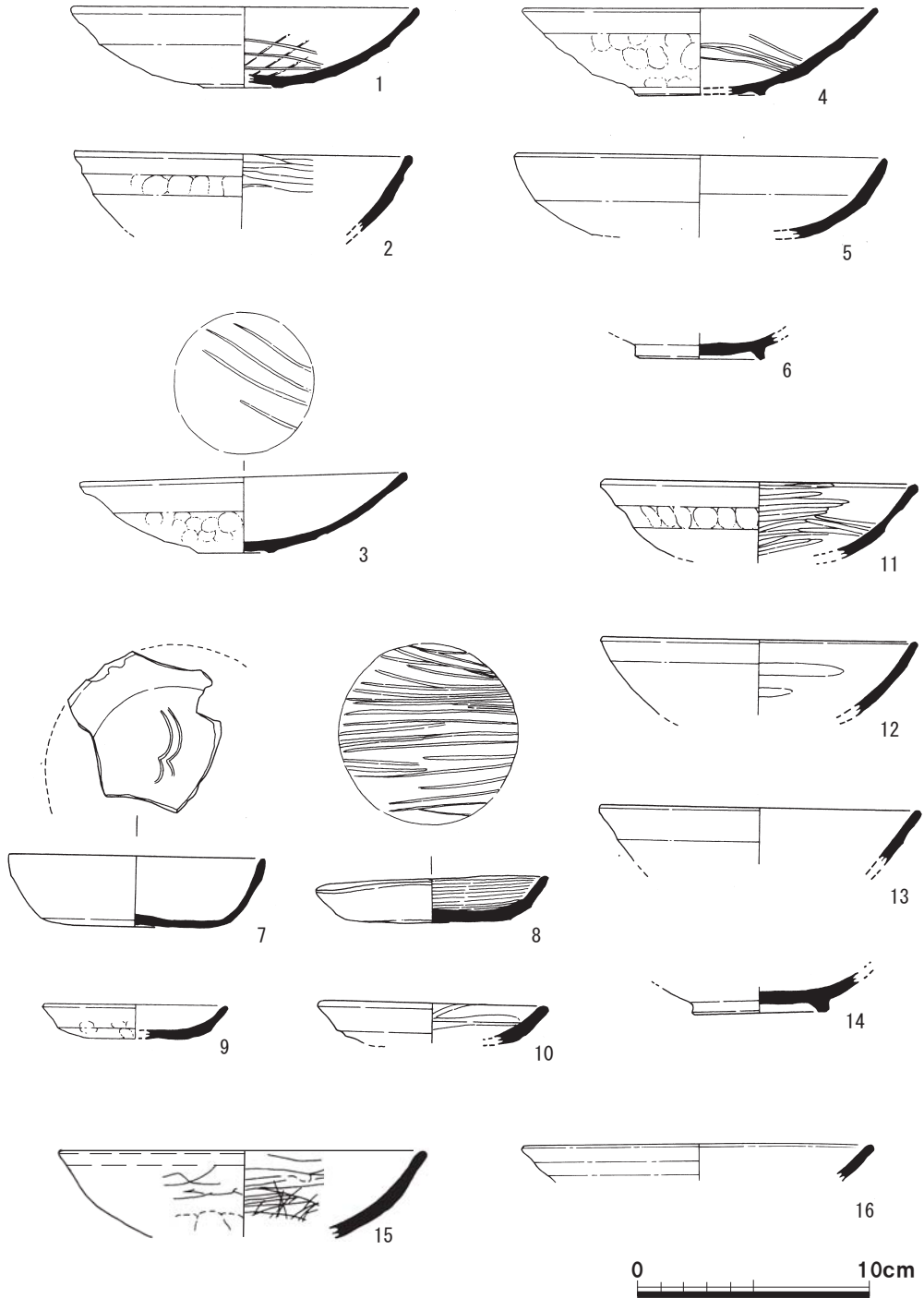
は堦と思われ、内訳は、完形・類完形 6 点の他、口縁部 73 点、底部 15 点、体部 96 点であり、少なくとも 20 点以上の個体が存在したものと想定される。口縁端部を丸くおさめており、体部外面は指頭調整による凹凸が認められ、顕著なものが多い。外面にミガキの認められるものは基本的に認められない。内面には圏線状のミガキが施されており、やや疎らなものもあるが、体部に 10 本前後以上のミガキを施しており、全般的に比較的密である。高台は、断面方形、断面三角形を呈するものが大半であり、高台が極端に潰れたものや調整を大幅に省いたものはほとんどない。また、無高台のものは確認できない。法量は口径 14 ～ 15cm 程度、器高は 3.5 ～ 4cm 程度を主体とする。器壁は暗青灰色、暗灰色を呈するものを主体とし、灰黒色、灰白色を呈するものが認められる。胎土が灰褐色を呈するものが一定量認められる。和泉型の範疇に属すると判断され、主体はⅢ - 2 期にあるものと思われるが、Ⅲ - 3 期の資料が一定量含まれている。また、口径 13cm 程度の口縁部破片が数点確認でき、Ⅳ - 1 期に属する資料も少量に含まれているものと思われる。

Ⅲ. 沼田川下流域および芸北地域

沼田川下流域は旧豊田郡本郷町（現在、三原市）および三原市西部にあたり、竹原市が隣接する。中世には小早川氏が本拠地とした地域であり、高山城跡、新高山跡をはじめ多くの中世遺跡が残されていると推定されるが、考古学的な調査が行われた遺跡は多くない。中世前期の遺跡として三太刀遺跡が挙げられる。芸北地域は毛利氏、吉川氏をはじめとする中世遺跡が多く存在するが、中世前期に属する遺跡の調査は、沼田川下流域同様にほとんど行われておらず、毛利氏が戦国時代に本拠を置いた旧高田郡吉田町（現在、安芸高田市）の郡山大通院谷遺跡を挙げることができる程度である。

①^{みたち}三太刀遺跡（三原市本郷町大字本郷） 本郷町市街地の東側約 1km の沖積地に位置し、沼田川に面した独立丘陵に立地している。独立丘陵（三太刀山）は北側および東西に丘陵尾根があり、南東側が沼田川に向かって大きく開く地形で、コの字形に尾根に囲まれた標高 6 ～ 10 m の平坦地に遺跡は存在する。土地区画整備事業に伴って 2000 ～ 2004 年に 3 次に亘る発掘調査が行われ、古代～近世の遺構・遺物が多数検出されている（梅本編 2003・2004・2005）。尾根に囲まれた平坦地は東西 160 m、南北 120 m の規模で、全域に中世の遺構が広がっているものと推定されるが、発掘調査は平坦地の南部（1 次調査、A ～ D 区）、南西端部（2 次調査、E 区）、北東端部（3 次調査、F・G 区）が部分的に調査された。

中世の遺構は、A ～ D 区を中心に、F・G 区で検出された。A ～ D 区では、掘立



第43図 沼田川下流域・芸北地域出土の瓦器

(1～14. 三原市三太刀遺跡 15・16. 安芸高田市大通院谷遺跡)

柱建物跡 13 棟 (S B 1 ~ 13)、柵列跡 9 基 (S A 1 ~ 9)、溝 14 条 (S D 1 ~ 14)、井戸 1 基 (S E 1)、池状遺構 (S X 1)、土坑 3 基 (S K 2 ~ 4)、鍛冶遺構 1 ヶ所 (S X 2) などが検出され、本遺跡中心部の一部を構成するものと思われる。各遺構の出土遺物は、在地の土師質土器を主体とするが、S B 3、池状遺構などでは白磁碗・皿、同安窯系碗・皿、龍泉窯系青磁碗、瓦器などが出土しており、遺構上の包含層を含めて、中国産陶磁器、東播系須恵器、瓦器、吉備系土師質土器などが多数出土している。出土遺物や遺構の切り合い、建物主軸方向などから少なくとも 3 時期が存在するものと推定されており、出土土器の様相から S B 5 が最も古く、後続して大半の建物跡、井戸などが構築され、遺構の切り合いと出土遺物から S B 13、S K 4 (墳墓) が最も新しく位置づけられている (梅本 2003)。遺跡の中心となる時期は草戸Ⅱ期 (14 世紀前半 ~ 中ば) を中心とした時期で、成立は 13 世紀後半に遡り、最も新しい遺構は 15 世紀前半まで下る可能性を想定されている。遺跡の主体をなす時期に構築された遺構は B 区の井戸・池状遺構を取り巻くように配置されており、ほぼ方位が揃っているが、S B 7 と S B 8・9、S B 7 と S X 1 が切り合っているなど、さらに時期が細分されると考えられる。瓦器 (第 43 図 1 ~ 6・9) は、S B 3 (1)、S B 11 (5)、S X 1 (2)、S D 9 (4)、S D 10 (3) で塚が 1 点ずつ出土した他、B 区の組み合わせ不明の柱穴 P 2 で塚 1 点 (6)、P 8 で皿 1 点 (9) が出土し、包含層中からも多数出土している。瓦器出土遺構の伴出遺物を見ると、S B 3 では、白磁皿、青磁碗、土師質土器杯・皿、S B 12 では土師質土器皿、B 区単独柱 P 2 では、土師質土器杯・皿、吉備系土師質土器塚、S X 1 では、白磁碗・皿、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁合子・碗・皿、青白磁皿、須恵器塚、土師質土器塚・杯・皿など、S D 9 では土師質土器杯・皿、S D 10 では龍泉窯系青磁碗が出土しており、B 地区単独柱 P 8 では瓦器皿が単独出土した。また、未報告であるが、B 地区 S B 5、S D 3、S D 4・5 から瓦器塚が出土しており、S B 5 では、東播系須恵器鉢・甕、吉備系土師質土器塚、土師質土器皿、石鍋が出土している。S D 3 は単独出土、S D 4・5 では土師質土器が出土している。出土瓦器塚はいずれも口縁端部を丸くおさめており、体部外面は指頭調整による凹凸が顕著で、口縁部付近はヨコナデで仕上げているが、S B 5 出土資料の中には外面にミガキを残すものが 1 点認められる。内面は体部に圈線状のミガキが認められ、間隔が広く本数が少ないものと比較的密なものが認められる。暗文は平行線状のものが確認できる。高台は断面逆台形、三角形などを呈し、高さが低く、粘土を貼り付けた後粗いナデを行っただけのものもあるが、無高台の個体はない。法量は口径 14 ~ 15cm、器高 3.5

～4cm程度のものが主体であるが、口径13.5cm程度、器高3.5cm程度のやや小ぶりものがある。和泉型に属するものと思われ、大半の資料はⅢ-2～Ⅲ-3期に比定されるが、一部にⅢ-1期に遡るものを含んでいる可能性がある。

F・G区では古代末～中世前期を中心に中世後期の遺構・遺物が検出された。F地区は斜面地で、性格不明遺構2基(SX1・2)、G地区では上下2段の平坦面が検出され、上段平坦面で土坑3基(SK12・14・15)、下段平坦面で、井戸1基(SE1)、溝状遺構1条(SD1)、土坑2基(SK2・3)などが検出された。各遺構の出土遺物は土師質土器を主体としている。瓦器はF地区SX2で皿1点(第43図8)が出土しており、白磁碗、須恵器碗、黒色土器碗などが伴出している。瓦器皿は口縁端部を丸くおさめ、口縁部内面は圏線状のミガキを上下が接するくらい密に、見込みは平行線状の暗文をやはり密に施している。口径は約10cmで、広く平坦な底部を有している。和泉型に属するもので、Ⅲ-1期以前に比定される可能性がある。なお、G区下段平坦面直上の包含層を中心とした堆積層から、白磁、黒色土器、須恵器、瓦器、土師器、土師質土器など古代末～中世の遺物が多数出土している。

上述のA～D地区、F・G地区検出遺構の他、遺構直上の包含層などからも瓦器(第43図7・10～14)が多数出土しており、碗84点、皿5点、坏2点(7)の瓦器を確認することができる。碗は遺構検出の個体と同様の特徴を示し、おおむね和泉型に属するものと思われる。しかし、平底の底部で、高台を有さず、口径は約10cmと小型で、内面の見込みに花卉状の暗文を施す例(7)があり、楠葉型に属する可能性のある資料が1点確認できる。これを除くと、個体により粗密はあるが、体部内面に圏線状のミガキを施していること、体部外面にミガキを行う個体や基本的に無高台の個体は認められないこと、明らかに口径13cm以下の個体を認めることはできないことなどから、和泉型Ⅲ-2・3期を中心にⅣ-1・2期を含んでいる可能性が高い。

②郡山大通院谷遺跡(安芸高田市吉田町大字吉田) 毛利氏の居城郡山城跡が位置する郡山南側山麓部に形成された谷部に立地している。砂防工事に伴って1996～1999年に東地点の発掘調査、キャンプ場営火場代替地造成工事に伴って2000～2002年に西地点の発掘調査が実施されている(新川ほか2002・2003a・2003b)。東地点は古代1遺構面4期、中世3遺構面7期の遺構が識別されている(新川2002・2003a)。古代は7世紀後半～9世紀初頭、中世は15世紀前半～16世紀末に位置づけられている。古代においては郡衙などの官衙施設に関連した地域、中世後期は一般集落や毛利氏家臣団に関連した屋敷地として利用されていたと推定される。中世前期に

おける具体的な利用状況は不明である。中世前期にあたる12世紀～14世紀の遺物として、白磁碗、同安窯系青磁碗、皿、龍泉窯系青磁碗、瓦器、東播系須恵器鉢などが調査区西部を中心に出土しているようであるが、関連遺構は検出されていない。瓦器は22点報告されている。西地点では弥生時代～中世の遺構・遺物が検出され、弥生後期、古墳時代初頭、古代、中世の大きく4時期の遺構が確認されている。中世では建物跡、溝などが多数検出され、5遺構面が識別されたが、東地点同様、中世後期（16世紀）に位置づけられるものである。中世前期の遺物として、白磁碗、青磁碗、瓦器などが出土しているが、関連遺構は検出されておらず、出土状況も不明である。瓦器は18点報告されているが、出土の状況や伴出遺物は記載されていない。

出土瓦器は碗（第43図15・16）を主体とし、皿3点を確認している。碗は口縁端部を丸くおさめ、体部外面には指頭調整による凹凸が認められる。内面は体部に圏線状のミガキを密に施し、見込みには平行線状などの暗文が認められる。体部外面はおおむね口縁部がヨコナデ、体部がナデで仕上げているが、横方向のミガキを施している個体（15）が認められる。器壁は暗青灰色、暗灰色を呈するものが多く、灰色を呈するものが若干ある。前者は器壁が厚く、後者は器壁が薄い。和泉型に属するもので、Ⅲ-1期およびⅢ-2期に位置づけられるものと思われる⁽¹⁸⁾。

3) 安芸地方における出土瓦器の年代

前節で安芸地方における瓦器出土遺跡と出土瓦器の内容について概観したが、地域ごとに出土瓦器の年代と利用期間についてまとめておきたい。

出土瓦器は、これまで指摘されている（川越1981、橋本2009など）ように、形態的特徴や調整などから見て、おおむね和泉型に属するもので、わずかではあるが、楠葉型に属するものが認められた。出土点数は遺跡によりかなりの相違があるが、破片を中心としていることから、多数出土遺跡においても詳細な時期を検討することは困難な状況である。こうした現状ではあるが、西条盆地、広島湾岸地域を中心に、まずは和泉型瓦器碗の時期について整理してみる。西条盆地では、鏡西谷遺跡、道照遺跡、大地面遺跡、鷺田遺跡の4遺跡で多数の瓦器が出土している他は、きわめて出土数が少なく、1～数点の個体数である。多数出土遺跡の様相を検討してみると、鏡西谷遺跡ではC地区SB01に出土数の大半が集中し、E地区などで一定量が出土している。SB01出土瓦器はⅢ-2期に収斂しており、その他の地区についても、Ⅲ-3期に下る資料が含まれている可能性を残すものの、基本的にはⅢ-2期に属すると見ることができる。道照遺跡はⅢ-3期の資料を含んでいる可能性はあるものの、ある程度

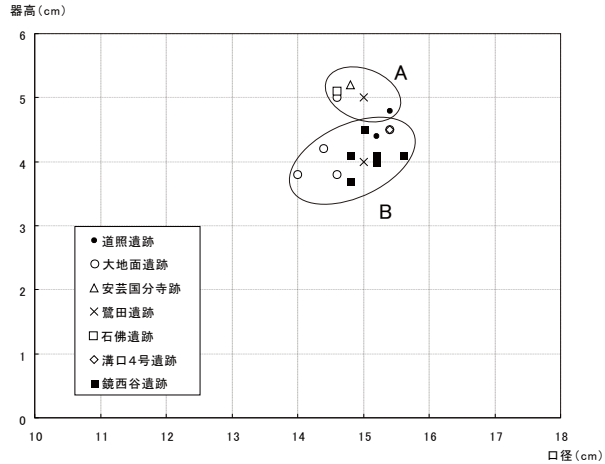
の大きさ以上のものはいずれもⅢ－２期と判断され、明らかにⅣ期に下る資料は確認できない。大地面遺跡ではⅢ－２期を主体として、Ⅲ－１～３期の資料が認められる。Ⅳ－１期に下る資料が含まれている可能性はあるが、現状では確認できない。鷺田遺跡は確認できる範囲ではいずれもⅢ－２期に位置づけられる。多数出土遺跡のうち、大地面遺跡では複数時期の瓦器が確認でき、道照遺跡においても複数時期に亘る使用が行われている可能性がある。その他の遺跡はいずれもⅢ期に位置づけられるものである。安芸国分寺跡ではⅢ－１～３期に、安芸国分尼寺伝承地遺跡はⅢ－２期、石佛遺跡はⅢ－１～２期、山中池南遺跡第２地点、溝口４号遺跡はⅢ－２期、小谷黄幡遺跡、下上戸遺跡、南太刀掛遺跡は詳細な時期は不明であるが、Ⅲ－２～３期に位置づけられるものと思われる。

以上をまとめてみると、西条盆地ではⅢ期の瓦器を確認することができ、Ⅳ－１期まで使用されていたと推定される。Ⅲ－１期では、少量ながら、大地面遺跡、安芸国分寺跡などでこの時期に位置づけられる資料があるが、出土点数はわずかである。Ⅲ－２期になると、出土遺跡、量ともに大幅に増加するが、Ⅲ－３期には限られた出土遺跡を除くとほとんど認められず、量的にも大きく減少する。Ⅳ－１期にも使用されていると思われるが、使用遺跡、量ともかなり限定的と推定される。

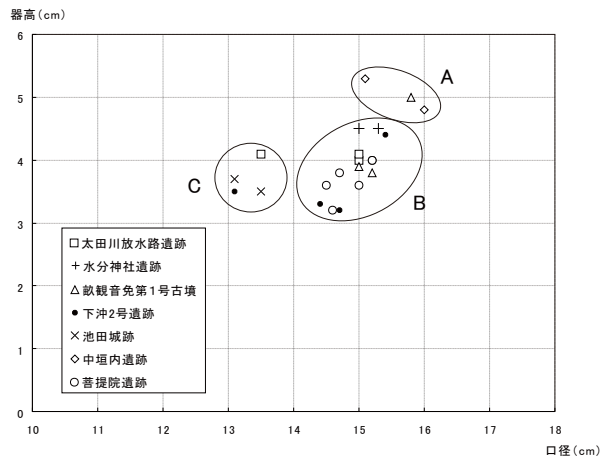
法量の面から上述の様相を補足してみる⁽¹⁹⁾(第44図)。口径14.0～15.6cm、器高3.7～4.5cmの範囲(分布域B)に大半の資料がおさまり、口径14.5～15.4cm、器高4.8～5.2cmに小さなまとまり(分布域A)を認めることができる。分布域Bは和泉型瓦器Ⅲ－２～３期に該当する法量であり、調整等も加味すると、鏡西谷遺跡を中心とする口径14.8～15.6cm、器高3.7～4.5cm付近の個体はⅢ－２期に、大地面遺跡を中心とする口径14.0～14.6cm、器高3.8～4.2cm付近の個体はⅢ－３期に属するものと思われる。分布域Aは、口径がやや小さいものの、器高が深く、体部内面の圏線状ミガキが密であることなどからおおむねⅢ－１期に属するものと思われる。法量を検討できる資料が非常に少ないため、破片を含めた様相を全て反映しているわけではないが、西条盆地の瓦器塚の利用時期について大まかな傾向を窺うことができよう。

広島湾岸地域では、畝観音免第１号古墳、下沖２号遺跡、中垣内遺跡、菩提院遺跡で多数の瓦器が出土しており、太田川放水路遺跡、下岡田遺跡で10個体以上の出土が認められる他は、きわめて出土量が少なく、1～数個体である。多数出土遺跡の様相を検討してみると、畝観音免第１号古墳ではⅢ－２期を主体にⅢ－１～３期の資料

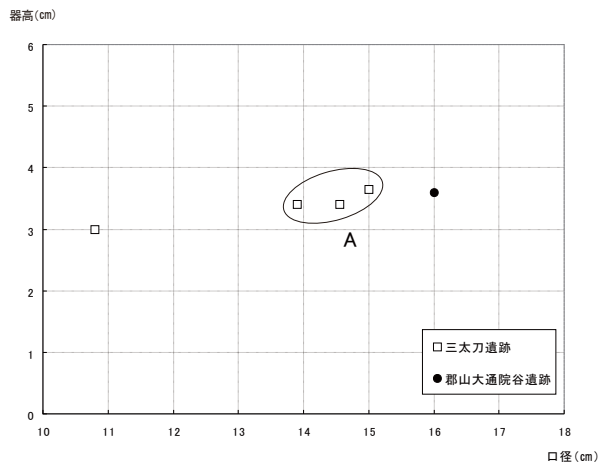
が認められる。下沖2号遺跡ではⅢ-2~3期を中心にⅣ-1・2期まで使用されている。中垣内遺跡はⅢ-2~3期を主体にⅢ-1~3期の資料が認められる。菩提院遺跡はⅢ-2期を主体とし、Ⅲ-3期、Ⅳ-1期を含んでいる。これら多数出土遺跡では少なくとも30~50個体以上の瓦器塚が使用されているものと思われ、Ⅲ-2期を主体に複数時期に亘る瓦器の供給が行われている。やや出土数の多い太田川放水路遺跡、下岡田遺跡でも複数時期の瓦器塚を確認することができる。前者ではⅢ-2期を主体にⅢ-1~3期の複数時期に亘って使用されている。後者はⅢ-2~3期に位置づけられるもので、Ⅲ-2期を主体に2時期の資料が存在する可能性がある。石井城貝塚は出土点数が少ないものの、Ⅲ-1期、Ⅲ-2~3期の資料が認められ、複数時期に亘って形成された貝塚である。この他の遺跡はおおむねⅢ期に属し、Ⅲ-2期を主体とするが、池田城跡はⅣ期を主体としている。水分神社遺跡がⅢ-1



第44図 西条盆地の瓦器塚法量図



第45図 広島湾岸の瓦器塚法量図



第46図 沼田川下流域・芸北地域の瓦器塚法量図

～2期に位置づけられ、やや古い様相を示しているが、比治山第2貝塚、石井城第II号遺跡、伝石井城周辺古墳はⅢ-2期に、石原常本貝塚はⅢ-2～3期に位置づけられる。府中小学校裏（経免）遺跡、長福寺南門貝塚、山田貝塚は詳細不明である。池田城跡はⅣ-1期、Ⅳ-2期に位置づけられる瓦器塚、皿で構成されている。

以上をまとめてみると、広島湾岸ではⅢ期以降の瓦器を確認することができ、Ⅳ-2期まで使用されている。Ⅲ-1期には、少量ながら、太田川放水路遺跡、中垣内遺跡、畝観音免第1号古墳など複数の遺跡で使用され始め、Ⅲ-2期では出土遺跡、量ともに大幅に増加する。しかし、Ⅲ-3期に急激に減少に転じ、Ⅳ-1・2期には限られた遺跡でしか確認ができず、Ⅳ-3期以降は使用が確認できない。西条盆地同様に、多数出土遺跡を点々と認めることができるが、いずれも複数時期の使用が確認でき、比較的長期間に亘って利用されている。太田川放水路遺跡や石井城貝塚など出土点数があまり多くない遺跡でも複数時期の使用を認めることができる。遺跡によって瓦器の使用時期幅に前後があるが、地域全体としてみれば、Ⅲ-2期を中心としてⅢ-1期～Ⅳ期-1期まで比較的安定した供給が行われていた様相を窺うことができる。

法量の面から上述の様相を補足してみる（第45図）。法量分布は大きく3つに区分できる。大半の資料が分布する口径14.4～15.4cm、器高3.2～4.5cmの範囲（分布域B）、資料的には少ない口径15.1～16.0cm、器高4.8～5.3cmの範囲（分布域A）と口径13.1～13.5cm、器高3.5～4.0cmの範囲（分布域C）である。分布域Aは分布域Bより相対的に口径が大きく器高が高い（底が深い）形態で、分布域Cは分布域Bより口径が大幅に縮小している。分布域Bは和泉型Ⅲ-2～3期に該当する法量であり、水分神社遺跡、太田川放水路遺跡および菩提院遺跡の一部などの口径15.0～15.4cm、器高3.8～4.5cm分布域と下沖2号遺跡の一部、菩提院遺跡の一部の口径14.4～14.8cm、器高3.2～3.8cmの大小のグループに区分され、調整、暗文などから見て、前者はⅢ-2期、後者はⅢ-3期にはほぼ該当するものと思われる（ただし、口径15cm前後を有する個体のうち、器高3.5cm前後の深さの浅い個体の中にも内面のミガキを密に施すものがあり、Ⅲ-2期に位置づけられる資料の中に器高の低い一群が存在するようである）。また、分布域Aは和泉型Ⅲ-1期の法量に、分布域Cは和泉型Ⅳ-1期およびⅣ-2期の一部の法量に該当する。分布域Aの資料はいずれも器面の摩滅が著しく、調整を詳細に観察することができないが、器形等から見てこの時期に位置づけることができる。西条盆地と同様に、Ⅲ-1期からⅣ-1・2期に向かって順次変化している様相を窺うことができる。

沼田川下流域の三太刀遺跡、芸北地域の郡山大通院谷遺跡でも相当数の瓦器が出土しており、三太刀遺跡では少なくとも30～50個体以上、郡山大通院谷遺跡では少なくとも15個体以上は使用されていたものと想定される。三太刀遺跡ではⅢ-2・3期を中心にⅢ-2～Ⅳ-2期の複数期間に亘って瓦器が供給されたことがわかる。郡山大通院谷遺跡はⅢ-2期を主体としていると思われるが、詳細は不明である。

これまで見てきたように、安芸地方における瓦器の利用は、現状の資料に基づけば、和泉型Ⅲ期以降であり、Ⅲ-1期から広島湾岸のみならず内陸の西条盆地でも利用が開始されている。Ⅲ-1期段階では出土遺跡、量とも少なく、Ⅲ-2期に遺跡および出土量の大幅な増加が認められ、利用期間の中でピークを迎えることは、西条盆地、広島湾岸とも共通した様相を示しており、基本的には沼田川下流域の三太刀遺跡や芸北地域の郡山大通院谷遺跡でも同様であろう。しかし、その後の展開は地域ごとで相違が認められるようである。Ⅲ-3期には西条盆地、広島湾岸とも遺跡数、出土量とも大きく減少しているが、西条盆地では大地面遺跡など多数出土遺跡を除くと、Ⅲ-3期の瓦器を出土する遺跡が認められない。特に1～数点の出土遺跡の中に確実にⅢ-3期に比定できる資料が見当たらない。これに対して、広島湾岸では、下沖2号遺跡、中垣内遺跡、畝観音免第1号古墳など複数の遺跡で出土しており、遺跡数や量は減少するものの、ほぼ全域で利用されている。さらに、広島湾岸ではⅣ-1・2期にも瓦器塚の利用が認められ、池田城跡ではⅣ期に入って利用が開始されている。沼田川下流域の三太刀遺跡でもⅢ-3期以降の利用が認められ、Ⅳ-2期まで少量ながら使用されている。内陸部にあたる芸北地域の郡山大通院谷遺跡では詳細は不明であるが、瓦器の使用はⅢ期で終焉を迎えている可能性が高い。このように、沿岸部と内陸部では瓦器の搬入・利用状況に差異が認められるようであり、瓦器の流通品としての性格の変容と関連があるのではなかろうか。

4) 瓦器出土遺跡における伴出遺物の様相

安芸地方における中世前期の遺跡の様相解明は今後の調査の進展に俟つ部分が多く、現状では流通の結節点となる沿岸部の都市的な遺跡や内陸部の官衙的な遺跡やその周辺遺跡などが中心で、量の多寡を別にすれば、調査が実施された多くの遺跡から瓦器が出土している。次節で出土遺跡の性格や地域的な特徴を考える前提の一つとして、各遺跡における共伴遺物の検討をしておきたい。

西条盆地では、遺構内から瓦器が出土した遺跡について概観すると、本来の年代あるいは近接する年代を示す遺構から出土した例と複数時期の遺物が混在し瓦器が遺構

第3表 西条盆地の瓦器出土遺構および包含層における瓦器と共伴遺物一覧

	遺 跡 名		和 泉 型 瓦 器								楠 葉 型	伴 出 遺 物 等							
			器 種		型 式							白 磁	青 磁	舶 載	東 播 系	亀 山	吉 備 系	土 師 質	そ の 他
			埴	皿	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅳ 1	Ⅳ 2										
1	鏡 西 谷 遺 跡	B地区東部	包含層	△								△							
		B地区西部	S X 01 周辺	△	△							△						○	
		C地区	S B 01	◎	◎							◎		◎	◎			◎	石鍋
		C地区北西部	包含層	△								△						?	
		D地区	包含層	△															
		E地区	包含層	◎	△							△	◎		○			◎	
		F地区	S S 02	△														△	
2	山中池南遺跡第2地点	包含層	△														△		
3	道 照 遺 跡	広島県調査区	S B 10	△							△	△			△		○		
			S E 1	△															
			S E 4	△														△	
			S E 6	△															
		包含層	◎	○							◎	◎	△	○	○		◎		
		東広島市調査区	S D 002	△								△			△			◎	
S D 003	△									△						◎	石鍋		
S K 006	△	△													○				
4	西中郷遺跡	溝状遺構		△															
5	安芸国分寺跡	自然流路	△																
		近代遺構	△	△															
		包含層	?	?							△	△							
6	大地面遺跡	S X 5	△	△															
		包含層	◎	△							◎	○		△		◎			
7	安芸国分尼寺伝承地遺跡	包含層	△								○	○				○			
8	鷺田遺跡	S B 10	△														△		
		包含層など	△	△							◎	○		△	○	◎			
9	石佛遺跡	窯跡	△													○			
10	下上戸遺跡	S D 15	△								△	△				?			
11	南太刀掛遺跡	包含層	△																
		S D 1001	○											△	△		△		
12	溝口4号遺跡	包含層	△								+	+		+	+				
		S D 5	△								?								

※和泉型瓦器の欄の濃い灰色は存在が確実なもの、薄い灰色は存在する可能性があるものを示す。

※△・○・◎は出土量を示し、△は1～5点、○は6～10点、◎=11点以上である。

※伴出土器等は遺構の一括遺物の他に瓦器と共伴する可能性のある遺物を示している。

※白磁は中国産白磁、青磁は中国産青磁、舶載は中国産白磁・青磁以外の輸入陶磁器を示す。

※吉備系は吉備系土師質土器、土師質は土師質土器を示す。

※伴出土器等欄の+は存在するが出土点数が不明であるもの、?は存在する可能性があるものを示す。

の年代を示さない例の二者があることがわかる。前者は、鏡西谷遺跡、道照遺跡、大地面遺跡、鷺田遺跡、石佛遺跡、後者は、西中郷遺跡、下上戸遺跡、溝口4号遺跡、小谷黄幡遺跡が該当する。瓦器との共伴関係を直接検討できる遺跡はきわめて少ないのが現状である。鏡西谷遺跡についてはすでに詳細に検討しているため、省略するが、C地区S B 01において良好な一括資料が得られている。道照遺跡では、建物跡（S B 10）、井戸（S E 04・06）、溝（S D 002・003）、土坑（S K 006）から瓦器が出土しており、白磁碗、東播系須恵器?、亀山焼甕、土師質土器坏・皿、石鍋などの伴出

を確認できる。白磁はⅣ～Ⅵ類（横田・森田 1978 の分類、白磁・青磁の分類は以下同様）であり、11 世紀後半～12 世紀後半に位置づけられる。亀山焼は小片であり、詳細な時期は特定できない。石鍋はⅢ類 - a - 2（木戸 1995 の分類、以下同様）で、12 世紀後半を中心とする時期に位置づけられている。土師質土器は、瓦器よりやや新しい時期の様相を示すものが含まれているものの、鏡西谷遺跡の状況から見て瓦器の年代と大きな齟齬はないように思われる。また、直接的な共伴を確認できないが、瓦器出土遺構とほぼ同時期あるいは近接した年代と推定される S B 18、S B 31、S X 27 からは白磁碗、同安窯系青磁皿、龍泉窯系碗Ⅰ類が出土している。これらの輸入磁器は 12 世紀後半～13 世紀前半に位置づけられる。遺構出土の瓦器はおおむね和泉型Ⅲ - 2 期に位置づけられ、輸入磁器の使用年代幅におさまっており、遺構出土の瓦器は、白磁碗Ⅳ～Ⅵ類、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、土師質土器坏・皿などが組成され、東播系須恵器、亀山焼も組成に加わるものと想定される。広島県調査区の包含層では和泉型Ⅲ期全般にわたる瓦器が出土している。東広島市調査区ではⅢ - 1 期の瓦器は確認できないものの、白磁を主体とした組成を構成する可能性がある。包含層中の遺物については厳密な検討はできないものの、上述の白磁、青磁の他、龍泉窯青磁Ⅰ - 5 類、森田編年Ⅲ期第 1・2 段階（森田 1995 編年、以下同様）の東播系須恵器鉢、亀山遺跡第 2 段階～第 4 段階（岡田 1988、以下同様）の亀山焼甕などが出土しており、量的には少ないが、Ⅲ - 3 期の瓦器と組成をなすものと想定され、Ⅳ - 1 期もほぼ同様の組成の可能性がある。

大地面遺跡、鷺田遺跡、石佛遺跡のうち、大地面遺跡 S X 5 は須恵器碗・坏、土師質土器皿・鍋、鷺田遺跡 S B 10 では土師質土器皿、石佛遺跡窯跡では土師質土器坏・皿が伴出している。大地面遺跡 S X 5 の須恵器は東広島市小越窯跡（青山 1983）、且原窯跡（伊藤 1983）出土資料に類似するもので、11 世紀後半～12 世紀に位置づけられており、瓦器は和泉型Ⅲ - 2 期であることから一部年代的な重複が想定できるものの、基本的には共伴関係にはないと思われ、土師質土器は瓦器よりも時期が下のものと思われる。包含層中から白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、白磁皿、同安窯系青磁碗、Ⅱ期第 2 段階の東播系須恵器鉢、第 2 段階～第 3 段階の亀山焼甕などが出土している。包含層出土の瓦器は和泉型Ⅲ - 1～3 期の資料が認められ、Ⅲ - 1 期の瓦器は白磁碗・皿、同安窯系青磁碗、須恵器碗など、Ⅲ - 2～3 期の瓦器は、白磁碗、同安窯系青磁碗、東播系須恵器鉢、亀山焼甕、土師質土器坏などが組成するものと想定される。鷺田遺跡では瓦器の単独出土に近い状態であるが、遺構周辺や包含層から白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、

同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類・Ⅰ－５類、東播系須恵器第Ⅱ期第２段階～第Ⅲ期第１段階鉢、亀山焼甕、土師質土器坏などが出土している。包含層を含めると、瓦器は和泉型Ⅲ期全般の資料が認められ、Ⅲ－１期では白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、土師質土器、Ⅲ－２期ではそれに加えて東播系須恵器鉢、亀山焼甕、Ⅲ－３期坏では龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類、東播系須恵器鉢、亀山焼甕、土師質土器坏が組成したと想定される。石佛遺跡では土師質土器坏・皿以外に共伴する可能性のある遺物はない。また、詳細な検討はできないが、安芸国分尼寺伝承地遺跡では、白磁碗、青磁碗などが瓦器に組成する可能性がある。

西中郷遺跡、安芸国分寺跡、下上戸遺跡、溝口４号遺跡、小谷黄幡遺跡は溝や自然流路からの出土であり、いずれも瓦器の年代に合致した遺構ではなく、同時期と想定できる資料もほとんど出土していない。下上戸遺跡では白磁碗、青磁碗など、溝口４号遺跡では東播系須恵器鉢、亀山焼甕などを組成する可能性があるが、瓦器を含めて量的にはわずかである。

以上、西条盆地の状況を概観したが、組成を比較すると３類型にまとめることができる。第１は白磁、青磁などの輸入陶磁器を組成に含むもの（鏡西谷遺跡、道照遺跡、大地面遺跡など）、第２は輸入陶磁器類を基本的に組成せず土師質土器を主体に組成するもの（石佛遺跡）、第３は瓦器が単独出土に近いもの（安芸国分寺跡、南太刀掛遺跡、小谷黄幡遺跡など）である。瓦器多数出土遺跡は第１類型に分類され、第２、第３類型では瓦器の出土量はきわめて少ない。ただし、第３類型は本来瓦器が使用された場所ではない可能性が高いため分類としては適当ではなく、基本的には第１、第２の大きく２類型に区分できると言えるであろう。

次に、広島湾岸の様相について検討する。広島湾岸では遺構に伴う瓦器の出土例の報告は非常に少なく、畝観音免第１号古墳、下沖２号遺跡、菩提院遺跡、下岡田遺跡、池田城跡を挙げることに過ぎない。畝観音免第１号古墳では開口した横穴式石室を利用して祭祀が行われており、石室埋積土上部や埋積土中に掘り込まれた土坑から瓦器とともに、白磁碗、土師質土器坏・皿などが出土している。瓦器はⅢ－２期を中心にⅢ－１～３期まで使用されており、Ⅳ－１期に下ると思われる資料も認められる。長期に亘って祭祀が行われたことが窺え、出土状態の詳細な検討を行うことができないため、厳密に共伴遺物を抽出することは困難であるが、出土した中世遺物は基本的に共伴遺物と捉えて大過ないであろう。白磁はⅣ類で、１２世紀～１３世紀初頭に位置づけられる。東播系須恵器鉢は第Ⅱ期第２段階に属するもので、１２世紀末～

第4表 広島湾岸の瓦器出土遺構および包含層における瓦器と共伴遺物一覧

	遺跡名	出土遺構等	和泉型瓦器						楠葉型	伴出遺物等							
			器種		型式					白磁	青磁	舶載	東播系	亀山	吉備系	土師質	その他
			埴	皿	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ-1									
14	太田川放水路遺跡	包含層	◎							△	△		○	△		◎	
15	比治山第2貝塚	包含層	△								△						
16	下岡田遺跡	S B 004	△								△					○	
		包含層など	◎							△	△		○	○		○	
17	石井城第Ⅱ号遺跡	包含層	△														
18	石井城貝塚	包含層	○														
19	水分神社遺跡	包含層	△							△		△	◎	△		◎	
20	伝石井城周辺古墳	不明	△													△	
21	府中小学校裏(経免)遺跡	包含層	△														
22	長福寺南門貝塚	包含層	△														
23	山田貝塚	包含層	△													△	
24	畝観音免第1号古墳	土坑・包含層	◎	△						△		△		△		◎	
25	石原常本貝塚	包含層	△							△	△		?	?			
26	下沖2号遺跡	S B 10	△														△
		包含層	◎							◎	◎		◎	○		◎	
27	池田城跡	3郭	△	△						△		△				◎	
		4郭	△														
28	中垣内遺跡	包含層	◎	△						+	+		?	?		◎	
29	地御前南町遺跡	包含層	△													△	○
30	菩提院遺跡	遺構面	◎	△												△	

※和泉型瓦器の欄の濃い灰色は存在が確実なもの、薄い灰色は存在する可能性があるものを示す。
 ※△・○・◎は出土量を示し、△は1～5点、○は6～10点、◎=11点以上である。
 ※伴出土器等は遺構の一括遺物の他に瓦器と共伴する可能性のある遺物を示している。
 ※白磁は中国産白磁、青磁は中国産青磁、舶載は中国産白磁・青磁以外の輸入陶磁器を示す。
 ※吉備系は吉備系土師質土器、土師質は土師質土器を示す。
 ※伴出土器等欄の+は存在するが出土点数が不明であるもの、?は存在する可能性があるものを示す。

13世紀初頭に位置づけられている。土師質土器坏は鏡西谷遺跡C地区S B 01や同遺跡D地区S K 06出土資料に類似し、12世紀後半～13世紀前半を中心とするものと思われる。土師質土器には吉備系の埴が認められ、草戸Ⅰ期後半～Ⅱ期前半の幅がある。Ⅲ-1期の瓦器には白磁、土師質土器坏、Ⅲ-2期の瓦器には、白磁、東播系須恵器、土師質土器坏、Ⅲ-3～Ⅳ-1期の瓦器には土師質土器坏、吉備系土師質土器坏が組成すると想定される。この他に土師質土器鍋・釜が出土しており、祭祀に際して利用・廃棄されたものと思われる、組成に加えることができる。下沖2号遺跡ではS B 10で瓦器が出土し、土師質土器皿が伴出している他は、包含層出土である。出土状態から組成を検討できないが、包含層中からは、白磁碗・皿、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗、瓦器埴・皿、東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕、土師質土器坏・皿などが出土している。瓦器はⅢ-2期～Ⅳ-1・2期の時期幅が認められるが、上述の白磁、青磁などの輸入磁器、東播系須恵器、亀山焼などが組成されるものと思われる。菩提

院遺跡では第Ⅳ遺構面のテラス面から瓦器とともに東播系須恵器鉢、土師質土器坏・皿・鍋が出土しており、共伴関係にあると捉えることができる。瓦器はⅢ－2期を主体とし、Ⅲ－3期およびⅣ－1期を含んでいると考えられるが、土師質土器についても若干の型式差が認められ、各時期の瓦器に共伴しているものと思われる。

下岡田遺跡、池田城跡については、瓦器の年代とは異なる遺構からの出土であり、直接的な組成の検討はできない。下岡田遺跡では掘立柱建物跡（S B 004）では瓦器とともに、青磁、土師質土器が出土しているが、詳細は不明である。建物内に構築された柱穴状土坑から宋銭を主体として、唐銭、明銭60枚が出土しており、最も新しい永楽通宝（1408年初鑄）を基準に考えれば、S B 004の構築年代は15世紀前期を大きく遡ることはできない。したがって、出土瓦器はこの建物に伴うものではないと判断される。S B 004に近接するS B 005やS B 004から西側に離れた地点に位置するS B 006・007も中世の建物跡であり、遺構に伴う遺物が出土している。しかし、出土遺物は、高麗青磁、備前焼播鉢などを含み、備前焼播鉢はⅣ期後半を主体としているようである。これらの建物跡についても15世紀代に位置づけられ、S B 004と同時期あるいは前後する時期に建物群を構成したものと思われる。包含層を含めて考えると、本遺跡では龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗ⅤまたはⅥ類、東播系須恵器（第Ⅱ期第2段階～第Ⅲ期第1段階）が少量出土しており、瓦器に組成する可能性がある。出土瓦器は小破片のみであることから詳細な時期を検討できないが、Ⅲ－3期まで下の資料が含まれるとすると、遺構周辺から出土した龍泉窯系青磁Ⅰ－5類も組成の一つの候補となる。いずれにしても、瓦器を使用した活動の主体は隣接地の未調査区に存在するものと思われる。池田城跡では3郭および4郭から瓦器が出土しているが、瓦器の年代に相当する遺構は検出されておらず、直接組成を検討できる状況ではない。3・4郭および遺構上の包含層出土遺物のうち、土師質土器坏、皿の一部が瓦器に組成するものと思われる。

その他の遺跡はいずれも包含層あるいは出土状況の不明な資料であり、組成を詳細に検討することはできないが、包含層中から出土している遺物を検討することである程度の組成を復元することができる。ここでは煩雑となるので各遺跡の包含層中の出土遺物を一々列挙しないが、瓦器と同一時期に位置づけられる遺物の内容を検討すると、土師質土器の他に、白磁、青磁などの輸入陶磁器、東播系須恵器、亀山焼など豊富な組成が想定される遺跡（太田川放水路遺跡、水分神社遺跡、中垣内遺跡）と土師質土器を組成の主体とする遺跡（石井城第Ⅱ号遺跡、石井城貝塚）の2者が認められ、

詳細は不明であるが、伝石井城周辺古墳、長福寺南門貝塚、山田貝塚も後者に属する可能性が高い。先述した畝観音免第1号古墳をはじめとする遺跡もこれら2類型に区分され、下沖2号遺跡、菩提院遺跡、下岡田遺跡、池田城跡は前者に、畝観音免第1号古墳は後者に分類できる。こうした状況は、西条盆地の様相と共通している。

沼田川下流域は三太刀遺跡のみであるが、組成を検討する上で良好な資料が得られている。瓦器は複数の遺構で出土が確認されており、A地区SB3で、白磁皿、青磁碗、土師質土器坏・皿、B地区SB5で、東播系須恵器鉢・甕、吉備系土師質土器碗、土師質土器皿、石鍋、B区単独柱P2で、土師質土器坏・皿、吉備系土師質土器碗、B地区SX1で、白磁碗・皿、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁合子・碗・皿、青白磁皿、須恵器碗、土師質土器碗・坏・皿など、C地区SB11で土師質土器皿、C地区SD9で土師質土器坏・皿、C地区SD10で龍泉窯系青磁碗、F地区SX2で、白磁碗、須恵器碗、黒色土器碗などが伴出し、B地区SD3で瓦器碗、B地区単独柱P8では瓦器皿が単独出土している。以下、伴出遺物および瓦器の年代について検討してみる。SB3の白磁皿はⅧ類、青磁碗は龍泉窯系Ⅰ類で、両者が本来的な組成であるとすれば、12世紀中葉～13世紀初頭に位置づけられる。出土瓦器は和泉型Ⅲ-2期であることから、年代的な齟齬もない。土師質土器は多少の時期幅があるように思われるが、出土の輸入磁器、瓦器、土師質土器が組成をなすと見て大過ない。単独柱P2の土師質土器坏・皿は、SB3に比較すると法量や器壁の薄さなど後出的な様相で、吉備系土師質土器碗は法量や形態から草戸Ⅱ期後半（14世紀中葉）に位置づけられるものと思われる。出土の瓦器碗・皿は和泉型Ⅲ-2期と思われることから、瓦器は混入と判断される。SB5の東播系須恵器は第Ⅱ期第2段階に位置づけられる。吉備系土師質土器碗は焼成が良好で、口径約12cmの法量を有し、しっかりした高台であることなどから草戸Ⅰ期前半（13世紀半ば～後半）に位置づけられ、土師質土器皿は廿日市市菩提院遺跡第Ⅳ遺構面（12世紀末～13世紀前葉）（是光・妹尾編2005）の資料に類似している。石鍋は鏝が欠落した口縁部付近の破片のため詳細な同定は困難であるが、Ⅲ-a-2類（12世紀後半を中心とする）に比定される可能性が強い。瓦器は和泉型Ⅲ-2期を主体とし、Ⅲ-1期に遡るものを含んでいることから、出土遺物はほぼ同時期の組成を示しているものと理解される。SX1の白磁碗はⅤ類、白磁皿はⅧ類、龍泉窯系青磁碗はⅠ類及びⅠ-5類で、この他に同安窯系青磁皿が出土しており、12世紀後半～13世紀初頭を中心に14世紀前葉までの幅を有している。須恵器は類例を挙げることはできないが、古代末～中世初頭に位置づけられている東広島

市小越窯跡跡、旦原窯跡に後続する可能性がある。土師質土器坏・皿はS B 3に後続する時期を主体として時期幅が認められ、13世紀半ば～14世紀前半を中心としている可能性がある。また、吉備系土師質土器碗（草戸Ⅰ期後半？）や備前焼Ⅱ期碗を模したような土師質土器が出土している。出土遺物は全体的にかなり時期幅のある資料を含んでいると言えよう。出土瓦器はⅢ-2期であり、出土遺物のうち、白磁碗、皿、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、土師質土器坏・皿の一部などが組成するものと思われる。S B 11の土師質土器坏・皿は法量の縮小が顕著で、D地区S D 11などの出土資料と共通する。S D 11では草戸Ⅱ期後半（14世紀前半～半ば）に相当する吉備系土師質土器を伴っている。出土の瓦器は和泉型Ⅲ-2期であり、混在しているものと判断される。この他にB地区S D 4・5で瓦器碗破片1点が出土しているが、両遺構のいずれから出土したかは不明である。両遺構では土師質土器が出土しているが、瓦器の年代より後出の様相を示しており、瓦器は混入であろう。S D 9の出土遺物は土師質土器が主体で、土師質土器はS B 3より後出の様相を示す。瓦器は和泉型Ⅲ-2期であることから、混入であろう。S D 10の青磁碗は龍泉窯系Ⅰ類で、瓦器は和泉型Ⅲ-3期であることから組成をなすものと思われる。S X 2では古代・中世の遺物が混在しており、瓦器に伴う可能性のあるのは白磁碗などがある。

第5表 沼田川下流域・芸北地域の瓦器出土遺構および包含層における瓦器と共伴遺物一覧

	遺 跡 名	出土遺構等	和 泉 型 瓦 器						楕 葉 型	伴 出 遺 物 等									
			器 種		型 式					白 磁	青 磁	船 載	東 播 系	亀 山	吉 備 系	土 師 質	そ の 他		
			碗	皿	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅳ 1										Ⅳ 2	
31	三 太 刀 遺 跡	A・S B 3	△							△	△						○		
		B・S B 5	△	△									?						石鍋
		C・S B 11	△															△	
		B・P 2	△	△													△	○	
		B・S X 1								○	○							◎	
		B・S D 3	△																
		B・S D 4・5	△																
		C・S D 9	△																◎
		C・S D 10	△								△								
		F・S X 2		△													△	△	
	包含層	◎	△						◎	◎		+	+	◎	◎				
32	郡山大通院谷遺跡	東地点	包含層	◎						△	△						+		
		西地点	包含層	◎						△	◎							+	
		包含層	◎							△	◎							+	

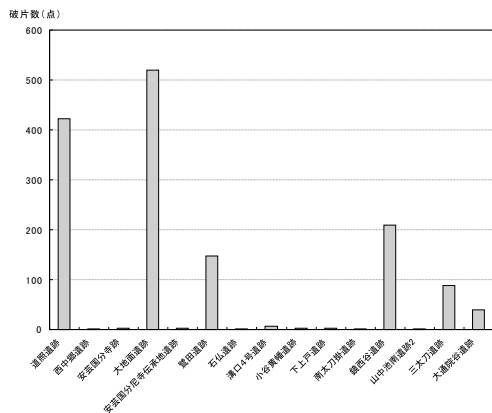
※和泉型瓦器の欄の濃い灰色は存在が確実なもの、薄い灰色は存在する可能性があるものを示す。
 ※△・○・◎は出土量を示し、△は1～5点、○は6～10点、◎=11点以上である。
 ※伴出土器等は遺構の一括遺物の他に瓦器と共伴する可能性のある遺物を示している。
 ※白磁は中国産白磁、青磁は中国産青磁、船載は中国産白磁・青磁以外の輸入陶磁器を示す。
 ※吉備系は吉備系土師質土器、土師質は土師質土器を示す。
 ※伴出土器等欄の+は存在するが出土点数が不明であるもの、?は存在する可能性があるものを示す。

遺構出土の瓦器は和泉型Ⅲ-2期を主体にⅢ期におさまっているが、包含層中の資料はⅣ-1・2期に下るものが含まれている。出土瓦器と組成する可能性のある資料としては、輸入磁器、東播系須恵器鉢、土師質土器があり、Ⅲ期は白磁碗Ⅴ類、白磁皿Ⅷ類、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、東播系須恵器鉢、土師質土器坏・皿など、Ⅳ-1・2期は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類、東播系須恵器鉢、亀山焼甕、吉備系土師質土器、土師質土器坏・皿などが組成すると想定される。土師質土器以外は量的には多くはないが、豊富な組成をなすものであろう。

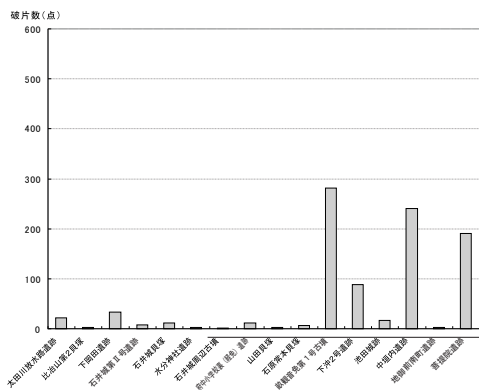
以上、安芸地方の瓦器出土遺跡における組成について縷々検討してきたが、西条盆地、広島湾岸ともに、輸入陶磁器類、東播系須恵器、亀山焼、土師質土器など豊富な組成を示すものと土師質土器を主体とする単純な組成を示すものの2者が認められた。沼田川下流域、芸北地域では三太刀遺跡、郡山大通院谷遺跡の各1遺跡のみであるが、いずれも前者に属するものである。なお、今回は詳細に検討できなかったが、前者には畿内系土師質土器が組成に加わるものと予想される。また、現状では、いずれの遺跡においても、備前焼を組成する例は確認されていない。

5) 安芸地方における瓦器出土遺跡とその性格

前節の検討で安芸地方における瓦器出土遺跡は遺物（土器）組成の面で大きく2類型に分けられることが明らかとなった。ここで改めて各遺跡の瓦器出土点数に着目してみると、西条盆地では、鏡西谷遺跡、道照遺跡、鷺田遺跡、大地面遺跡の4遺跡においてきわめて多数の破片が出土している（第47図）。これに対して、その他の遺跡は1～数点といずれも10点以下であり、両者の差は歴然たるものがある。破片数での集計であるため、個体数にするとその差は大きく縮まると思われるが、鏡西谷遺跡50体以上、道照遺跡で50個体以上、鷺田遺跡20個体以上、大地面遺跡50個体以上の個体数が想定されることから、やはりその差は明瞭である。また、これら多数出土遺跡では一定量の皿を伴っているが、少数出土遺跡では碗を主体として、碗か皿、いずれかに留まっている。広島湾岸では、畝観音免第1号古墳、下沖2号遺跡、中垣内遺跡が突出した出土数を示すのに対して、残りの大半の遺跡はおおむね10点以下である（第48図）。太田川放水路遺跡22点、下岡田遺跡18点は両者の中間的出土数であるが、前者は工事中の小規模調査であり、後者は隣接地域に中世前期の生活遺構が想定されることから、今後の調査で大幅な出土数の増加が期待される。畝観音免第1号古墳をはじめとする多数出土遺跡では少なくとも20～30個体以上の瓦器碗が存在したと見られ、保有数において他の遺跡とは大きな格差を認めることができよう。沼



第47図 西条盆地・沼田川下流域・芸北地域の遺跡別瓦器出土破片数対比図



第48図 広島湾岸の遺跡別瓦器出土破片数対比図

田川下流域の三太刀遺跡も多数出土遺跡に含まれる。芸北地域の郡山大通院谷遺跡は40点で、両者の中間的出土数であるが、中世前期の遺構は調査地外に広く存在するものと思われることから、今後の調査で大幅な増加が期待でき、やはり多数出土遺跡に含めて考えることができるであろう。

これらの瓦器出土量と土器組成は密接に関連しており、瓦器多数出土遺跡は基本的に豊富な遺物（土器）組成を示すのに対して、おおむね少数出土遺跡は土師質土器を主体とする単純な組成を示している。しかし、西条盆地、広島湾岸では若干の例外が認められ、出土点数から見ると、少数出土遺跡に含まれるが、豊富な組成を示している遺跡が散見される。西条盆地の安芸国分尼寺伝承地遺跡、下上戸遺跡、溝口4号遺跡、広島湾岸の太田川放水路遺跡、下岡田遺跡、水分神社遺跡、石原常本貝塚が該当する。安芸国分尼寺伝承地遺跡の瓦器は遺跡確認のための試掘調査トレンチ出土であり、今後、瓦器およびその他の遺物の大幅な増加が期待される。下上戸遺跡、溝口4号遺跡についても中世前期を主体とする地区が調査区に近接して存在すると思われる、今後の調査で瓦器およびその他の遺物の大幅な増加が期待される。太田川放水路遺跡、下岡田遺跡が本来多数出土遺跡に含まれるべきものであることはすでに述べた。水分神社遺跡、石原常本貝塚はいずれも包含層の一部から遺物が出土したもので、本来の組成の一部を示しているに過ぎない。同様に、今後大幅な資料増加が期待できる。これらの遺跡についてはいずれも本来多数出土遺跡に列される可能性が高い。

こうした瓦器出土遺跡に見られる出土量と遺物（土器）組成の相違は遺跡の性格に基づく可能性が高い。遺跡の部分的な調査や表面採集のみの遺跡も多く、必ずしも全

ての遺跡の性格を明らかにできるわけではないが、ここで地域ごとに遺跡の内容を整理しておく。西条盆地では、城館を含む集落遺跡⁽²⁰⁾を主体として、寺院遺跡、生産遺跡（祭祀遺跡）が認められる。まず集落遺跡から概観すると、鏡西谷遺跡C地区、道照遺跡、鷺田遺跡では建物跡等が検出されており、中世前期集落の主要部分の一部が調査されている。大地面遺跡では建物跡は不明だが、井戸1基が検出されており、隣接部に集落を想定することができる。鏡西谷遺跡は西条盆地沖積部から約80mの比高差がある。良好な眺望をもち、西条盆地南部を一望できる立地である。建物跡が検出されたC地区は東西と北側の三方を丘陵・山麓斜面に囲まれ、F地区は背後が急峻な丘陵斜面、周囲は自然の谷に囲まれている。B地区では建物跡は検出されていないが、未調査区の平坦部はC地区と同様の景観にあり、いずれも自然地形を利用した防衛的立地を示している。同時期の構成遺構が十分に明らかにされていないが、検出建物跡の規模や出土遺物、立地などからみて居館的な性格が想定できよう。道照遺跡、鷺田遺跡、大地面遺跡は西条盆地低地部に接した低丘陵上に立地しており、道照遺跡、鷺田遺跡は大規模な集落の一部を構成し、大地面遺跡も隣接地に大規模な集落の存在を予想させる。道照遺跡は12世紀後半～14世紀前半を主体としながら、集落の成立は古代末まで遡り、中世後期まで存続している。鍛冶遺構を併設しており、出土遺物の内容から見ても一般集落⁽²¹⁾とは言えない様相を示している。柵列や堀等は確認されていないものの、居館的性格を想定することができる。

溝口4号遺跡、小谷黄幡遺跡、下上戸遺跡、山中池南遺跡第2地点、南太刀掛遺跡は国分寺跡などが位置する旧西条町市街地から離れた位置にあり、西条盆地低地部に面した低丘陵や山麓裾の扇状地などに立地している。溝口4号遺跡は中世前期では13世紀後半～14世紀前半の大規模な集落が主体で、出土瓦器の時期の遺構は不明であるが、瓦器と組成をなすと思われる輸入磁器、東播系須恵器などの存在から集落の成立は12世紀末～13世紀初頭まで遡るものと思われ、出土遺物が方形堀内を主体とすることから調査区隣接部に同時期の遺構が広がっている可能性がある。規模や性格については今後の調査の進展に俟つほかはないが、本遺跡が領家中原氏の高屋保支配拠点集落（居館）と想定されていることから、調査地点の遺構群に先行する集落も一定規模を有していた可能性は高い。南太刀掛遺跡、小谷黄幡遺跡、西中郷遺跡は遺跡の全貌が明確ではないが、立地や出土遺物から一般集落であったものと推定される。下上戸遺跡、山中池南遺跡第2地点については評価する材料に乏しいが、前者は一般集落の可能性がある。後者は立地が耕作適地ではなく、一般集落とは別の性格が付与

されるかもしれない。

安芸国分寺跡は古代に建立された寺院遺跡であるが、中世以降も寺院として存続していたようであり（妹尾 2006）、政治・経済の中心地域の一角として重要な場所のひとつであったと考えられる。同遺跡における中世遺構・遺物の様相は十分に明らかとなっていないが、古代においては安芸国分寺跡周辺や隣接地の安芸国分尼寺伝承地付近を含め官衙的な空間が広がっていたようで、古代末～中世前期の遺物が広い範囲で出土しており、中世前期においてもそうした性格が引き継がれ物流拠点として機能したものと想定される。石佛遺跡では土師質土器焼成窯跡内で瓦器塊 1 点が出土し、窯廢絶に伴う祭祀と推定されている。

広島湾岸では居館遺跡・城館遺跡を含む集落遺跡が主体とし、祭祀遺跡が認められる。広島湾岸の瓦器出土遺跡は当時の海岸線に近接した低丘陵上や丘陵裾の扇状地や段丘面などに営まれており、標高の高低を除けば、共通した立地にある。集落遺跡で調査が実施されているのは、下沖 2 号遺跡、中垣内遺跡、池田城跡、菩提院遺跡である。下沖 2 号遺跡は建物跡 4 棟や柱穴群が検出され、相当規模の集落が広がっていることを予想させる。同遺跡は古代においては官衙的性格の強い遺跡であり、古代山陽道沿いに立地することからも、中世前期にまで古代に保持されていた政治・経済的な側面を強く引き継いでいるものと想定される。中垣内遺跡は駅館などの古代官衙と推定されている遺跡である。中世前期の遺構は確認されていないが、古代山陽道沿いに位置し、出土遺物の内容から見て未調査区に中世前期の相当規模の集落跡が存在する可能性が想定される。池田城跡は上記 2 遺跡に近接して位置しており、古代山陽道を見下ろす丘陵上に立地している。中世前期の遺構は検出されていないが、丘陵頂上部付近で中世前期の遺物が出土していることから見て、城館的な性格を持った遺跡であったものと推定される。出土遺物は土師質土器を主体とし、少量の瓦器を伴う程度であることから 1～数棟の建物などからなる小規模施設であったのかもしれない。菩提院遺跡は、建物跡等は検出されていないものの、建物を構築するために造成されたと推定されるテラス状遺構が検出されている。建物等は隣接地に存在するものと思われる。瓦等の寺院に関連した遺物はまったく出土しておらず、集落跡と思われる。本遺跡は巖島神社の北西 250 m に位置し、巖島沿岸から近接の距離にある。

その他の集落遺跡はほとんど内容が不明であるが、太田川放水路遺跡は出土遺物の内容や立地から見て太田川河口部に位置し、近接地に港湾施設やこれに付随する都市的集落が展開していたことが予想される。下岡田遺跡は古代において駅館等の官衙施

設が所在している。古代山陽道沿線であること、国府推定地域であることとも合わせて、中垣内遺跡、下沖遺跡など同様、中世前期へ政治的・経済的な側面が引き継がれていたことが想定される。その他の遺跡については性格を推定することが困難であるが、貝塚遺跡を多く含んでおり、近接して集落が存在するものと思われる。貝塚の規模や出土遺物の内容から見て比較的小規模の一般集落である可能性が高い。

祭祀遺跡としては畝観音免第1号古墳、水分神社遺跡がある。前者は横穴式石室を利用した比較的長期間に亘る祭祀場であり、水分神社遺跡は雨乞い等の水に関わる祭祀場と推定される。前者は当地域を代表する古墳を利用しており、飲食を伴う祭祀を行っているものと思われる。後者は採集遺物であるが、比較的短期間の様相を示している。

沼田川下流域の三太刀遺跡は掘立柱建物跡13棟、柵列跡9基、井戸1基などが検出された集落跡である。遺跡の一部が調査されたのみで、相当数の建物跡で構成される大規模集落であり、堀等は確認されていないが、建物群の周囲を丘陵がコの字状に囲んでおり、防禦的な機能が強く窺え、この地域の拠点の居館と推定される。芸北地域の郡山大通院谷遺跡は中世前期の遺構が検出されていないため、遺跡の性格はいまひとつはっきりしない。古代においては郡衙の一部を構成すると推定される遺構が9世紀初頭まで確認され、近接する郡山町屋遺跡では8世紀の遺構・遺物が検出されている（荒木編1993）ことから、隣接地域では古代後半以降も官衙的な性格を持つ施設が広く展開していたものと推定される。中世前期においても政治・経済の中心的性格を維持していた可能性は強く、本遺跡において輸入陶磁器、瓦器等の遺物が出土することはそのことを間接的に窺わせるものであろう。

これまで概観して気がつくことは、居館的集落遺跡、都市的集落遺跡、小規模一般集落遺跡、祭祀遺跡、生産遺跡など性格を異にする各種の遺跡から瓦器が出土していることである。このことは瓦器、特に瓦器碗が保有層を明示するような特殊な性格が付与されている遺物ではなく、土師質土器碗・坏・皿と同様な性格をもった日常雑器の一つであった可能性が強い。土師質土器碗・坏・皿は宴や祭祀などに使用された後再利用されることなく廃棄される仮器の性格を持つことが指摘されており（鈴木2002）、瓦器も同様な性格が想定されるが、土師質土器碗・坏・皿については大量一括廃棄されない例も多々あり、場所や地域により日常生活の様々な場面で利用されている可能性がある。瓦器の出土状況の多様性も同様に理解することができる。安芸地域では、土師質土器の碗形態を基本的に欠いており、地域によっては瓦器がその代用

を果たしている場合もあった可能性はあるが、その当否については安芸地方における瓦器出土資料がさらに蓄積された段階で再論したい。いずれにしても、こうした状況は基本的に瓦器が個人的な携行物として搬入されたのではなく、商品として流通していたことを示すのであろう。

ところで、安芸地方における瓦器出土遺跡は、現状では広島湾岸と西条盆地に集中して分布しており、沼田川下流域、芸北地域吉田で点的に知られるのみである。広島湾岸の遺跡について、橋本久和は河口部の流通拠点（内陸部への結節点）および古代山陽道沿いの流通拠点の2類型に整理している（橋本 2001）。現状においても橋本の理解を大きく変更すべき遺跡は知られていない。大地面遺跡、鷺田遺跡をはじめとする西条盆地北部の諸遺跡は古代山陽道沿いに位置している。古代においては安芸国分寺、安芸国分尼寺が置かれ、国分寺周辺では官衙的な遺構が集中的に検出されている。文字通り安芸地方における政治・経済の中心地と評価される場所であり、中世においても同様の性格を引き継いでいると想定される。大地面遺跡、鷺田遺跡などは安芸国分寺跡に近接して所在しており、古代山陽道沿いの流通拠点と評価できるであろう。芸北地域の郡山大通院谷遺跡が位置する吉田は古代には高宮郡衙が所在した地と推定され、遺跡内でも関連遺構が検出されている。また、本遺跡は旧出雲街道沿いに位置しており、官道沿いの流通拠点と評価できる。これに対して、鏡西谷遺跡、道照遺跡は西条盆地の中央部に立地しており、国分寺跡や古代山陽道から比較的近距离に位置しているものの、直線で2.5～3.5kmの距離がある。古代山陽道沿いの流通拠点とするには無理があろう。古代における西条盆地の政治・経済の中心地は安芸国分寺周辺とその北東約5kmに位置する高屋町西本周辺である。後者は弥生時代以来の中心地域であり、溝口4号遺跡、小谷黄幡遺跡はここに所在する。国分寺周辺への物資運搬の主要路は、広島湾岸から東へ向かう山陽道沿いのルート、東広島市高屋町を経て芸北方面から南下する北からのルートおよび沼田川を遡る東からのルート（山陽道を西に向かうルート）、古代に漆が所在したとされる安芸津から北上するルート（以下、安芸津街道と仮称する）などが想定されるが、瀬戸内を中心とする交易や畿内との関係を重視すれば安芸津街道がもっとも重要であり、道照遺跡はこのルート沿いに位置しているものと思われる。安芸津街道は安芸国における主要官道と捉えることができ、道照遺跡は国分寺付近の官衙地域への玄関口に当たっている。鏡西谷遺跡は安芸津街道に接する位置にはないが、西条盆地南部を一望できる立地にあり、安芸津からの西条盆地入口にあたる蚊無峠付近から道照遺跡付近までの道程をすべて監視する

ことが可能である。道照遺跡は集落の成立が古代末に遡るが、整備されたのは12世紀以降である。鏡西谷遺跡および隣接の鏡東谷遺跡では古代末に遡る可能性がある須恵器片が少量出土しており、同様に、集落の成立が古代末まで遡る可能性があるものの、鏡西谷遺跡は12世紀以降に主体があり、鏡東谷遺跡は15世紀以降に主体がある。道照遺跡における集落の成立や整備が鏡西谷遺跡に先行している可能性が若干あるものの、検出遺構や出土遺物などから見て、両遺跡は12世紀後半以降に密接な関係を持ちながら営まれた可能性が強い。西条盆地南部の中世前期の遺跡がまったく不明の現状では両遺跡の性格を詳細に検討することは困難であるが、安芸津街道と密接に関連して古代末～中世初頭に成立し、中世前期前半に大幅な整備が行われたものと想定できる。広島湾岸における下沖2号遺跡と池田城跡と同様の関係を想定することも可能で、道照遺跡は国分寺周辺の官衙地域への人的移動や物流の管理などを行う関的な施設、鏡西谷遺跡は居館と思われる、官道監視などを含めた治安維持的な機能を想定できるかもしれない。いずれにせよ、今後の調査の進展を俟って検討を進める必要がある。

沼田川下流域の三太刀遺跡は古代山陽道に近接して位置する。また、沼田川河口から約6km上流に位置し、海岸からは奥まった位置にあるが、沼田川に隣接し河川交通に直結する立地にあることから、沿岸部の遺跡に近い条件を備えている。現状の資料に基づく、集落の成立は遡っても12世紀中葉～後半⁽²²⁾までで、主体は13世紀後半～14世紀前半にある。周囲には古代官衙的な施設は知られておらず、沼田川に近接する立地や丘陵にコの字形に囲まれた地勢、出土遺構・遺物などから居館と見ることができる。小早川氏の居館と見るか否かは別にしても、中世沼田荘開発に伴って成立・発展したものと見ることができ、西条盆地の鏡西谷遺跡、道照遺跡と同様に、中世の政治的、経済的動向に関連して成立したと想定されよう。

これまで述べてきたように、安芸地方における瓦器出土遺跡を概観すると、多数出土遺跡と少数出土遺跡があり、両者の量的差異はきわめて明確であった。果たしてこうした現象はどのように理解できるであろうか。広島湾岸の多数出土遺跡である中垣内遺跡、下沖2号遺跡、菩提院遺跡、畝観音免第1号古墳のうち、中垣内遺跡、下沖2号遺跡は、橋本の指摘ごとく、官道沿いの物流拠点と想定され、瓦器が一定量商品として搬入された結果と思われる。菩提院遺跡についても、橋本が指摘するように、中世初頭以降、厳島が瀬戸内海交易の重要な拠点として機能したことが想定され、物流拠点の一部を形成しているものと思われる。この他に、下岡田遺跡、太田川放水路

遺跡についても瓦器多数出土遺跡に含むべきもので、前者は官道沿いの物流拠点、後者は河口部の物流拠点として評価され、瓦器が一定量商品として搬入された可能性がある。畝観音第1号古墳については祭祀遺跡であり、瀬野川河口部の物流拠点と連動しながら多数の瓦器が祭祀具として集積されたと想定できる。その他の広島湾岸の遺跡はおおむね瓦器少数出土遺跡であり、下岡田遺跡周辺に集中している。下岡田遺跡を物流拠点と捉えた場合、その周辺に形成された小規模の遺跡であり、流通を通じた再分配の様相を示していると理解したい。貝塚を多く含みながらも貝塚とは無縁の遺跡もあり、瓦器出土の背景は一様ではなかったと思われる。なお、地御前南町遺跡は厳島（宮島）対岸に位置し、湊が存在したことが想定される場所に位置していることから、物流拠点である可能性も想定しておく必要がある。

西条盆地では、大地面遺跡、鷺田遺跡、鏡西谷遺跡、道照遺跡が多数出土遺跡であり、大地面遺跡、鷺田遺跡は官道沿いに形成された物流拠点と評価され、安芸国分尼寺伝承地遺跡や芸北地域の郡山大通院谷遺跡も同様に評価されるであろう。下上戸遺跡はこれら物流拠点周辺に形成された遺跡であり、生産遺跡である石佛遺跡も同様に、物流拠点から流通を通じて再配分されたものであろう。西中郷遺跡、南太刀掛遺跡、小谷黄幡遺跡は安芸国分寺からは直線で5～7kmあり、流通拠点から相当の距離に位置している。両遺跡は流通拠点遺跡や居館遺跡などではないことや西条盆地内各所に市の存在を想定することは現状では困難であることからすれば、流通を通じて西条盆地一円に瓦器が商品として流通していたと見るのが許されるかもしれない。

鏡西谷遺跡、道照遺跡や沼田川下流域の三太刀遺跡は中世前期に至って新たに形成された政治的な拠点と評価できるものと思われる。溝口4号遺跡は詳細が不明であるが、13世紀後半には領家の大規模な居館として成立していると推定されることから、12世紀末～13世紀においても政治的中心地として機能した可能性がある。いずれにしても、鏡西谷遺跡などと同様に、新たに形成された政治的な拠点として理解される。これらの遺跡は、直接的な商品の搬入や物流拠点からの再配分として瓦器や輸入陶磁器などが集積されたものと想定される。

最後に、物流拠点遺跡の問題について少し触れておきたい。現状では、安芸地方における物流の様相を議論できる状況にはないが、瓦器の利用時期や吉備系土器の搬入状況から見ると、沿岸部から内陸部の物流の担い手が同一ではないことが予想される。瓦器の利用時期が広島湾岸、沼田川下流域の沿岸部と西条盆地、芸北地域の内陸部では異なっていることは本節第2項ですでに指摘した。瓦器の主たる使用時期は和泉型

Ⅲ-2～3期（特にⅢ-2期）である点では共通しているが、内陸部ではⅢ期ではほぼ使用期間が終わるのに対して、沿岸部ではⅣ-1・2期まで一定程度の使用が継続している。すでに指摘されているように、内陸への瓦器の供給がⅢ期ではほぼ途絶える背景には瓦器の商品としての位置づけが大きく変化したことと関係しているものと思われる。Ⅳ期に至ると、沿岸部への部分的な搬入を除けば、瓦器が商品として供給されなくなったことを示しており、瀬戸内海交易における瓦器を含めた商品の供給主体が直接内陸へ搬入しているのではなく、沿岸部の物流拠点を通して別の供給主体が存在したことを示唆しているのであろう。こうした動向は、吉備系土師質土器塚の分布からも裏付けられる。すでに橋本が指摘している（橋本 2001）が、安芸地方における吉備系土師質土器塚の分布は沿岸域に限定されており、遺跡が増加した現時点においても内陸部ではまったく出土を見ていない。橋本は吉備系土師質土器についても商品の可能性を示唆しているが、安芸地方では、菩提院遺跡の例外を除くと、瓦器に比較して1遺跡における出土量が少なく、商品というよりは携行品的な様相を示している。こうした状況も、沿岸部において商品の供給主体が交代している可能性を示唆しているものと思われる。

5. おわりに

安芸地方における瓦器の出土遺跡数も次第に増加しており、地域を単位として、あるいは地域内における遺跡を単位として瓦器から見た流通の検討を行うことができる環境が整ってきたが、一方では西条盆地や広島湾岸等を除くと、様相はまったく不明な状況である。本稿では安芸地方における瓦器出土遺跡を集成して、型式、時期、遺物（土器）組成、出土遺跡の性格などについて検討した。現状では瓦器出土遺跡は、内陸部の西条盆地と沿岸部の広島湾岸を中心に分布しており、沿岸部の沼田川下流域（三太刀遺跡）、内陸部の芸北地域（郡山大通院谷遺跡）でも分布が確認される。出土瓦器は基本的に和泉型に属するものであるが、西条盆地の道照遺跡、沼田川下流域の三太刀遺跡で楠葉型塚を1点ずつ確認することができる。瀬戸内沿岸の他の地域と同様であるとすると、今後の調査でさらに例数は増加するものと予想されるが、和泉型を主体とする傾向に大きく変化はないであろう。和泉型瓦器は塚を主体としており、皿を少量組成する遺跡がある。西条盆地では13遺跡中6遺跡、広島湾岸では20遺跡中4遺跡で、三太刀遺跡、郡山大通院谷遺跡でも出土が認められ、少なからず出土している。多くの遺跡で破片が主体であるため、皿を組成する遺跡は実際には今回把握

した以上に多く、出土遺跡における組成比がもう少し高い可能性はあるが、西条盆地、広島湾岸とも半数に満たない。単独出土などの例外を除けば、破片数比ではおおむね全体の1～2%であることからすると、鏡西谷遺跡は皿が全体の1割程度を占め、突出した状況を示している。皿出土遺跡は単独出土などの例外を除くと、いずれも瓦器多数出土遺跡であり、少数出土遺跡は原則的に塚である。詳細な分析は他日を期したいが、瓦器皿は商品とは別の要因で搬入されていることを示すものと思われる。出土和泉型瓦器の時期はⅢ-1期を最古として、Ⅳ-1・2期まで認められる。Ⅲ-2・3期（特にⅢ-2期）が利用時期の中心で、Ⅳ期には大幅に利用が減少している。他地域の例からすれば、今後、Ⅱ期に遡る資料が出土する可能性はあるが、現在の状況に大きな変更を加える必要が生じる可能性は低い。瓦器の使用時期や最盛期についてはいずれの地域もほぼ同様であるが、内陸部と沿岸部では終息の様相に相違が認められる。内陸部ではⅢ-3期にはすでに減少傾向が明確で、Ⅳ期に下る資料はほとんど認められないが、沿岸部ではⅢ-3期の資料も相当量存在するようで、Ⅳ期に至って大幅に減少するものの、少量利用される遺跡が散見される。Ⅳ期には瓦器の商品としての性格に変化が見られることと内陸への供給状況の変化は連動していることが想定される。Ⅳ期における沿岸部を主とする瓦器の分布は、吉備系土師質土器塚が内陸部に分布していない現象と平行の関係にあり、瓦器の沿岸部への供給者と内陸部への供給者が異なっていることを示唆しているものと思われる。瓦器出土遺跡は、居館、寺院、都市の大規模集落、農村の小規模集落、祭祀遺跡など多様で、土師質土器などと同様な日常雑器としての性格が付与された商品が想定される。

安芸地方の瓦器出土遺跡を概観すると、周辺に展開する小規模集落や祭祀遺跡などを含めて官道沿いの物流拠点を中心としており、広島湾岸では河口部の物流拠点に位置づけられる遺跡も認められる。一方、内陸部の西条盆地では安芸国分寺周辺の官道（旧山陽道）沿いに政治的・経済的中心地に物流拠点が形成されるとともに盆地内の各所の小規模集落からも少量の瓦器が出土しており、内陸物流拠点周辺部にも商品として再配分された様子を窺うことができた。西条盆地では、この他にも瓦器多数出土遺跡として鏡西谷遺跡、道照遺跡があり、現状では出土点数は多くないが、同様の性格が想定される遺跡として溝口4号遺跡がある。中世前期初頭において新たに官道沿いに成立した物流拠点とは異なる性格の遺跡であり、中世における物流管理や荘園開発などに関わる拠点的遺跡として性格が付与されることを指摘し、関や居館、城館などに位置づけられる可能性を想定した。溝口4号遺跡は13世紀後半～14世紀前半の堀

に囲まれた居館が良好な形で検出されており、領家中原氏の高屋保支配のための拠点集落と想定されている。和泉型Ⅲ期瓦器の出土から集落の成立が12世紀代まで遡ることが想定される。鏡西谷遺跡、道照遺跡については造営主体が定かではないが、西条盆地における中世前期の政治的・経済的動向と密接に関わっていると思われる。鏡西谷遺跡は、C地区S B 01の年代観について、これまでの報告では13世紀前葉を中心とする時期と想定してきたが、廃絶時の一括遺物は瓦器や伴出遺物の検討を通じて12世紀末～13世紀初頭のかなり限定した時期を示すものであることが明らかとなった。C地区S B 01に先行する遺構・遺物はD地区、F地区で検出され、E地区にも先行する可能性のある遺物が存在することから遺跡の成立は少なくとも12世紀半ば～後半に遡るものと想定される。道照遺跡もほぼ同時期に成立しているが、東広島市調査地区では同安窯系青磁、龍泉窯系青磁Ⅰ類・Ⅰ-5類を若干認められるが、白磁碗Ⅳ～Ⅵ類を主体とし、遺跡の一部については少なくとも12世紀前半にかなり整備が進んでいた可能性がある。広島県調査地区では13世紀～14世紀前半の遺構を中心としながら古代末・中世初頭や14世紀後半以降の遺物が出土しており、かなり長期間に亘って存続している。これに対して、現状の資料から見ると、鏡西谷遺跡はC地区S B 01廃絶後しばらく活動痕跡が認められず、14世紀前半になってC地区西部などに遺物が分布し、その後はB地区を中心に、C地区、E地区などで16世紀まで継続的に遺構・遺物を認めることができる。このように両遺跡では立地や遺構の構成内容、遺構の形成時期などの違いなどを認めることができる。沼田川下流域の三太刀遺跡も中世前期に成立した遺跡で、居館としての性格を付与できるものと思われる。遺跡の成立は、出土瓦器などから遅くとも12世紀中葉～後半に遡ると思われ、13世紀以降大規模な整備が行われ、同地域の拠点的遺跡として14世紀前半まで継続している。これらの居館や拠点的な集落は源平の争乱期に相前後して成立・整備されており、こうした政治的動向に関与している可能性は高い。鏡西谷遺跡では鎌倉時代後半の活動停止期を挟んで南北朝時代にふたたび利用され始める遺構形成の様相は示唆的である。現状では造営主体を含めた具体的な内容を検討できる状況ではまったくないが、今後中世前期前半の平氏政権や領家に従属した在地武士団、承久の変以降の東国武士団と領家の荘園をめぐる争奪などの政治的動向も念頭に置きながら、考古学資料分析を進めていく必要がある。

今回の論攷では、瓦器出土遺跡の性格について言及したが、集落の定義がきわめて不十分であったことは否めない。今後、文献史料研究の成果を十分吸収しながら議論

を深めたいと思う。また、個別遺跡の瓦器分析においても、必ずしも出土資料を十分に吟味できなかった部分もあり、概括的な結論とならざるを得なかった。今後、さらに詳細な分析を進めることを約することでご寛容願いたい。

謝 辞

本稿を作成するにあり、広島大学考古学研究室、大阪府教育委員会、広島県教育委員会、(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、(財)広島市文化財団文化科学部文化課、(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター、(財)安芸高田市地域振興事業団、府中町教育委員会、廿日市市教育委員会、東広島市教育委員会、海田町教育委員会には資料実見の便宜を図っていただいた。資料実見にあたり、広島大学大学院文学研究科古瀬清秀、大阪府教育委員会三宅正浩・宮野淳一、(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室植田千佳穂・後藤研一、(財)広島市文化財団文化科学部文化課荒川美緒・楳木敬太、(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター吉野健志、(財)安芸高田市地域振興事業団沖田健太郎、東広島市教育委員会石井隆博、府中町教育委員会末廣久敬、海田町教育委員会山路進朗ならびに川越俊一、横田禎昭の各氏に大変にお世話になった。また、佐藤亜聖、鈴木康之、妹尾周三の各氏から有益な教示を頂き、佐藤、鈴木両氏には鏡西谷遺跡の瓦器全般について貴重なご意見を賜った。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 1点の意味する内容は多様である。すなわち、完形品、接合破片（複数の破片が接合している破片）、非接合破片をそれぞれ1点としてカウントしている。したがって、個体数は合計点数よりかなり少ないと考えられる。
- (2) 本稿で扱った鏡西谷遺跡の資料は1991年度及び1992年度に実施した発掘調査の際に出土したもののうち、既報告資料（報告書掲載分）および報告書作成に伴う整理作業でランクB（時期の判定が可能な程度の大きさあるいは時期判定可能な部位が残存している個体）を対象とした。また、発掘調査に先立って広島県教育委員会が試掘調査を実施したが、この際に出土した資料についても観察を行っていない。ランクC（時期判断が困難な小片）や広島県試掘調査出土資料の中に瓦器が含まれている可能性は高く、破片数はさらに増加するものと思われる。
- (3) 見込み部分に施されるヘラミガキ調整のうち、ジクザク状、平行状、格子状など定型的な調整を行うものが多い。本稿では体部内面の調整とは区別して暗文と表現しておく。
- (4) 本稿では直接計測可能な個体が少ないので、各部位が全体の1/5程度の小破片も含めて法量を復元して示した。小破片については不確定要素が大きいため5mm単位で復元しており、これに合わせる形で各部位が1/2以上残存し直接計測可能な個体についても5mm単位に換算している。
- (5) 瓦器皿の口縁部と底部の境は明瞭な稜線が認められるものは稜線を目安とした。しかし、稜線が明瞭でない個体も一定量ある。それらについても口縁部はヨコナデを主体とした調整痕が明瞭なため、ヨコナデの途切れる部分から下方を底部として底径を計測した。
- (6) 本文でも触れたように、橋本編年は尾上編年のⅣ-1期、Ⅳ-2期をそれぞれⅢ-3期、Ⅲ-4期としてⅢ期に編入している。したがって、ここでは橋本編年Ⅲ-3期、Ⅲ-4期の資料を尾上Ⅳ期前半のデータとして利用している。
- (7) 本稿で扱った瓦器壺および皿の口縁部外面の調整は、単位や口縁端部から及ぶ範囲の相違はあるもの

の、いずれもヨコナデによって仕上げている。したがって、以下、口縁部外面の調整については記述を省略する。

- (8) 東広島市調査区については報告資料を除いて実見することができなかつたので、出土瓦器の実数はさらに増加する可能性が高い。
- (9) 口径 12.6cm (報文第 34 図 197)、13.6cm (報文第 34 図 186) に復元されている壙が報告されている。いずれも小破片であり、後者は口縁部にかなりのひずみが認められる。それぞれ、口径 14cm 前後、15cm 前後に復元される可能性が高い。内面には圏線状のミガキが施されており、前者は 4～6mm 間隔で細いミガキが、後者は器面の摩滅が顕著だが、ほぼ同様の間隔で調整が行われているようである。他の資料を含めて口径 14cm を下る資料は明確ではない。無高台の底部は確認できないことから少なくともⅣ-3 期以降の資料はないと見ておいて大過ないであろう。また、量的には少ないが、暗文を施さない個体や体部のミガキ間隔が広い個体などが存在する。14cm を大きく下回る復元口径資料も明らかではないことからすると、Ⅳ-2 期に下る資料はないと見てよからうが、Ⅳ-1 期の資料が含まれている可能性は残されている。
- (10) 橋本 2001 では出土の瓦器を和泉型Ⅲ-1～Ⅳ-1 期に位置づけている。いずれも破片であるため、正確な法量を提示することはできないが、復元可能な個体では口径 15cm 前後の値であり、明らかに 14cm を下回るものは認められない。また、明確に無高台の資料も指摘できないことから、ここではいずれもⅢ期におさまるものと考えておきたい。
- (11) 近世以前の広島デルタの形成過程についてはほとんど考察できるデータを欠いている。毛利輝元が中世末に広島城を築城した当時は広島デルタ北部は安定した陸地として形成されており、比治山丘陵 (鳥) もデルタの一部となっていた。中世前期には広島デルタ北端部にあたる現在の広島駅周辺はある程度陸地化していたことが想定されるが、比治山付近まで完全に沖積化していたか否かは不明である。いずれにしても太田川河口部に位置していることから移動には渡船による手段が不可欠であった可能性が高い。
- (12) 田河 1977 では、瓦器 7 点が出土したと報告されており、そのうちの 4 点が写真に掲載されている。今回の実見では、壙 8 点を確認したが、写真に掲載されている 4 点のうち 1 点を確認することができなかつた。それを今回確認した資料に加えると、合計 9 点の瓦器が出土していることになる。
- (13) 田河 1977 では、瓦器として、口縁部 2 点、胴部 6 点と報告されている。報告では、「いずれも表裏とも黒色研磨されている」と記載されているが、今回確認した瓦器は外面にミガキは確認できない。また、報告に掲載された写真とは形状が異なっているように思われる。今回実見した資料は既報告資料と異なる可能性がある。
- (14) 田河 1977 の記載によると、報告資料が採取された川本忍氏住宅前の畑から約 50 m 西側に小規模な貝塚があったとされている。掲載の遺跡分布図を参照すると、石井城貝塚 1 (田河 1977 の 138 頁第 84 図の 7)、石井城貝塚 2 (田河 1977 の 138 頁第 84 図の 8) が認められ、報告資料採集地点の西 50 m の貝塚は第 84 図の 7 とされている。今回確認した資料の保管箱には石井城貝塚とのみ記載されている。田河 1977 の掲載写真の資料 (川本忍氏住宅前畑採取) には各遺物に「IS」と注記されており、本資料は無記入の状態である。これらのことから本資料は石井城貝塚 2 (川本忍氏住宅前畑西側の貝塚) から採集された資料である可能性が高いが、確認はできなかった。
- (15) 外面に顕著なミガキが残されている口縁部破片についてはⅡ期に遡る可能性もあるが、小破片であり、判断は困難である。Ⅱ期の瓦器壙としては少し内面のミガキが弱いようにも思われる。
- (16) 以前は石井城跡近くに位置する道隆寺に保管されていたようであるが、現在保管者が不明であり、今回実見することができなかつた。
- (17) 今回は実見することができなかつた。
- (18) 報文では合計 40 点の瓦器片が出土したとされているが、21 点しか実見することができなかつた。未実見の資料中にⅢ-1・2 期以外の資料が存在する可能性は否定できないが、おおむね全体傾向は示していると思われる。
- (19) 瓦器壙の法量については、基本的に報告書に掲載されている数値、あるいは掲載の実測図からの読取値を利用しているが、東広島市大地面遺跡出土資料のうち極端に口径の小さい 2 点 (本稿第 35 図 6・

- 14)、廿日市市菩提院遺跡出土資料のうち完形に復元されている6点(本稿第42図1・11～14)については数値を変更している。
- (20) ここで集落遺跡としたものには、市、宿館、関、居館、農業集落や複合的要素からなる「都市」など多様な性格の遺跡が包括されていると考えられる。一部の遺跡については限定的な性格を付与したが、十分に分析が行える状況にはない。今後の資料蓄積を俟ってさらに詳細に検討したい。
- (21) 居館や「都市」に付随する市、湊など、政治的・経済的拠点を除く遺跡を指しており、多様な性格の遺跡を含むと思われる。用語を含めて検討が必要である。
- (22) 三原市教育委員会の調査地区では白磁を主体とした遺物組成も知られているようで、遺跡の成立が12世紀前葉まで遡る可能性もある(広島県立歴史博物館鈴木康之氏教示)。

引用文献

- 青山透 1983「小越窯跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、40～59頁。
- 青山透ほか 2009『西中郷遺跡発掘調査報告書－農業生産法人等育成緊急整備事業西田口地区に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第68冊、(財)東広島市教育文化振興事業財団・東広島市教育委員会。
- 阿部滋編 1987『広島市佐伯区五日市町所在中垣内遺跡第2次発掘調査概報』広島市の文化財第38集、広島市教育委員会。
- 荒木清二編 1993『郡山城下町遺跡』広島県埋蔵文化財調査報告書第108集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 石垣敏之編 2006『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅷ－第23次～第25次調査の記録－』文化財センター調査報告書第51冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 伊藤健司 1983「旦原窯跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会、1～28頁。
- 伊藤健司 1985「南太刀掛遺跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会、1～20頁。
- 岩本正二編 1995a『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ 南部地域北半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。
- 岩本正二編 1995b『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ 南部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2、日本貿易陶磁研究会、55～70頁。
- 梅本健治 2003「まとめ」『三太刀遺跡(Ⅰ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、127～142頁。
- 梅本健治編 2003『三太刀遺跡(Ⅰ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2004『三太刀遺跡(Ⅱ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第3集、(財)広島県教育事業団。
- 梅本健治編 2004『三太刀遺跡(Ⅱ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第3集、(財)広島県教育事業団。
- 梅本健治編 2005『三太刀遺跡(Ⅲ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第10集、(財)広島県教育事業団。
- 岡田博 1988「総括」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告3 亀山遺跡・西光坊遺跡・寺沢遺跡・道口遺跡・唐津池北遺跡・上竹西の坊遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69、岡山県教育委員会、229～240頁。
- 奥田泰将・中村真哉編 1986『広島市佐伯区五日市町所在 池田城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第35集、広島市教育委員会。
- 小倉豊文編著 1963『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第一集 第一次発掘概報、府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会。

- 小倉豊文編著 1964『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第二集 第二次発掘概報、府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会。
- 尾崎光伸編 1992『史跡毛利氏城跡郡山城跡－御里屋敷推定地試掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告3、広島県教育委員会。
- 尾上実 1978「古代末～中世の土器」『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要－藤井寺市野中・羽曳野市軽里所在－』大阪府教育委員会、18～21頁。
- 尾上実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、689～705頁。
- 尾上実 1985「大阪南部の中世土器－和泉型瓦器椀－」『中近世土器の基礎研究』I、日本中世土器研究会、13～21頁。
- 尾上実・森嶋康雄・近江俊秀 1995「瓦器椀」『概説 中世土器・陶磁器』真陽社、315～337頁。
- 鍛冶益生編 1982『道照遺跡 西条バイパス建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 鍛冶益生 1992「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査調査報告(Ⅷ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、9～64頁。
- 河合正治 1986「南北朝動乱と海田湾頭」『海田町史』広島県安芸郡海田町、107～123頁。
- 川越俊一 1981「中・四国地方の瓦器－特に広島県下出土例を中心にして－」『芸備』第11集、芸備友の会、14～25頁。
- 河瀬正利編著 1979『畝観音免古墳群－広島県安芸郡海田町所在－』広島県安芸郡海田町教育委員会。
- 河瀬正利 1988「歴史時代の遺跡と遺物」『廿日市市史 通史編(上)』廿日市市、474～485頁。
- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、511～521頁。
- 高下洋一編 1994『広島市佐伯区五日市町所在 下沖2号遺跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第11集、(財)広島市歴史科学教育事業団。
- 是光吉基編 1978『安芸国分尼寺跡－第1次調査概報－』広島県教育委員会。
- 是光吉基・妹尾周三編 2005『特別史跡及び特別名勝 厳島 菩提院遺跡発掘調査報告－宮島町立歴史民俗資料館収蔵庫建設に伴う発掘調査の記録－』宮島町教育委員会。
- 佐伯博司 1990「石佛遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査調査報告(V) 本文編』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第84集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、9～206頁。
- 佐藤亜聖 2006「瀬戸内の流通－河尻を視野において－」『シンポジウム 大阪湾岸の流通をめぐって』資料集、54～70頁。
- 佐藤亜聖 2010「大阪府下における和泉型瓦器椀の地域相抽出とその意義」『第29回 中世土器研究会』資料集、9～22頁。
- 沢元保夫 1989「鷺田遺跡」『奥田・是石・鷺田・藤田－一般国道375号道路改良工事に伴う発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第81集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、57～123頁。
- 潮見浩編 1967『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群 1966年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見浩・藤田等編 1966『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群 1965年度』広島県安芸郡府中町教育委員会・広島県安芸郡府中町文化財保護協会。
- 潮見浩・小沢毅・鈴木康之ほか 1983『下岡田遺跡発掘調査概要 1982年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見浩・入倉徳裕・小沢毅・鈴木康之ほか 1984『下岡田遺跡発掘調査概要 1983年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見浩・入倉徳裕・鈴木康之ほか 1985『下岡田遺跡発掘調査概要 1984年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2002『郡山大通院谷遺跡(中世編 本文)』吉田町地域振興事業団調査報告書第7集、(財)吉田町地域振興事業団
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003a『郡山大通院谷遺跡(古代編 本文)』吉田町地域振興事業団調査報告書第8集、(財)吉田町地域振興事業団

- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003b『郡山大通院谷遺跡（西地点編）』吉田町地域振興事業団調査報告書第9集、(財)吉田町地域振興事業団
- 鈴木康之 1996「第三章 遺物 土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V 中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、156～226頁。
- 鈴木康之 2002「中世土器の象徴性－「かりそめ」の器としてのかわらけ－」『日本考古学』第14号、日本考古学協会、71～87頁。
- 鈴木康之 2006『中世集落における消費活動の研究』真陽社。
- 妹尾周三 2006「安芸国分寺の伽藍配置と変遷」『考古学ジャーナル』No.545、ニュー・サイエンス社、20～23頁。
- 妹尾周三編 2003『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書V－第14～第16次調査の記録－』文化財センター調査報告書第39冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 田河禎昭 1977「府中町の埋蔵文化財」『安芸府中町史』第二巻、広島県安芸郡府中町、79～151頁。
- 永田千織・藤野次史 2009「安芸地方における中世陶磁器の研究－広島大学東広島キャンパス鏡地区出土資料を中心として－」『広島大学埋蔵文化財調査室研究紀要』第1号、広島大学埋蔵文化財調査室、1～86頁。
- 中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、283～411頁。
- 橋本久和 1980「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』第26巻第4号、考古学研究会、8～16頁。
- 橋本和久 1992「瓦器碗の分布」『中世土器研究序論』真陽社、263～356頁。
- 橋本久和 1998「中四国における中世前期の流通拠点」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、186～194頁。
- 橋本久和 2001「瓦器碗研究と流通拠点－中世前期の広島湾を中心にして－」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』中世土器研究会、99～110頁。
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社。
- 藤岡孝司 1993「道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』東広島市教育委員会文化財調査報告第26集、東広島市教育委員会、93～112頁。
- 藤岡徹也 2006「和泉型瓦器碗の受容とその変化」『中近世土器の基礎研究』XX、日本中世土器研究会、3～20頁。
- 藤野次史 2003「調査の成果」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書I－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、248～275頁。
- 藤野次史・増田直人 2003「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書I－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、25～176頁。
- 藤野次史編 2003『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書I－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室。
- 藤野次史編 2005『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書III－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室。
- 間壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブラリー60、ニュー・サイエンス社。
- 松崎寿和 1954「広島市比治山貝塚」『広島県史跡名勝天然記念物調査報告』第6集、広島県教育委員会、1～15頁。
- 松崎寿和・潮見浩 1961「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻、広島市、114～224頁。
- 松村昌彦編 1979『安芸国分尼寺跡－第2次調査概報－』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1980『安芸国分尼寺跡－伝承地にかかる第3次調査概報－』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1981『道照館跡発掘調査概報』東広島市教育委員会。
- 三辻利一 1990「広島県内出土の瓦器の蛍光X線分析」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(V)本文編』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第84集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、287～291頁。
- 宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財第49集、大宰府市教育委員会。
- 森田稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、356～366頁。
- 山田繁樹・出野上靖編 1998『伎崎城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第163集、(財)広島県

埋蔵文化財調査センター。

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1～26頁。

吉野健志 1996『下上戸遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第10冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。

吉野健志 1998「安芸国中世の土師質土器」『文化財論究』第1集、(財)東広島市教育文化振興事業団、53～76頁。

吉野健志 2000『下上戸遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第29冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。

吉野健志編 2008『大地面遺跡発掘調査報告書－都市計画道路吉行飯田線街路事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第59冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。

吉野健志編 2010『溝口4号遺跡発掘調査報告書－東広島呉自動車道建設事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第70-1冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。

挿図引用文献

第34図 1～6・8～11. 道照遺跡広島県調査区(鍛冶編1982)を一部改変。

7. 道照遺跡広島県調査区(筆者実測)。

12～17. 道照遺跡東広島市調査区(藤岡1993)を一部改変。

18. 西中郷遺跡(青山ほか2009)を一部改変。

第35図 1～17. 大地面遺跡(吉野編2008)を一部改変。

第36図 18～27. 大地面遺跡(吉野編2008)を一部改変。

28～29. 安芸国分尼寺伝承地遺跡(松村編1979)を一部改変。

第37図 1～5. 鷺田遺跡(沢元1989)を一部改変。

6. 石佛遺跡(佐伯1990)を一部改変。

7. 下上戸遺跡(吉野編1996)を一部改変。

8・9. 下上戸遺跡(吉野編2000)を一部改変。

10. 溝口4号遺跡(吉野編2010)を一部改変。

11. 小谷黄幡遺跡(鍛冶1992)を一部改変。

12. 南太刀掛遺跡(伊藤1985)を一部改変。

第38図 1～4. 太田川放水路遺跡(筆者実測)。

5・6. 比治山第2貝塚(筆者実測)。

第39図 1. 下岡田遺跡(潮見・藤田編1966)。

2. 石井城第II号遺跡(田河1977)を一部改変。

3～6. 畝観音免第1号古墳(筆者実測)。

第40図 1～12. 下沖2号遺跡(高下編1994)を一部改変。

第41図 1～5. 中垣内遺跡(阿部編1987)を一部改変。

6～8. 地御前南町遺跡(筆者実測)。

9～12. 池田城跡(奥田・中村編1986)を一部改変。

第42図 1～15. 菩提院遺跡(是光・妹尾編2005)を一部改変。

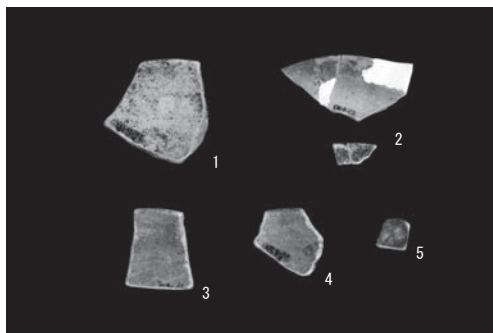
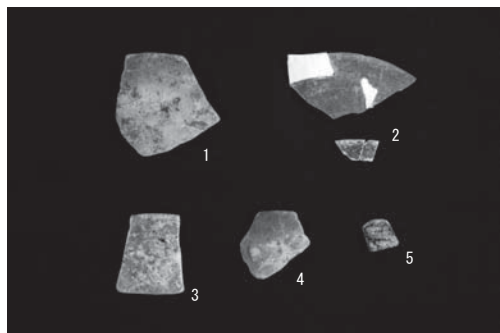
第43図 1～6・9. 三太刀遺跡(梅本編2003)を一部改変。

7・8・10～14. 三太刀遺跡(梅本編2005)を一部改変。

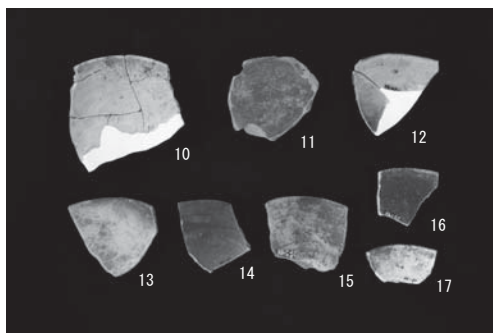
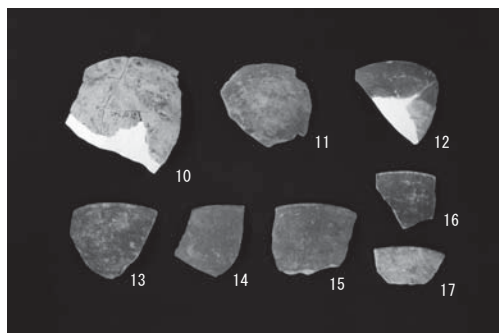
15. 郡山大通院谷遺跡(新川・重森・沖田編2003a)を一部改変。

16. 郡山大通院谷遺跡(新川・重森・沖田編2003b)を一部改変。

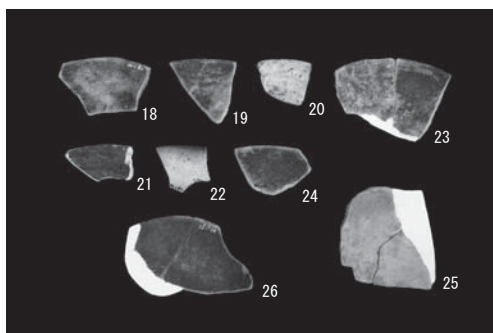
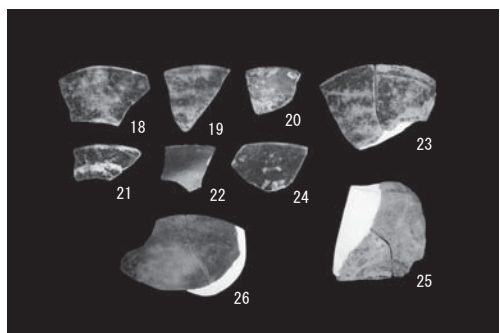
図版 1 鏡西谷遺跡 B 地区・C 地区出土の瓦器



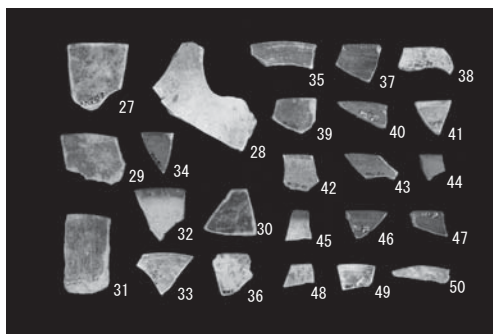
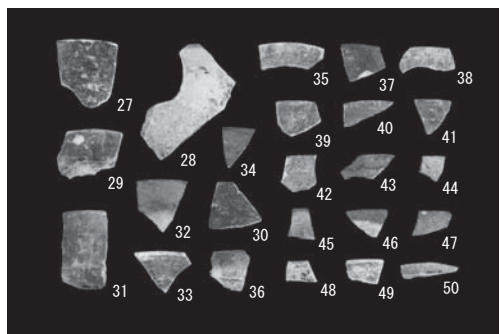
B 地区出土瓦器碗 (1~4)・皿 (5) (左：外面、右：内面)



C 地区 S B 01 出土瓦器碗 (左：外面、右：内面)



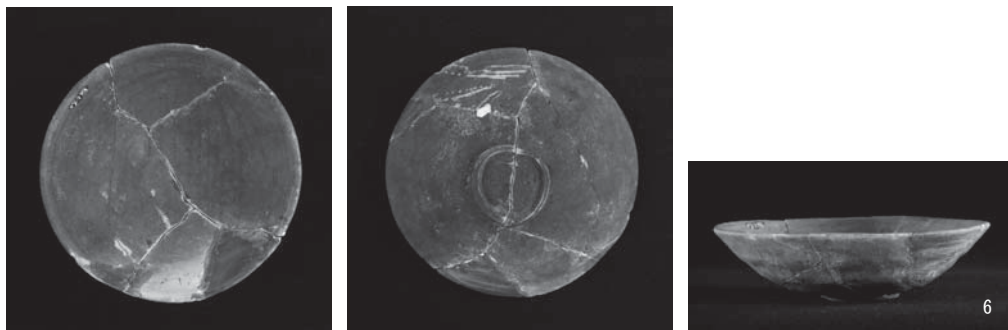
C 地区 S B 01 出土瓦器碗 (左：外面、右：内面)



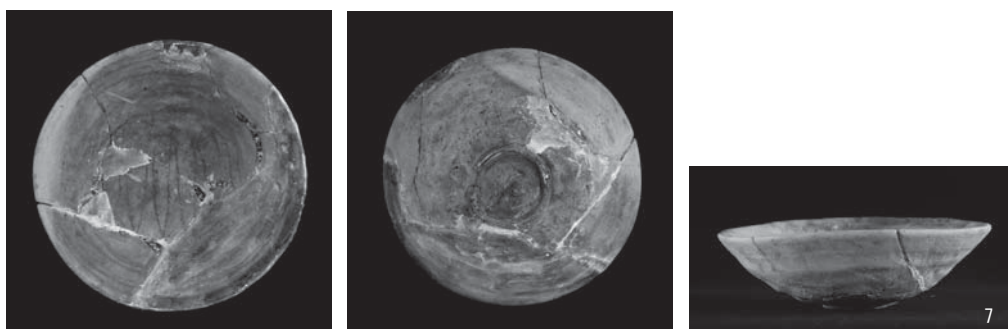
C 地区 S B 01 出土瓦器 (左：外面、右：内面)

※写真内の数字は第 4 図および第 7~9 図の番号に一致する

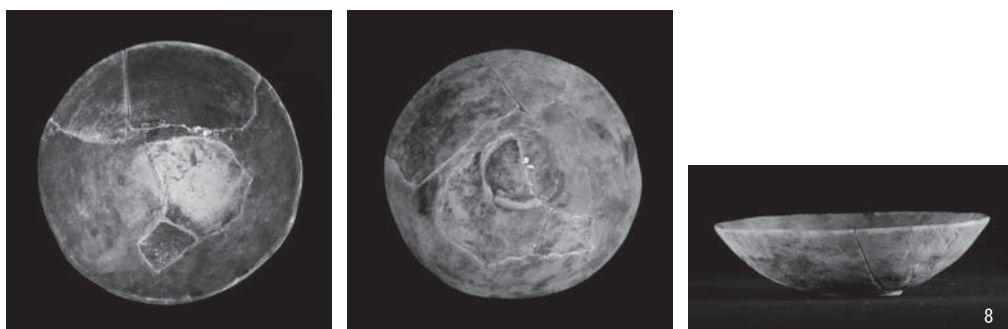
図版 2 鏡西谷遺跡C地区 (S B 01) 出土の瓦器



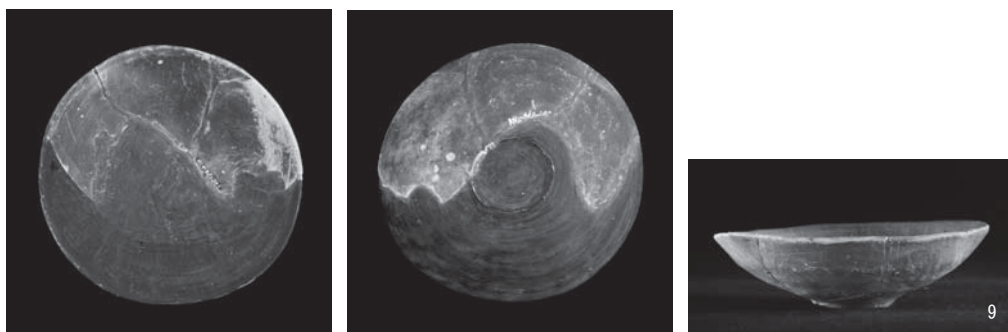
C地区S B 01 出土瓦器碗 (左：内面、中央：外面、右：側面)



C地区S B 01 出土瓦器碗 (左：内面、中央：外面、右：側面)



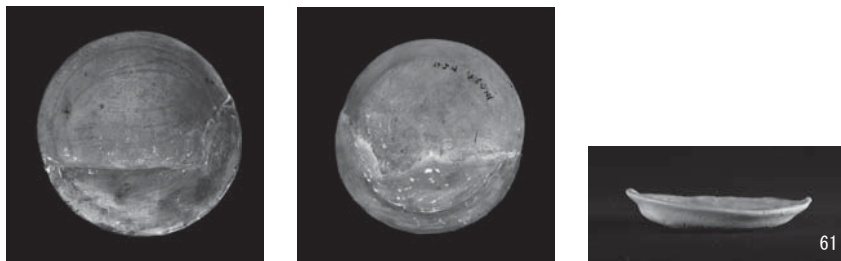
C地区S B 01 出土瓦器碗 (左：内面、中央：外面、右：側面)



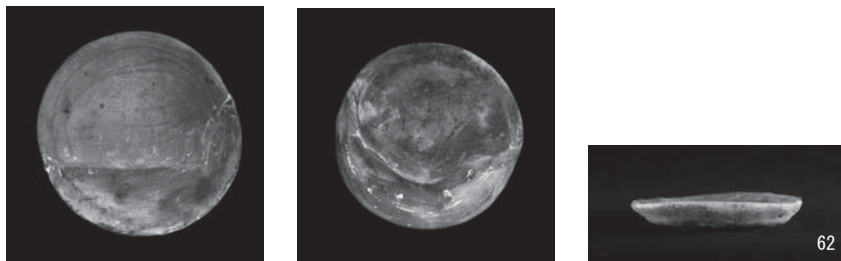
C地区S B 01 出土瓦器碗 (左：内面、中央：外面、右：側面)

※写真内の数字は第6図の番号に一致する

図版3 鏡西谷遺跡C地区（SB 01）出土の瓦器



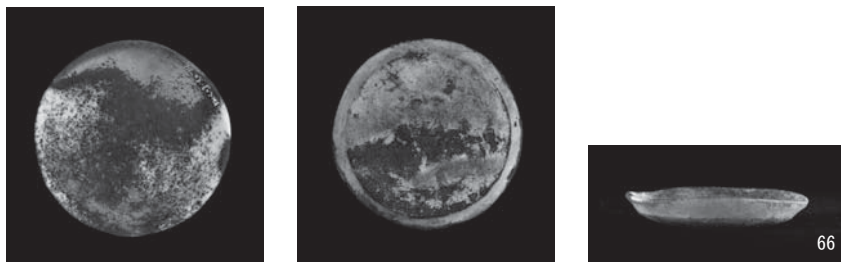
C地区SB 01 出土瓦器皿（左：内面、中央：外面、右：側面）



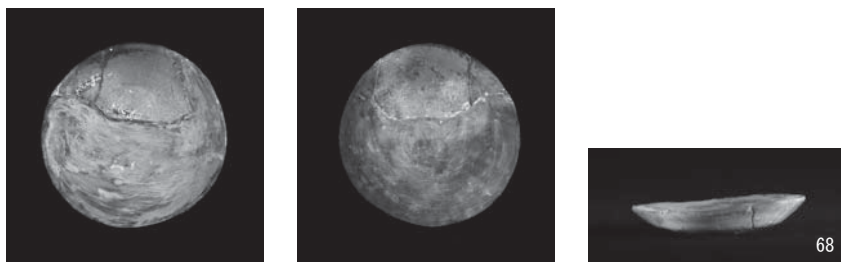
C地区SB 01 出土瓦器皿（左：内面、中央：外面、右：側面）



C地区SB 01 出土瓦器皿（左：内面、中央：外面、右：側面）



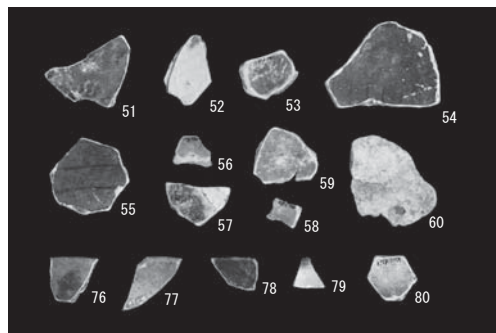
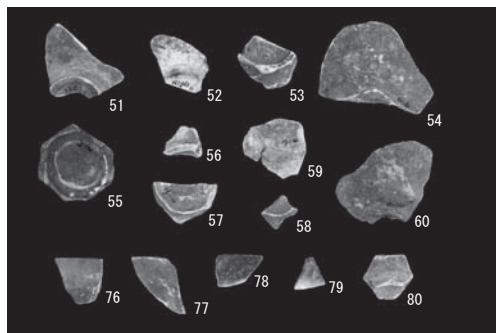
C地区SB 01 出土瓦器皿（左：内面、中央：外面、右：側面）



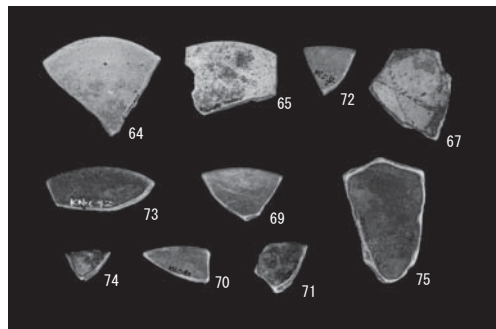
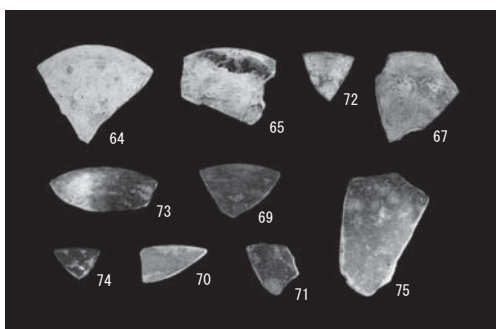
5. C地区SB 01 出土瓦器皿（左：内面、中央：外面、右：側面）

※写真内の数字は第10図の番号に一致する

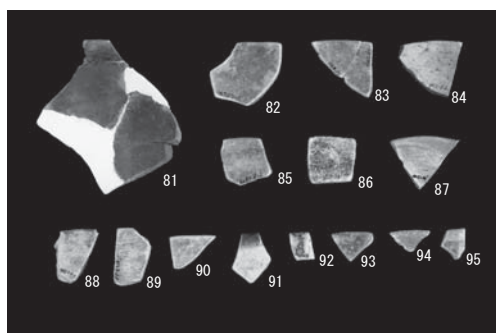
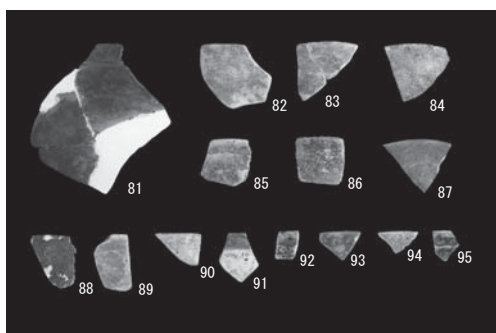
図版4 鏡西谷遺跡C地区・E地区・F地区、山中池南遺跡第2地点出土の瓦器



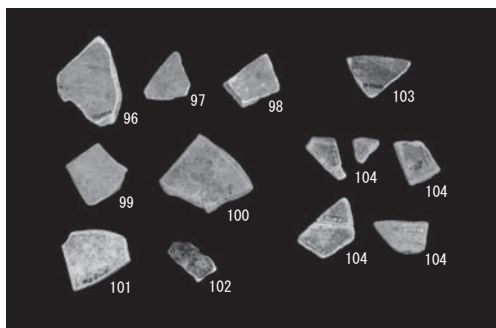
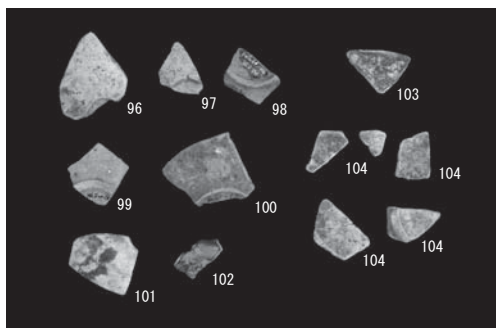
C地区S B 01 (51～60)・C地区遺構外 (76～80) 出土瓦器塚 (左：外面、右：内面)



C地区S B 01 土瓦器皿 (64・65・67・69～74)・坏 (75) (左：外面、右：内面)



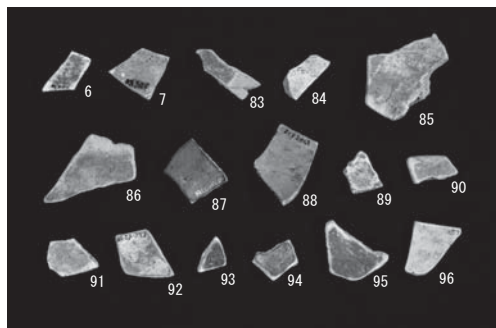
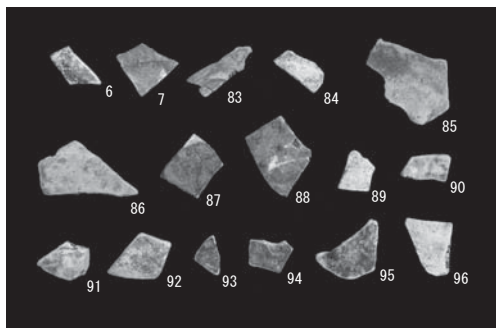
E地区土瓦器塚 (左：外面、右：内面)



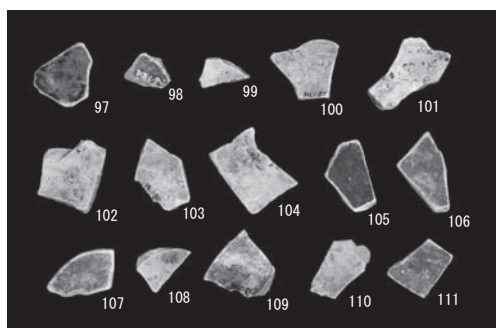
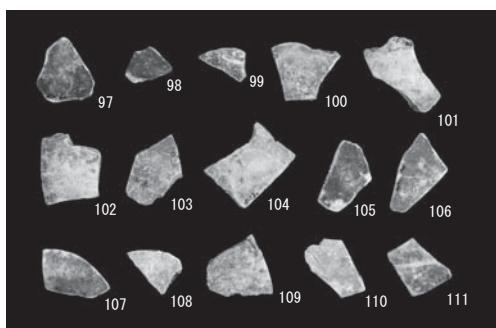
E地区土瓦器塚 (96～100)・皿 (101・102)・F地区出土塚 (103)、山中池南遺跡第2地点出土塚 (104) (左：外面、右：内面)

※写真内の数字は第10・11図および第13図の番号に一致する

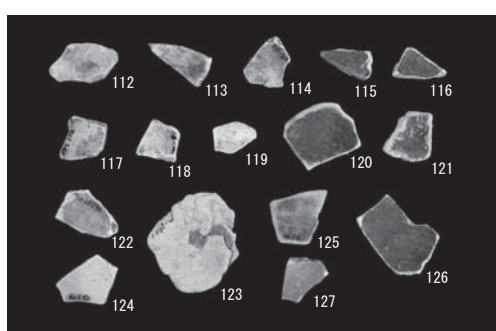
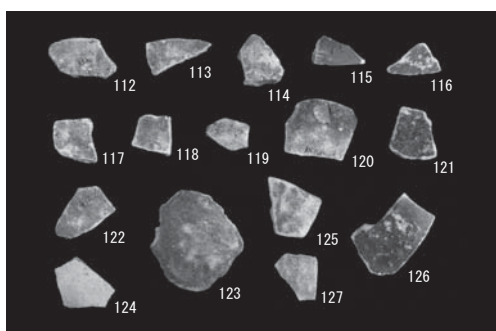
図版5 鏡西谷遺跡B地区・C地区出土の瓦器



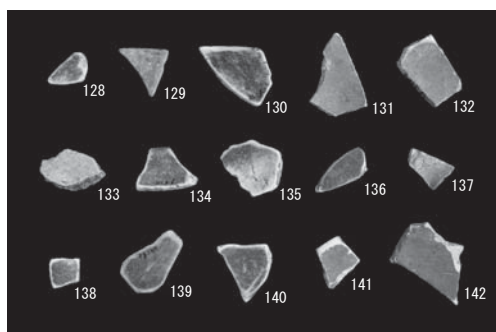
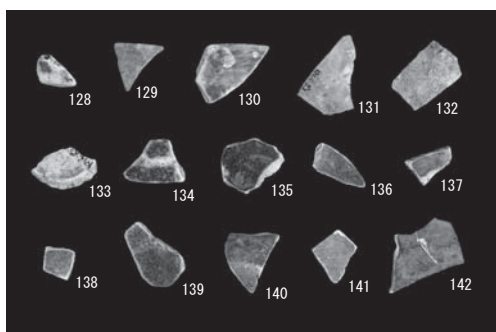
B地区(6・7)・C地区(83～96)出土瓦器塊(左:外面、右:内面)



C地区出土瓦器塊(97～111)(左:外面、右:内面)



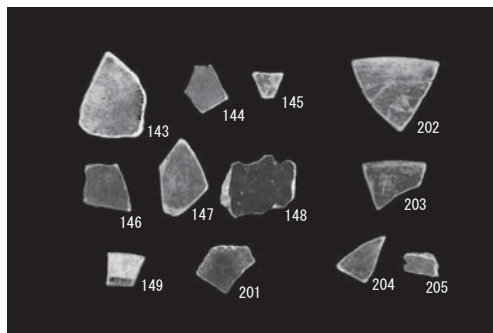
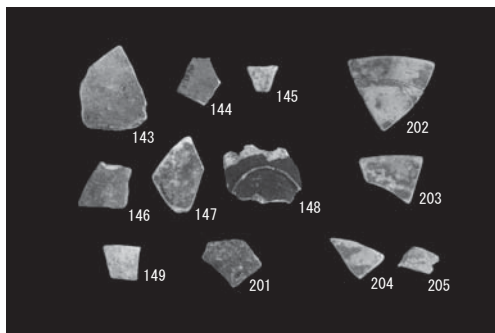
C地区出土瓦器塊(112～119・121～127)・皿(120)(左:外面、右:内面)



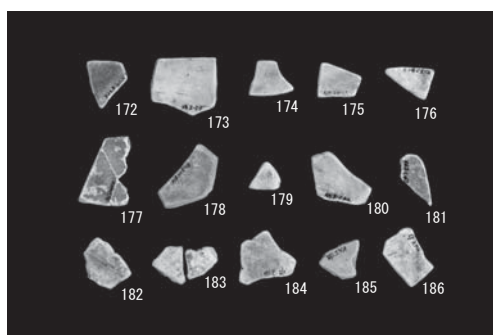
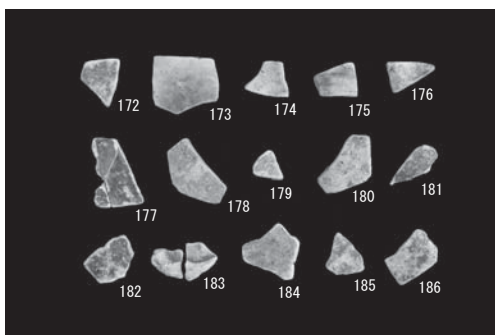
C地区出土瓦器塊(128～133・135～138・141・142)・皿(134・139・140)・坏または皿(135)
(左:外面、右:内面)

※写真内の数字は付表1-5・6・7・8の資料番号に一致する

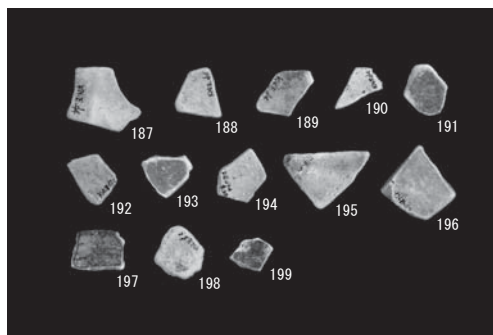
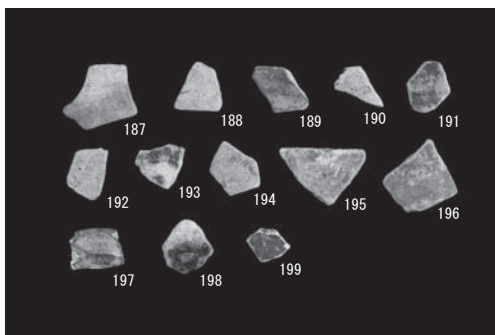
図版6 鏡西谷遺跡C地区・D地区・E地区・F地区ほか出土の瓦器



C地区 (143～148)・D地区 (149)・F地区 (201)・出土地区不明 (202～205) 出土瓦器碗
(左：外面、右：内面)



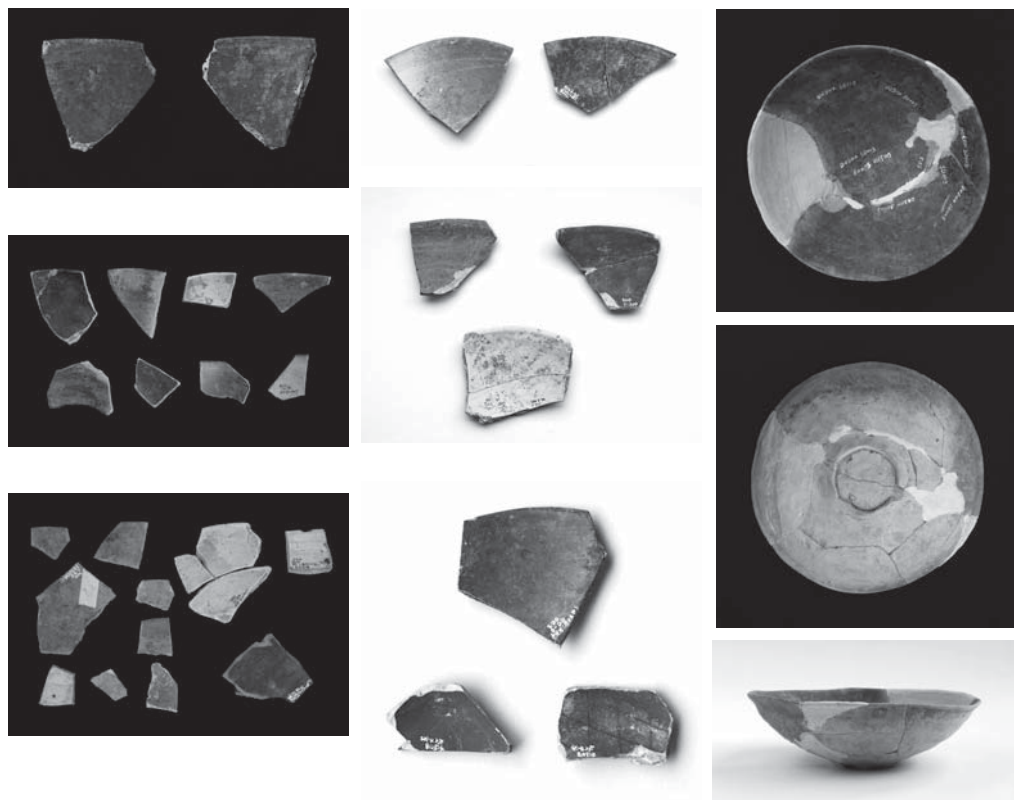
E地区出土瓦器碗 (172～186) (左：外面、右：内面)



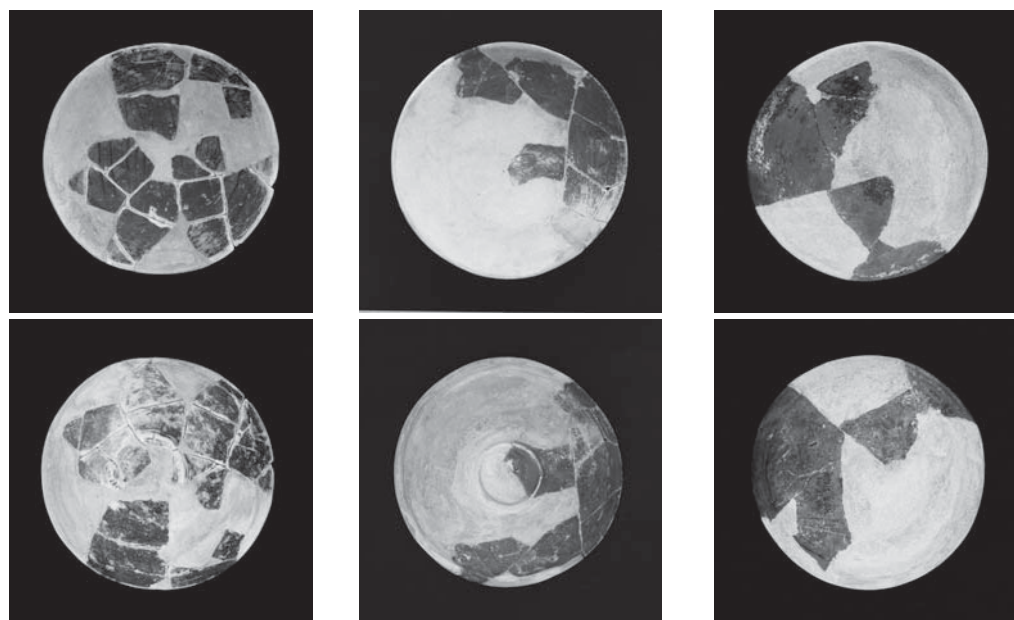
E地区出土瓦器碗 (187～196)・皿 (197・198) (左：外面、右：内面)

※写真内の数字は付表1-8・9・10の資料番号に一致する

図版7 東広島市道照遺跡・大地面遺跡出土の瓦器

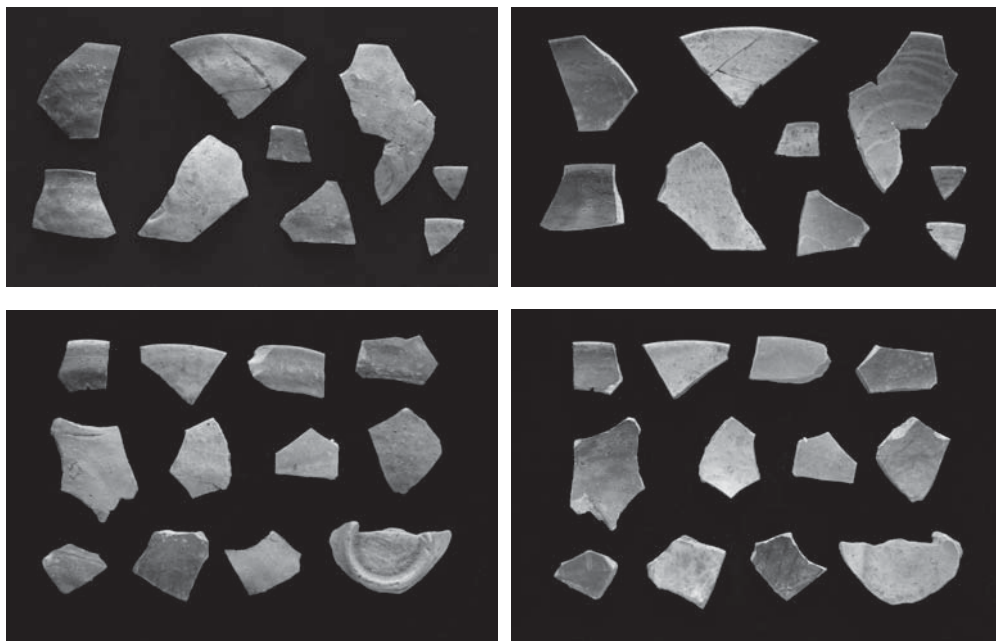


東広島市道照遺跡出土瓦器碗（左・中央：内面、右上：内面、右中央：外面、右下：側面）

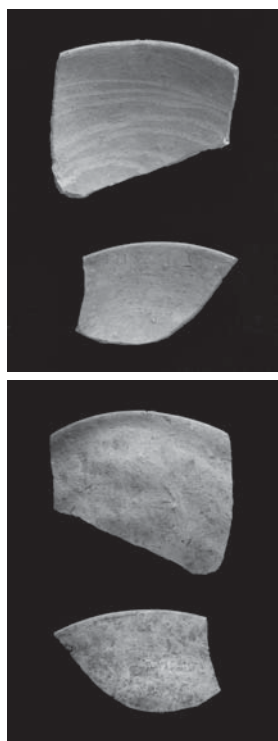


東広島市大地面出土瓦器碗（左・中央）・皿（右）（上：内面、下：外面）

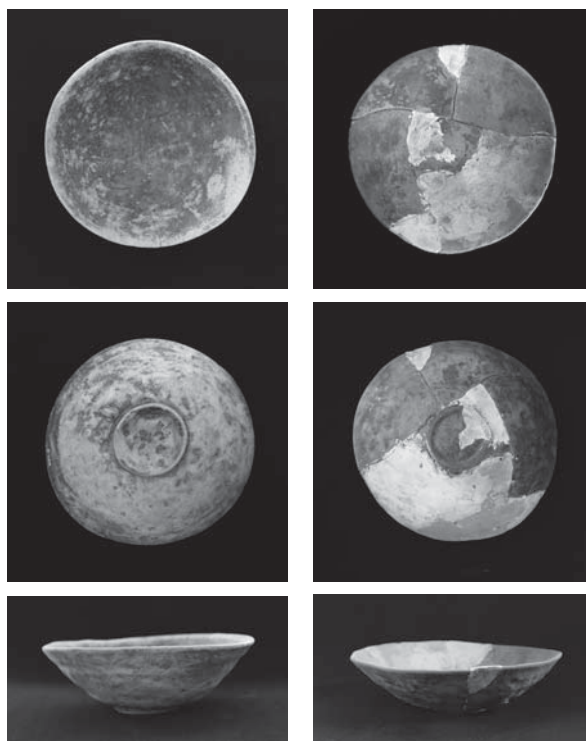
図版 8 広島市太田川放水路遺跡・比治山第2号貝塚、海田町畝観音免第1号古墳出土の瓦器



広島市太田川放水路遺跡出土瓦器碗 (左：内面、中央：外面、右：側面)

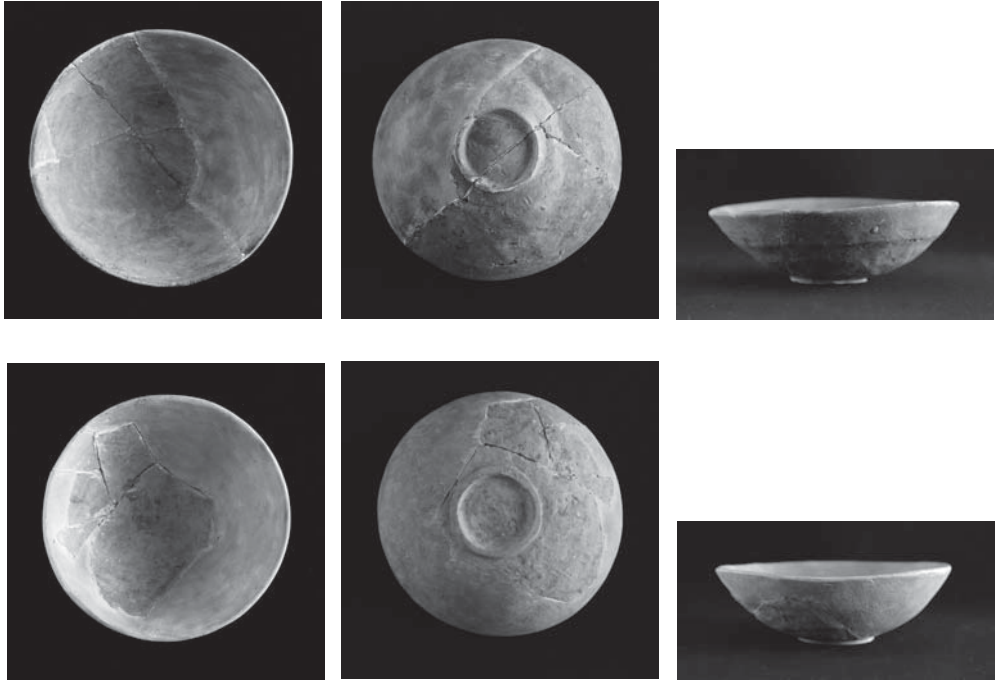


広島市比治山第2号貝塚遺跡出土瓦器碗
(上：内面、下：外面)

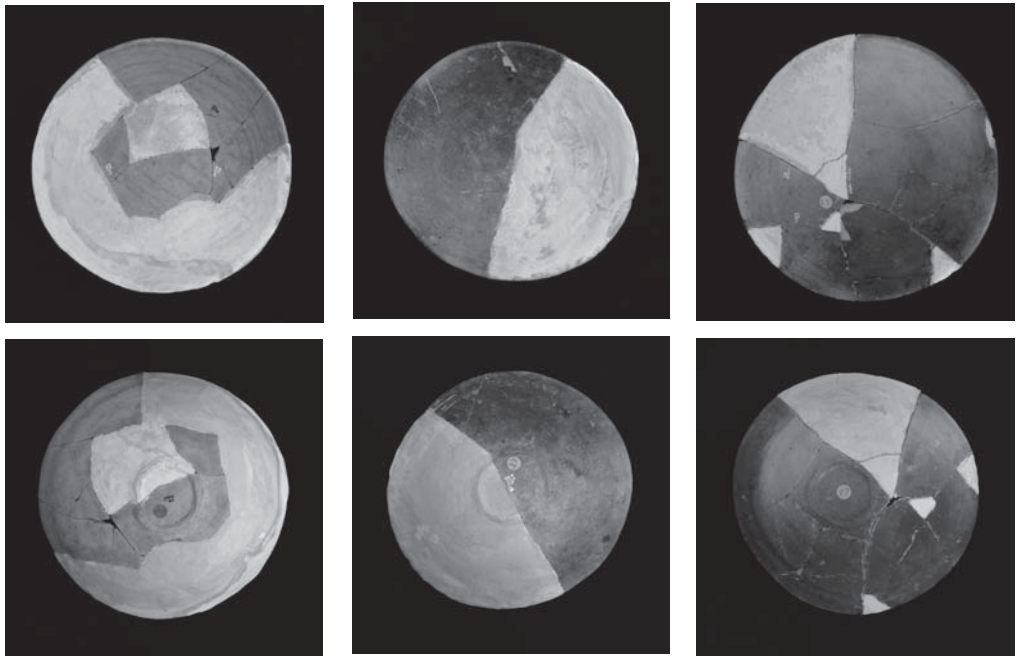


海田町畝観音免第1号古墳出土瓦器碗
(上：内面、中央：外面、下：側面)

図版9 府中町水分神社遺跡、廿日市市菩提院遺跡出土の瓦器

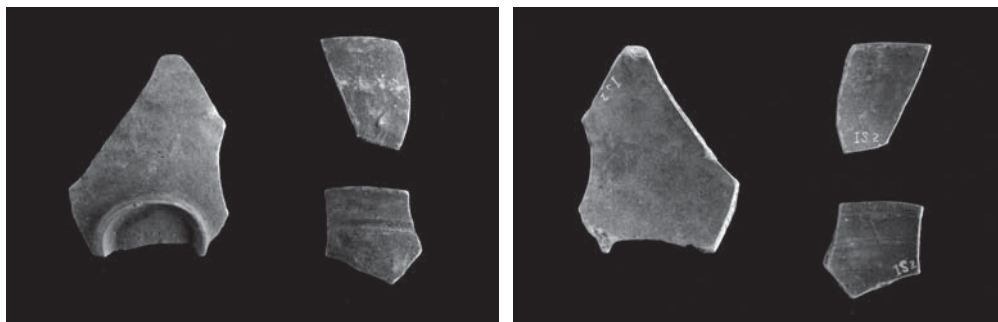


府中町水分神社遺跡出土瓦器碗（左：内面、中央：外面、右：側面）

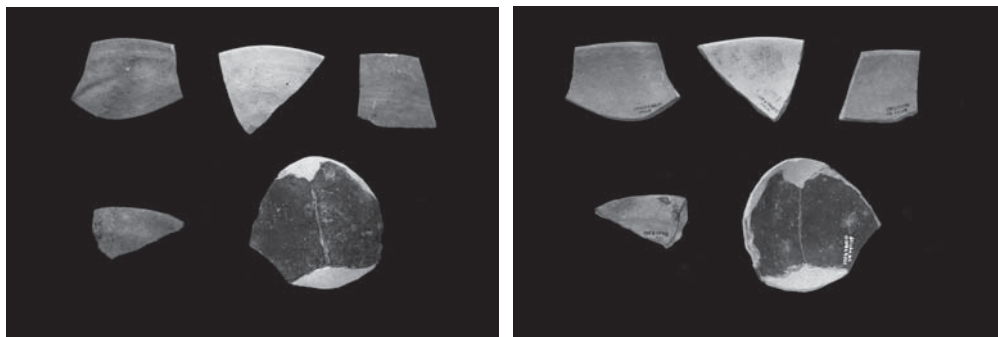


廿日市市菩提院遺跡出土瓦器碗（上：内面、下：外面）

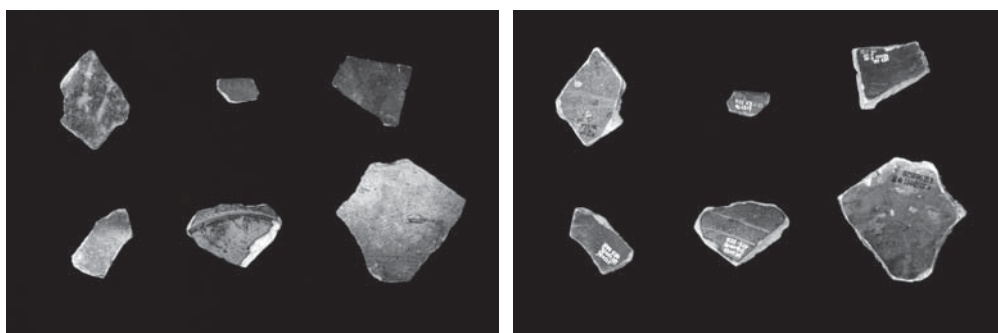
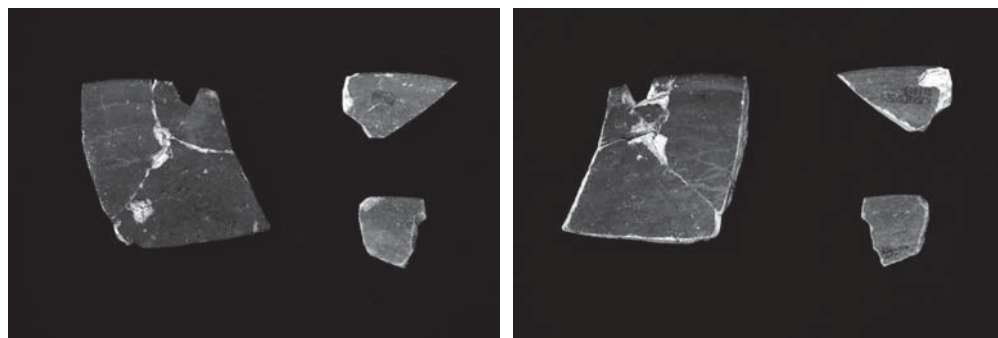
図版 10 府中町石井城第Ⅱ号遺跡、三原市三太刀遺跡、安芸高田市郡山大通院谷善提院遺跡出土の瓦器



府中町石井城第Ⅱ号遺跡出土瓦器碗（左：外面、右：内面）



三原市三太刀遺跡出土瓦器碗・皿・坏（左：外面、右：内面）



安芸高田市郡山大通院谷遺跡出土瓦器碗（左：外面、右：内面）